
はるか3 p tシューター

yuzoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はるか3ptシューター

【Nコード】

N2526U

【作者名】

yuzoku

【あらすじ】

3度のメシよりシユートだけは大好きな主人公のハルカ。でも身長は低いわ、ドリブルその他の能力は中の下だわ、シューティングガードなのに肝心のスリーポイントはダメダメだわ…

そんな彼が入部した翔泉高校のバスケット部にはセンパイは1人だけ！
？これは気合い入れて強くなるっきゃない！！

人数はギリギリの5人からスタートした翔泉男バスが、全国目指すようなチームになるまでを描く（予定の）青春ストーリーです。

時たまバスケット部員とまわりのゆかいな仲間たちのほのぼの学園スト
ーリーもはさんでいけたらと思います。

はるかなるスタート（前書き）

続編となる「センター姫とスモール王子」を書きましたので、もしそちらを先に読まれた方はその過去編としてお楽しみください。

はるかなるスタート

スツ、シユパツ。
スツ、シユパツ。

誰もいない体育館に、小気味良くボールがネットに当たる音が響く。
「くうく百発百中！、やっぱオレツて天才!？」
この音を聴くためだったら何時間でもシュートを打っていたい気分だ。

「おう、やってるねえ。君もバスケ部希望の一年生？」
(やばい、今の聞かれた!?) 「あ、はい！一年の東遥火ひがしハルカと言います！」

「ハルカくんね。オレは3年の緑川辰吉みどりかわたツキキチだ、よろしく。」
「その堂々として落ち着いた振る舞い、ってことはもしかしてキャプテンさんですか？」

「…ああ、まあそうなるかなあ。」
「改めてよろしくお願いします!!」
「いやいやそんな気を使わなくなつたていいよ。」

「他の部員さんは今日来てないんですか？オレ昨日入学式なのに風邪引いちゃって。早く皆さんに顔覚えてもらえたらなって思ってたんですけど。」

「だいじょうぶ、もう少ししたらみんな来ると思うよ。他の一年生は昨日から来てくれてたし。あつ。そうだ彼らだよ」

「ちはーつす。」「ちいつす。」「こんちやあゝすー!!」
それぞれ違ったテンションで挨拶しながら、3人の少年が体育館に入ってきた。

「はいはい、そのオチビさんコンビけんかしない。でもバスケットで身長要素は大事だからね。で、カズくん身長は？」

「…166cmです。」

「お前、それホントなんだろうな！？2cmくらいサバ読んでるだろ！」

「正式ですう、身体測定で測ったばつかですう」

こんな言い合いが続いた結果、おれ達はタツキチ先輩の恐ろしさを練習前から知ることになった。

はるかなるスタート（後書き）

このたびは「はるか3ptシューター」を読んでいたいただきありがとうございます。ご理解をありがとうございます。これからハルカを中心に話が進んでいくのですが、もし「このキャラの日常が見てみたい」「他のキャラの中学時代バスケのエピソードは？」（過去編）、「などご要望ありましたらおっしゃってください。

もちろん普通の感想等もよろこんでお待ちしております。

思いがけない1on1

「さてと、軽くウォーミングアップすんだら1on1やろうか。てつとり早くみんなの実力もしておきたいし。」

練習初日から1on1か、人数少ない部も悪くないな。

「じゃあ身長の関係もあるしシュースケとヨシト、ハルカとカズで。」
「やっぱりカズとになるのか、コイツにだけは絶対負けたくねえ！」

シュースケとヨシトの試合は二人とも身長があるだけあって迫力があつた。シュースケはドリブルがうまく、ペネトレイトからのシュートがよく入つた。一方のヨシトは長身を生かして、相手の手の届かない位置から起用にシュートを決めていた。いわゆるフックシュートというやつだ。

「ふむ、なるほど。よし、オツケーだ。じゃ次はハルカとカズ」

「っしやああ〜！」「来いやオラ〜！」

初対面にしてもうこんな関係になつてしまつていた。

まずはカズからの攻めだ。中学の時からPGと言つただけあつてドリブルが上手い。とにかく速くてついていくのがやつとだった。完全にディフェンスをかわされた後はレイアップで簡単に決められてしまった。オレの攻めではドリブルの際に何度もスティールを決められ、シュートの形にまで持っていかせてもらえなかつた。

その後はタツキチ先輩に我が翔泉高校伝統の練習メニューを教えてもらいながら、オレの練習初日は終わった。

練習の翌日

練習翌日の学校つてのはかつたるい。

「はあ〜」

「どうしたんだよ、ハルカツち！朝から元気ないなあ〜」

こいつは緒方弘明^{おがたひろあき}、通称ヒロ。高校で初対面だったのに入学式前後のなんやかんやの行事の間に仲良くなってしまったって感じ。

「別にい。ただ昨日の部活の練習がきつくて疲れてるだけ。」

「ふうん、他の人のバスケのレベル高くてびびっちゃったとか？」

「そ、そんなわけねえし、オレもうすでにエース候補だし！」

「はいはい。でも風邪で休んだ次の日からすぐに部活行くなってホントバスケ大好きだよね〜」

「まあね！やつぱさ、あのシュートがシュパツと決まったときの感覚がたまらないっていうかさ！！」

「お、元気でできたじゃん　そういうえばバスケ部って何人いんの？」

「5人」

「うそ！？」

「ホントだよ〜。実はそれは悩みの種の一つなんだよね。3on3すらできないし。」

「それならオレっちが入ってあげようか？」

「あ、ごめん初心者お断りなんだよね」

「ちょっと冗談なのにマジなトーンで返さないでよ〜」

このヒロってやつはふざけてんのかお人よしなのかイマイチまだわからない。

「あ〜誰でもいいから（経験者の）6人目欲しい〜」

「勧誘とかしてないの？」

「知らなくい、オレ自分がプレーできればなんでもいいし。」

「ハルカツちって興味あること以外はホント無気力だよね〜。ま、

なんかオレでも力になれることあったら言ってよね。この最強の帰宅部生に！」

「はいよ、その気持ちだけ受け取っておくよ。」

6人目？

ヒロにバスケット部の愚痴やらなんやらを言っていた放課後、つまり練習2日目になると本格的に練習が厳しくなった。

まずは距離制限なしの30分走。続いて一時間みっちりフットワークを行ってから、30分ダッシュしながらのパス出し&シュート練習といった感じだ。時間はちょうど6時近くになり、ようやくこれで終わりかと思った時にタツキチ先輩が言った。

「よし今日は3on3をやろう。」

「え〜！？」

オレは驚いて今日の声を出してしまった。だって5人しかないじゃん。決してもうバテてまだやんの！？っていう気持ちはこれっぽちもないからな！

「遅れてすいません」

そう言いながら一人の女の子が入ってきた。

うん？隣で練習してた女子バレー部の子かな？でもネット片づけ始めてるし、さすがに来るの遅すぎないか？

「やぁお疲れさま！」

「はぁはぁ、すいませんタツキチ先輩。一人も見つかりませんでした。」

「しょうがないよ、なかなか敷居が高いからね」

さっきからタツキチ先輩とこの女の子は何の話をしているんだ？

「そうなんですよ、せっかく身長高い子見つけても『いや、オレ疲れるの苦手なんで』とか根性ないことという人ばっかで…」

あっ、その小さめな人は誰ですか？

「あっ、ハルカくんとは初めてだったよね。この子は…」

「あつもしかしてこの人新しく入ったマネージャーさんですか？いやあ助かるう。人数少ない部とはいえ、一人でマネージャーって大変そうだったし！」

「小さめってオレのことかー！？言つときますけど、れっきとした選手ですから！シューティングガードですから！」

「ごめんなさ〜い、てつきりマネ希望かと。そうよねバスケは身長じゃないもんね。実際カズくんも十分小さいし。」

「オレとコイツを一緒にするな〜！昨日の1on1では20-6でオレの圧勝だったんだからな！」

「カズくんから6点も取れたつてことは素人じゃなさそうね、良かった。アタシの勧誘は空振りに終わったけどようやくこれで5人そろいましたねタツキ先輩！」

「そうなんだよ！ハルカくん、彼女は黒川沙耶くろかわさや。君らと同じ一年生だ。よし、じゃあさつそく3on3はじめようか。」

「ちょ、ちょっと待ってください。結局5人しかないじゃないですか。」

「見て分かんないかな〜。アタシが6人目になるつてこと。」
「ええ〜〜！」

本日二度目の驚嘆音。確かに短髪だし目は切れ長だし、なんかスポーツはできそう。しかもオレより若干背が高いつばいぞ…

「中学の時は県ベスト8のチームでレギュラーやってたからそこらの高1男子よりよっぽど強いわよ。身長だつて170センチあるし。」

「じゃあなんで女子バスケ部に入らなかったの？」

「それは…」

「はいはい、おしゃべりはそこまで。じゃ3人ずつに分かれて試合やるよ。まずはオレとハルカとサヤちゃん。他はその残りで。」

試合は身長のミスマッチもあるからオレ達のチームが不利かとおもつたけど、サヤの女子ベスト8は伊達じゃないらしく点数はほぼ五

分だった。というより、思っていた以上にダントツでタツキチ先輩がうまかった。ゲームメイクから俺たちへの絶妙なパス出し、チャンスがあれば簡単に一人で点も取りにいけるしまさにオールラウンドプレイヤーってやつだ。

オレ？まあ点数とつたりましたよ、チーム全体で33点のうち4点ほど…

一方的2on2とエンドレス1on1

女子マネージャーのサヤを含めての3on3から一週間。あれからゲームらしいことはせず、ひたすらにフットワークメニュー中心の練習が続いていた。練習メニュー等はタツキチ先輩とサヤが話し合っただけで決めているらしいが、あの二人の実力を見せつけられた後では文句を言う気力さえない。

それにしても不思議だ。今まで部員一人しかいなかったこの翔泉男子バスケット部といい、県ベスト8になりながら、その男バスのマネになってるアイツといい。もしかしてあの二人付き合ってるのか？そんな疑いまでもちたくなる。が、別にあの気の強そうなサヤが彼女だと気疲れするだけだなと思い、あまり羨ましくもおもわねえな。

そんな彼女は今日は練習には来ていないようだ。

いつものように下校時間ギリギリまでしごかれるのかと思っていたがタツキチ先輩から

「今日のいつもの練習は短めに切り上げるからなあ」

と天からの恵みのような一声があったのでいつもより割増しではりきってしまった。

サヤは練習開始から一時間ほど遅れてやってきた。

「練習試合の相手決まりましたー！」

「よし、いったん練習止めようか。で、サヤちゃんいつになった？」

「10日後の日曜日です。」

「えっ、ちよっと早くないっすか？俺らまだほとんどキソ練しかしてませんけど。」

「だいじょぶ、だいじょぶ。ヨシトは心配性だなあ。」

「じゃあー！試合だ！！」「ガンガンシュート決めてやんぜえ！」

「あの無邪気によるこぶちビツ子コンビ見習いなよ」

「は、はあ〜い」

「じゃあ今から個人練習に移りたいと思う。」

「はい！」

「インサイド組は片方がサヤちゃんとオレがオフェンスやるから、それを二人で徹底的にしのごこと。サヤちゃんにはパス出し中心にやってもらうから実質1対2だからね。ぽんぽん入れられるようだとペナルティあるからね。」

「ういっす。」

「ガードのチビツ子コンビは1on1をオフェンス20秒以内で攻めるんだ。それを30分。あと決めるときは必ずジャンプショットできること。あつ、インターバルはないからそのへんはよろしくね〜。」

「まじっすか！？そんなことしたらぶっ倒れちゃいますよ」

「だいじょうぶだよ、そのためにカワイイマネージャーちゃんがいるんだから」

「優しく介抱してあげるわよっ。」

「倒れないように死ぬ気でがんばります！」

「ちよつとハルカどういう意味！？」

タツキチ先輩の突破力はやっぱりすごくて二人のディフェンスの穴をぬって何度もシュートを決めていた。その度に二人はコート内をダッシュさせられていた。ぶっちゃんけ練習よりペナルティの方がきつく見えたのは気のせいかな？

オレら二人はへろへろになりながらもお互いに意地を張りあいながら1on1を続けた。ここ一週間のフットワークでディフェンス力がついたとはいえ、7:3でカズのほうが有利だった。その結果、先にオレが介抱される目にあつたのは言うまでもない。

一年ばっか

キソ練から解放されたと思ったら、地獄のような2on2と1on1でそれぞれ徹底的にしごかれたオレ達一年4人は少しずつだが上達していった。ヨシトはセンターらしくゴール下では堂々としてきた。シュースケはファール気味の危なっかしいでディフェンスから堅実なそれに少し変わっていった。

一方オレはカズに簡単に突破されることはなくなった。1on1でフリーで打つことは難しいためシュートへいくタイミングを見つめるのがうまくなった。

そして練習試合当日を迎えた。確かに練習は死ぬほどしたが相手チームへの対策などは一切していない。

というかどこの高校かさえまったく聞かされていない。

「相手チームにわざわざ来てもらうんだからいつもより念入りにモツプがけしとけよ」

「ういゝすー！」

しばらくして10人近くの集団が体育館に入ってきた。

「今日対戦させていただく猛将高校です、よろしく願います！」

「！」

「よろしく願いますー！」

「えっ、猛将高校ってあの県ベスト4常連の!？」

「聞いてないっすよ、タツキチ先輩！」

「っていつかよくウチとの試合引き受けてもらえましたね。」

「まあそれに関してはちょっとしたコネがあつてね」

「久しぶりだな、タツキチ。今日はよろしく。」

「こちらこそよろしく、ウサ」

なるほど、タツキチ先輩の知り合いがいたわけか

「悪いな、オレ以外一年ばっかでしかもろ人ぎりぎりのチームにさ。」

「

「いや、こつちの今日のメンツも似たようなもんさ。一年ってことには変わりないし。オレはあいつらの教育係担当ってわけ。」

「お前はどっしたんだ？怪我でもしたのか？」

「いや、ぴんぴんしてるよ。ただ監督が代わってさ。『チビは使わない主義』らしいのよ。ま、お互いいろいろあるけど今日はがんばろうな！」

「おう！」

「さ、お前ら気合い入れてくぞ！天下の猛将高校と言っても今日は相手も一年生ばっからしい。練習でやったことしっかり思い出しなからやるぞ！」

「ういっす！」

序盤は

試合前のウォーミングアップをしてたら猛将高校側から時折変な掛け声が聞こえる。

「こらー、ウルフかつこつけてないで確実なレイアップで決めろ！」
「おいヒヨウ、目立たないようにサボってもバレバレだぞ！」

「タツキチ先輩、なんかあの人たちの呼び方変じゃないですか？」

「あゝあれは猛将高の伝統でね、その見た目とかプレイスタイルなんかから動物に例えたあだ名をつけるらしいんだ。今年の一年生はかなり有望らしくて強そうな名前もらってるらしいよ。今回のスターターはPGがサル、SGがヒヨウ、SFがウルフ、PFがトラ、Cがクマらしいよ。ちなみにさつきしゃべってたヤツの本名は清清水^{みず}。そんであだ名はウサギらしいよ。まあ強豪校の中で170センチそこそこじゃしょうがないよね。ていうかわいーあはっ。

「じゃあオレが猛将行ったら確実にミジンコとかゾウリムシになりそうだね！」

「うん、ハルカならありえるかもね。」

「ちよっとセンパイそこは否定してくださいよ。でもいいっすねあだ名。自分の役割が明確になる感じがするし何よりカッコイイっすよね！」

「たしかにね。じゃあそのうち君らの二つ名も考えといてあげるよ。」

「やった〜！」

「その代り名前負けしないように死ぬ気で上手くなること！」

「おす！」

「それじゃあ試合を始めますのでスターターの選手はコート内に入

「つて準備してください。」
試合はヨシトと相手のクマとのジャンプボールで始まった。ジャンプ力ではヨシトの方が上なように見えたが身長之差もあって相手ボールになった。そこからウルフがボールを持つとあっという間にゴールを決められてしまった。

ぶっちゃけていうと相手は5人ともかなり強かった。まだ入部してお互いチームプレーが取れていないにも関わらず、個人技で圧倒されてしまった。それでも試合が拮抗したままでいられたのはタツキ先輩のおかげだ。カットインして相手のディフェンスをひきつけておいて絶妙なタイミングで味方にパスを出す。さらには一人でドリブルで3人をかわした時などこれが高校と中学の違いだよ　と言わんばかりのスーパープレーだった。

センパイがキーマンだと知った相手チームはトラとヒョウでダブルチームをかけてきた。

その途端に翔泉の得点は動かなくなってしまった。

4人で引つpegす

一方的に6点連続で取られたときにすかさずサヤがタイムアウトを取った。

「もう何してんのアンタ達！センパイが抑えられただけでオフエンスぐっただぐじゃないの！」

「面目ない。」

「で、PGのカズくんはこの状況をどう見るわけ？」

「たしかにタツキ先輩に頼りすぎてた面は大きいよな。まずはセオリー通りPGのオレから攻撃をスタートさせよう。シユースケはとにかく走り回ってディフェンスのウルフから一歩でいい、リードしてくれ。そしたらパスを出すからゴールまで突っ走ってくれ。」

「わかった。」

「ヨシトもただ立っているだけじゃダメだ。体格で負けてる分シュートしやすい位置まで動いてくれ。」

「りょうかいっす」

「そしてハルカだ。相手はセンパイにダブルチームをつけてる分、必ずお前にはチャンスが多く回ってくるはずだ。2ptでいい。フリーになったらパスするから確実に決めてくれ。」

「えっ、なんでシユーターなのに3ptじゃないんだよ」

「うるさい異論は認めない、わかったな」

「…ああ」

「うん、いい作戦だと思うよ。早く君らが活躍してオレのマークを外しちゃってよね」

「りょうかいです、キャプテン！」

「まだまだ元気はあるみたいだね。ディフェンスは今のとこいい感じだから油断せず腰を落としてね。それじゃ行ってきますか！」

後半始まってすぐ、カズがドリブルで相手をひきつけた後シュースケにパスを出すとあっという間に速攻を決めてしまった。これに多少動揺したのか、相手のサルがカズに簡単にステールされ、ハイポストでボールを受け取ったヨシトが華麗にシュートを決めた。その後こちらのしつこいディフェンスにイライラしたのかミスを連発した猛将から、ノーマークだったオレが一気に8点をあげた。

完全にカズの作戦にはまった猛将のメンバーはタツキチ先輩に対するダブルチームをやめて、マンツーマンディフェンスに切り替えたがそれこそコチラの思いつき。タツキチ先輩が起点となって怒涛の攻撃で前半を40-32で折り返した。

ウサギが吠える

「何やってんだ、てめえらは！」

「……」

「相手のスタメンのうち4人は同じ一年だぞ。それを仮にも猛将高校の看板背負ってやってきたお前らが簡単に負けていいとおもってるのか、ええ！」

「……すいません」

「まさかこんなことになるなんて思わなかった。緊急事態だ、しようがない。オレが出る！」

「え、でもウサギ先輩、これはあくまでも一年の俺達の腕試しって聞いたんですけど。」

「そうだよ、でもなあ、それ以上に我が猛将高校では“負け”の二文字はたとえ一年の練習試合でも許されないんだよ！わかったか！？」

「は、はい」

「じゃあ後半からオレとサルは交代だ。あちらさんにも一応伝えてくるから。」

「というわけでタツキチ、後半からオレが出るから。お前も一人3年で混じってるから問題ないよな。」

「それは全然かまわないけど。それにしてもさっきはエライ怒ってたな。」

「まあこれが強豪校の宿命ってやつさ。天狗になってた一年共の目を覚まさせてくれてむしろ感謝してるよ。」

「それならいいんだけど」

「じゃあ後半は遠慮なくいくんでよろしく！」

後半開始してジャンプボールはやはり猛将ボールだった。しかしウ

サさんがボールを持った途端、前半とは明らかに違う空気が流れているのがわかった。まずウサさんのポジションは単純にPGだと思っただ。交代したサルがそうだったし実際にゲームメイクをしてパス回しをしていたからだ。しかし少しディフェンスが離れると3ptシュートも容赦なく打ってきた。正直カズとの1on1では勝負にすらなっていなかった。

ウサさんが入ってから一番驚いたのは他のメンバーの動きが格段によくなったことだ。今までマークできていたはずのヒョウがいつの間にか視界から消えていて、3ptシュートを何本も決められた。ウルフの走りこんだ先にぴったりとパスを合わせてくるし、クマもいい位置でボールをもらうのでヨシトは手を出すことすらできない。

そしてさらに衝撃だったのは相手のディフェンスだった。再びタツキチ先輩にダブルチームをしかけてきたのだ。それならフリーになったオレが決めればいいと思うかもしれないが、そうもいかない。なんとウサさん一人でカズとオレの両方の動きを完全に封じられてしまったのだ。異常なフットワークの軽さと反射神経の良さに二人で翻弄されっぱなしだった。

後半だけで50得点を決められ、最終的に82-63で大敗した。

反省会その1

「くっそ〜悔しい〜ウサさん反則だろ〜。あのヒョウとかいうののマンツ〜なら別に負けてなかったのに〜」

「それ言うなよハルカ〜こっちまであのデツカイくまさんに負けた気持ち蒸し返してくるじゃんかあ〜」

試合後のモップがけをしながら反省会というか、ただひたすらヨシトと一緒にわめいていた。

「あそこでこうすりゃ良かったんっだよん…」

「はい、そこしゃべる元気あるなら今から10km走行してもらおうからね〜!」

「すいませんでした!」

「わかればよし。終わったらミーティングするから部屋に来てね〜」

「うい〜す!」

正直試合での体力的な疲れと負けた精神的な疲れでダルさマックスだけど部長命令だからしかたないか、なんて思いつつ部屋へ向かった。

「単刀直入に聞こう、今日の敗因は何だと思う?」

みんなちよつと押し黙ってる間にオレは一人口走ってしまった。

「ウサさん強すぎです。」

「うん、素直でよろしい。それにほぼ正解だ。でももうちよつと具体的に意見が欲しいなあ、ヨシトはどう思う?」

「後半はディフェンスにしてもそうですけど、ボールに対していい位置でオフエンスさせてもらえず思うように動けませんでした。」

「たしかにヨシトはいいようにクマくん場所に場所どりされてた感があったね。シユースケはどうだった?」

「パスが来なかった。」

「まあ間違っちゃいないが、こういう時はもう少し自分の反省すべき点あげるべきだよ、むつつりルーキー君。あとはカズか。」

「ぶっちゃけ完敗でした。1on1でもチームバスケットでもあんなにポロポロに負けるのは初めてで、ドコから練習して強化していけばいいかも検討もつかないくらいです。」

「バスケットに関しては冷静なカズにそこまで言わせるなんてさすがやるなあウサは。はっは〜。」

「笑い事じゃないですよ！こんなんじゃこの先1勝もできませんよ！」

「まあまあそんないきり立ちなさんな。今度は前半の試合を思いおこしてごらん。」

いちおう前半だけなら勝ってたんだよなあ…

反省会その2とその後

今度はヨシトが最初に発言をした。

「最初タツキ先輩にダブルチームをかけられた時はチョットあせりましたけど、カズのおかげでうまくかき回せてたと思うっす。」

「確かに前半のカズの働きは大きかったな。それで同じPGとしてウサとサルくんの違いはどう感じた？」

「ウサさんが入った途端に簡単にオレの動きの裏を突かれる感じでパスを通して全然反応できませんでした。それに比べるとサルって人は動きは速かったけどなんか他の人の動きを見られていない感じでした。」

「うんうん。それじゃあシュースケは？」

「パスががが来て楽しかった。」

小学生か！というか敬語もちゃんと使えや！

タツキ先輩もさすがにもう何も言わないみたいなのでオレもその言葉を飲み込みつつ、自分の意見を言った。

「そうなんすよね。前半ならまともに勝負できてましたよね、おれも実際8得点あげたし。」

「それはタツキ先輩があんたのマークまで引き付けてくれてたからでしょ。じゃなきゃアンタがあんたのチーム相手に点数なんか取らせてもらえないわよ。」このキツ〜イツ〜こみはサヤからだ。

「いやでもそこでキツチリと決められたのは十分に練習の成果が出てたと思うよ、ハル力。」

「あざーっす！」

「総合するとウサが入るまでのチームではオレらの力でも十分通用したわけだ。個々の能力は高いとは言っても、あちらさんも中学から上がりたての1年生集団だ。まとまりのない急造チームっていう穴をうまくつけたってとこかな。でも一人ゲームメイクのスペシャ

リストが入っただけで同じマッチアップでも全然違うように感じたらう。」

「はい。」

「これが高校バスケットやってやっだ。個人のシュートやドリブルなんかの技術はもちろんのこと、他のチームメイトの力をいかに引き出すのがうまいかっていうのも重要になってくる。あともう一つ、今日の敗因があると思うんだけど誰か分かるか？」

「体力です。」

いつもの元気もなくぼそつとカズが言った。

「そうだ、ウサは途中から入ったとはいえ、明らかに後半はこちらが一方的にバテていた。前半のあの動きが持続できていれば、少なくともここまで点差がつくことはなかったはずだ。大事なのは疲れている時にどれだけ力を発揮できるかってことだ。そこでだ、いつものキソ練習が終わった後に毎回3on3をやるうと思う。そこからさらに、それぞれ別メニューを行ってもらおうと思う。」

何をするんだらう？わくわくする反面、今までの練習を考えると恐ろしくもあるぜ。

「シュースケとヨシトとカズとオレで2on2を徹底的にやる。サヤちゃんが抜けた分、ゴール下に入っても全員ガチでやるからな、当然身長の手短があるカズの組は負担が大きくなるから覚悟しておけよ、カズ」

「うっす。」

「あの、オレは？」

「ハルカ、お前に関してはサヤちゃんに付き合ってもらおう。」

「はあ〜！？イヤですよ、こんなガッツで口の悪い女と付き合うのなんて。大体タツキ先輩とできてるんじゃない？」

「何をイロイロとバカなこと言ってるのよ！アタシはまだまだバスケット一筋ですから！練習に付き合ってるって意味に決まってるでしょ！」

「やっぱりなかなかいいコンビだな、ほんとに付き合っちゃえばい

いんじゃないサヤちゃんどハルカ」

「茶化さないでください、本気でキレますよセンパイでも。」

「おお〜コワイコワイ。じゃとりあえずハルカのことは任せたからよろしくね〜。」

なんだかよく分からないけどしばらくコイツと『二人つきり』の練習になるみたいだ、イロイロ不安だ。

授業中って言ったらやっぱり

結局そのあとサヤもタツキチ先輩からもオレの個別メニューを教え
てもらえなかった。

ていうか別に隠すようなことじゃなくね!? あゝ昨日の夜からずつ
ともやもやする!

そのせいで今日の授業の内容が全然入ってこないぜ。えっ、ま、ま
あいつも通りっちゃいつもどおりナンデスケドネ…

「おい、東! 東遥火!」

「は、はい!」

「まったくお前は毎度毎度わしの授業で眠りおって! そんなに英語
が嫌いなのか、それともわしをバカにしてるのか!？」

「いえ、どつちも…」

「なにい、両方とはなかなか言ってくれるじゃないか!」

「じゃなくて眠いんでちゃんと同じように他の授業でも寝てますよ
!」

「そうかそうか、それはちょっと見直したぞ… って言うかポケエー
! 教室の後ろに立つとれー!」

「どうだったハルカっち、一人授業参観の気分は?」

「うるっせえ、眠らずに授業聞けてちようどよかったよ、なんなら
これからの授業全部あのまま受けたいくらいだし!」

「出た出たハルカっちのさびすいゝ強がりい どうしたん、またな
んかお悩みかい?」

「どうせのん気な帰宅部のお前にはわからないよ」

「あゝひっでえゝ。そういえばさ、昨日バスケ部練習試合だったん
しよ、どうだった?」

「ボロ負け、そのせいで今日からオレだけマネージャーがつきつき

りで個別メニューだよ」

「ひゅ〜ひゅ〜噂の男勝りな女子マネさんでしょ。ねね、ぶっちやけかわいい?」

「そんなウハウハ展開にはぜってえーならねえよ。あと別にそこま

でかわいくないし。」

「『そこまで』ってことはちょっと気になっちゃってる感じい?」

のこのお」

「だから違っつっつもの!はいこの話はおしまい、早く授業の準備する!」

「ぶはっ、授業の準備でww居眠り王子がよく言っよ〜」

それにしてもやっぱ個別練習ってなんなんだろ気になるわ〜…

「東くん、東くん、起きなさい!」

レモンみたいにしぼられて

昨日の練習試合の疲れもある中、いつも通りランニングから部活はスタートした。試合後は労いの言葉とひとりひとり褒めてくれた優しいタツキチ先輩も、練習になるとキャプテンらしく妥協しない。いや練習試合前より一層激しくなってる気がする。

いつもは無表情なシュースケだけど、その尋常じゃない汗の量からかなりキテルことがわかる。他の二人も似たようなもんだ。そんな中、同じ練習メニューをこなしているのにタツキチ先輩だけはまだどこか余裕そうだ。実際試合中もタツキチ先輩だけは最後まで運動量が落ちていなかった。テクニクといい体力といい、キャプテン一人だけがずば抜けていることだけは改めて気づかされた。

ようやくキソ練が終わり、そして待望(?)の3on3をやることになった。

正直試合前からへろへろだがみんな同じ条件だからしょうがない。やってやるうじゃんか!

チームは5分ごとに変えていく。なるべくイロイロな攻撃やディフェンスのパターンを試せるからだそうだ。

いろんな組み合わせがある中、敵に回すと一番厄介なのがタツキチ先輩に続いてあの元気娘のコンビだ。二人ともいい動きをするんだこれがまた。ぶっちゃけ試合をなげたくなるほどの気持ちに追い込まれ、疲れからボーっとしていると入部以来初めてタツキチ先輩から檄が飛ぶ。

「おいハルカ、疲れてるからって足止めてんじゃないぞ!小さいやつは動けてナンボなんだからな!」

たしかに言うとおりで。実際カズも顔は苦しそうだがPGらしくチ

ームの中心になってボールを回している。
まだまだタツキチ先輩の怒号はやまない。

「ヨシト、オレよりガタイがいいのに力負けしてんじゃないのか！
？」

「シユースケ、お前一人でバスケやってんじゃないんだからもつと
他の人間の動きを見る！」

こんな感じで30分間3on3は続いた。

今日一番驚いたのはタツキチ先輩のキャラの変貌ぶりよりも、むしろその運動量だ。オレ達4人みんなまともに相手取って全員
ねじふせやがった！

「よし、今日はこのへんにしとくかな。」

ふう今日もいい汗かいたぜ、あとは家帰って風呂入って腹いっぱい
メシ喰って…

「はい、じゃあこれから個別メニューに入ります」
サヤチャンナニツテンノ…？

やっべ〜そのこと忘れてた〜！！

残りカスもなめてみる

「じゃあハルカはこっち来て!」

「はいよ。で、いったいどういうわけでオレだけ別メニューで何をさせられるわけ?」

「なによその反抗的な態度は!」

「しかたないだろ、何するかも聞かされてないんだし。」

「まあいいわ。あんたにやってもらうのはシュート練習よ!」

「こっちがよくねえよ!てかシュート練習って今更?

「なんでだよ、それならオレもあっちでミンナと実戦練習した方が良くね?」

「分かってないわね。あっちにもこっちにもいろいろ意図があんのよ!はい、まずはあんたのポジションは?」

「そりやもちろんシューティングガード!」

「はい正解。それで昨日の試合で3pt決めた本数は?」

「...0本です。」

「そういうこと」

「どういうことだよ!アレはカズがお前はスリーを打つなって言うから。」

「それはアンタのどうせ3ptが入らないの見抜いてたからそう言ってたの。練習でもゴールから遠くなると異様にシュートの成功率悪くなるでしょ。大体アンタいつもどういイメージでシュート打ってたの?」

「そんなのカンでその場で臨機応変シュートに決まってんじゃない。」

「はあ、アンタばっかじゃないの!?」

「なんだこれツンデレか?ツンデレ好きなオレが一切萌えないから多分違うな、うん。」

「バカつて人に言うヤツがバカなんです」

「そんな子供みたいなこと言ってるんじゃないわよ。いい、今のままだったらつきり言ってるアンタはチームのお荷物なんだからね！」

「はあ！？どういう意味だよ？」

「言葉通りよ。まずチビだし、」

「それはカズも変わんないだろ」

「彼はドリブルもパスも並みの選手以上だし高校のPGとして十分通用するレベルよ。それに比べてアンタは身長の手短を埋められるほどの武器を持つてるってどういうの？」

「うぐつ。」

「普通の高校ならレギュラーどころか、まず控えにさえならないでしょうね。」

「そ、そんなことは…」

「他ならそのままちゃんたら部活やってればいい。でもウチの場合はそれじゃ困るの。なんとか自分だけの武器を持ってあの中に混じってもらわないと困るのよ。」

サヤが指差した先にいる4人の存在がなんだか急に遠く感じ始めていた。

「そついうわけで、あんたには3ptを徹底的に磨いてもらいます」
「！」

「どついうわけだよ？」

「幸運にもハルカ、あんたのシュートフォームはきれいよ！シュート好きって言うほどあつて相当の数も打ち込んでるのは見てればわかるわ」

「おお！急にデレがきたのか？」

「違つわよ！それでキャプテンとも話し合った結果、特訓すれば十分スリーポインターとしてやっていけるといふ結論に至りました！」
「ふむ、なるほど。」

「ではこれから3ptシュートの練習を始めたいと思います。」

「じゃあー、やったるーじゃんかー!」

「ったく、1日500本がノルマで時間ないんだからさっさとやるわよ!」

「っじゃあ!つてええ〜500本!??」

「ようやく始めたか、いろいろとメンドクサイ二人だなあ。よしコツチも負けずにやるよ、へばってんなよ3人とも!」
「う、ういっす。。。」

に恋してる

いくらシユート好きなオレとはいえ、昨日の500本はかなり堪えた。

「ったくサヤのやつ、キャプテン命令だからって思いっきしじごきやがってえー！」

「なになに、ハルカっち朝からお惚気ですかあ？」

「だからそんなんじゃないっつってんじゃん！！　こんどイジツたらナグリマスヨ、ヒロクン？」

「ど〜ど〜。そんなハルカツちに素敵な報告がありま〜す。」

「なんだよ？」

「実は前々から気になってる子がいて〜」

「ふああ〜、それで？」

「昨日なんと、ついに告っちゃいました！」

「つまり？」

「おれっちに彼女ちゃんができました」

「ふ〜ん、ヨカツタデスネ〜」

「あれ、親友の一大イベントの成功なのに冷たくない？」

「んなことねえよ、青春ぼくていいなあとは思っけど、毎度のことながら部活にエネルギー取られてるだけ。」

「ふっふ〜ん、そういうかと思っつてサプライズまで用意したんだなあ」

「なんだよそれ？」

「お〜い、リサッチー！！」

「なにいヒロクン。」

クラスの方から若干聞き覚えのあるようなないようなくらいの声で返事がした。

「紹介するよ、昨日からおれっちの彼女のリサッチ。」

「もう恥ずかしいからクラスでは大きな声で言うのをやめてよね。」

ヒロのやつ高校入ってもう彼女作ったかと思うと、同じクラスの子かよ。たしかにオレもけっこうカワイイなあとは思ってた子だ。ストレートの黒髪をセンター分けにしてちょこっとみえるおでこが妙にかわいく見えるんだよな。でも名前が出てこねえ〜。

「高峰梨咲たかみねりさです。いつもヒロくんと仲良くしてる東ハルカくんだよ。ね。」

「な、なんでオレの名前フルネームで知ってるの？」

「え、だって何かとハルカくんて女子の間でも話題になったりするよ。人数少ないバスケット部でがんばってることとか、あと居眠り王子なこととか。」

まじか、そんな悪目立ちしてたなんて、なんか複雑。。

「とりあえずこれからよろしくね」

「あ、ああよろしく」

「あゝ照れてるう。あ、でもいくらかわいくても好きになったりしたらダメだからね。」

「わ、わあってるよ!」

誰がそんなドロドロな三角関係に自分から頭つつこむか!

「で、今日からリサっちも一緒に昼ごはん食べるけどいいよね。」

「別にオレは構わないけど…高峰さんはやっぱり恋人同士二人でメシ食べたいんじゃないの?」

「呼び方はリサでいいよお。ううん、みんなでワイワイ食べるのが好きなんだあ。あ、あとこっちのいつものお昼友達は二人なんだけどもうOKとつてあるし。」

リサちゃんのお昼友達ってことは当然女子?あれ、なんか急にグループ交際っぽくなってぞ!?

「あれあれえ、もしかして女の子は苦手だったりしちゃった?」

「んなことねえよ、むしろカワイイ女の子たちは大歓迎って感じだし!」

「だいじょうぶう、そんなこと言っちゃってえ?ハルカッちにはカ

ワイイ女子マネちゃんがいるのにい。」

「違うってんだろ、あえて言うなら今はバスケットに恋してるってとかな。」

「うわぁ、くせえ。ははっ」

「ふふっ、やっぱり思った通りハルカくんもおもしろい」

昼メシからランチタイム

「ハルカツち、リサツち！メシ食べようぜ〜！」
クラス中に聞こえるように大声でオレらをよんでる当の本人は勝手に自分の周りの机を並べ始めている。相当楽しみでしようがないみたいだ。それにリサちゃんとのことを、もう最初からクラス中に知ってくれと言わんばかりのようだ。
「はいはい、だからそんな大声出すなって。」

トイレにでも行っていたのか、少し遅れてリサちゃんと連れの人二人がやってきた。リサちゃんの顔が若干赤いから廊下にまでさっきの声は響いていたのだろう。

「もう、ヒロくんではあ〜」

「ええ〜なににな〜？」

コイツさっきの声のポリューム、自覚ないのか？

「もういいよあ。さっ、ごはん食べよう。」

「リサツち、その前にハルカツちに二人の紹介した方がいいんじゃない？」

「え〜、でも同じクラスメイトだよ？」

「いやいやこのお方をなめちゃいけませんぞ姫。なんたってバスケット以外にはとことん興味なしのノー天気王子なのですから！」

「な、毎度毎度失礼なやつだな」

「じゃあこの二人の名前言えるう？」

「うぐつ。」

「ホント噂どおりなバスケバカなんだね。アタシの名前は尾川涼子^{おかわりょうこ}。みんなオリヨウって呼んでる。まあ一応乙女としては微妙な気持ちだけどねえ〜。」

髪もピンピンにハネてて、えらく男気のおふれてる子だな。ウチの

マネと気が合いそ。

「よろしく、おりよう。」

「あ、あと女子バレー部やってる。身長は170超えちゃってるのも一つの悩みなんだよね。」

オレとしてはうらやましい限りだけどな。

「そういえば体育館でたまに見かけたことあるような。」

「あゝひつでえ、これからちゃんと覚えといてよね」

「うっす。」

ちよこちよこ体育会系のノリなのはさすがというかなんというか。

もう一人の子はなかなかしゃべんないけどオレからなんか言った方がいいのかな。

「えつとごめん、君の名前も教えてもらっていい？」

「あ、ごめんなさい東君。わ、私は笹崎綾芽ささきあやめって言います。」

こっちは逆に小動物みたいで微笑ましいなあ。

『ささざきさん』って絶対かみそうだから下の名前で呼ぼう、うん何も言ってこないけどそれでいいよね。

「よろしくアヤメちゃん。あとオレのことハルカでいいから。」

「は、はいっ。」

「アヤメは人見知りの激しいけどすぐ慣れると思うから気にしないで。」

「っていうかアヤメが一番ハルカと話すの楽しみにしてたんだよね。」

「ちよ、ちよつとおりよう、余計なこと言わないでよ！」

「そうそう、あたしがヒロくんと付き合うって話したときよりも、みんなでゴハン食べようって提案した時の方がテンション上がっちゃってたしい。」

「あれあれえ、もしかしてアヤメっちはハルカッちにお熱ですかい？」

「残念でした。アヤメには他校にイケメンの彼氏がいるんですなこ」

れが。」

「あ、ちなみに言つとくとアタイは自分より身長の高い男子はお断りですから。」

なんだか勝手に、しかも立て続けに2人にふられた気分になったけどまあ気にしないでおこご。

とりあえず色恋沙汰はこの中では(俺には)関係ないみたいだけど、そっちの方が気楽だしな。そんなこと気にしなくていいくらい3人ともかわいくてよくしゃべってくれたから、昼休みはいつもよりだいぶ楽しく過ごせた。

1000本目

その日の放課後、お昼のメンバーのおかげで気持ちいつもより元氣よく体育館にやってきた。

だがそんな浮かれた気分も一瞬にして吹き飛んでしまった。

何しろ、サヤとタツキチ先輩のキソ練の追い込み方がシャレにならないくらいキツイ。声だし一つとっても日に日に要求が厳しくなってる気がする。

そこから練習は3on3に移った。

サヤがホントにいい動きをする。たぶんもとはフォワードだったらしく、ドリブルの切り込み方はタツキチ先輩のについて上手い。同じポジションのシュースケが嫉妬しているのがこっちにも伝わってくるくらいだ。

幸か不幸か貧乳だし黙って試合にも使えないだろうか？

そんな浅はかな考えが一瞬頭によぎってしまったらカズにステイールされてしまった。

「おい、ハルカやる気ないんなら帰ってもいいんだぞ！」

「すいません！」

この後はずっと集中していたつもりだったが結局他の3人とも同様、タツキチ先輩の叱責がやむことはなかった。

ここからさらにオレの場合、地獄の500本シュートが待っている。

「膝が全然曲がってない！そんなんじゃない3ptゾーンから届かないじゃないの！」

「手首のスナップだけで打とうとしてるでしょ」

3on3で見せつけられてる時も思ったけどシュートフォームがめちゃくちゃキレイなんだよな。だからシュート講義に関しては余計に説得力がある。

確かにサヤに言われてみてイロイロ気づいたことがある。サヤ曰はく下半身の動きが安定していないからシュートも一定して入らないのだという。今までは考えてもみなかった。中学の最初にシュートフォームを覚えてからはひたすら何も考えずに打ちまくっていたというんだから文字通りバカまるだしだ。

「いい、必ずシュート直前にタメを作らなきゃいけないの。下半身でボールに勢いをつければ手はその飛距離に合わせて微調整するだけでもいいでしょ。」

「たしかに。」

「はい、それをふまえてもう一回。」

正直大量のアドバイスで頭がパンクしそうになりながらも集中力をきらさなかったのは、大好きなシュート練習だったところが大きい。実際サヤにも

「毎回、気持ちだけはしっかり入ったシュートだったわよ」

と、一応お褒めの言葉もいただいたのだ。

今日の400本目を過ぎたあたりから、サヤの口出しが気持ちい少なくなっていく気がする。自分でも新しいシュートフォームへの感覚がつかめてきたのが実感できたと思う。

そして今日もなんとかすべての練習を終えた。

押して押されて

「明日試合します。」

唐突にサヤから発表されたのはもちろんバスケの試合のことだ。

「今回は相手の情報教えてくれるんだろ？いつも何かと秘密主義に走りやがって。」

「言つときますけど前のもちゃんと意味があつたんです。あんなたち、特にハルカあたりがびびって前日寝付けないのを防ぐためとかね。それで明日の相手っていうのは豪剣高校です。」

「なんか高校の名前からしてヤバそうな雰囲気だがいじょうぶか？」

「どんな選手がいるかまではチェックしてないんだけど、とりあえず今回の相手は普通に3年生主体でくるみたいね。去年の予選だと3回戦までは進んでみたい。」

要するにそこそこ強いチームがくるってことしか分かってねえじゃねえか！

そんな役に立つたんだか立たなかつたんだかわからないマネ情報だけを仕入れた状態で練習試合当日を迎えた。

試合が始まってみると、相手は異様にオフェンスにこだわるチームらしく、中学でも一度も経験したことがないくらいのディフェンスそっちのけな乱打戦となつた。

うちもタツキチ先輩を中心として点をとりまくつたがいかんせん、相手の得意なスタイルに合わせて戦つてしまったために94 - 101と僅差ではあるが負けてしまった。

「いや、100点ゲームつけられちゃったねえ、こりゃ足腰中心にディフェンスの鍛えなおしだな！」

「ういっす!!」

「あ、そうだハルカ、今日のおんたの得点率知ってる?」

「いや、試合に集中しててそこまで頭回ってなかった。」

「2ptが6/7、3ptが1/7。つまりおんたがあと3本スリ
ーを決められてたらウチが勝ってたのよ、お荷物くん。」

くっそ〜! 数字ってなんて残酷なんだ!!

チームのためにも、サヤに小馬鹿にされないためにも明日からはこ
れまで以上にシュートに命を賭けよう! と試合後からず〜と思っ
ていたんだが気づいたら布団に倒れこんでいた。

5000本目のその後

今日でちょうどシュートれ練習が始まって10日、つまり5000本が終わったところだった。

2on2組の方が動きはハードだが時間帯的には圧倒的に5000本シュートの方がかかるので毎日帰りはサヤと二人きりになる。

初対面からお互いケンカ腰だったものの、今では楽しく会話しながら帰る仲くらいにはなっていた。

「今日でようやく5000本達成かあ〜！」

「まあ、まだまだだね。」

「お前はさてはテニプリふあんだな？」

「ち、違いますう。腐女子なんかじゃありません！」
もうこれはほぼ確定だなw

「なあ、ずっと聞こうと思ってたんだけどさあ」

「何よいまさら改まって。あつ、言つときますけどスリーサイズとかそういうセクハラ的質問には一切応じませんからね！」

「は？」
ほんとこの女、自意識過剰にもほどがあるっつうか、ずれてるっつうか。

「じゃなくてオレが気になってんのはお前がなんで男バスのマネやっつてるかってこと。」

「そんなのバスケが好きだからに決まっつてんじゃない。」

「それなら女子の方でもいいだろ。なんであえて男子なんだよ？」

「そ、それは自分なりにイロイロ試行錯誤した上での結論よ。」

「はあ？全然答えになっつてねえし。さては男どもが汗をかいて青春してるのを間近でみられるこの状況が楽しくてしょうがないとか？

さすが腐女子だな、ハハツ」

「くっつだらな！勝手なイメージでしゃべんないでよね！」

「じゃあさ、ほんとの理由教えてよ。」

「だって女子の練習見てたら混ざりたいと思っちゃうでしょ。」

「全然それでいいじゃん。てかむしろお前なら選手としても十分通用すると思うんだけど。」

「…たくなっちゃうんだもん。」

「へ？」

「本気でバスケやりたくなっちゃうんだもん！」

「訳分かんねえな、バスケしたいならなおさら女バス入ってすればいいだろ。」

「それじゃダメなの！」

その一瞬、普段強気な彼女とは対照的な、泣きそうな目になっていた。たのでオレは慌てて、努めて優しく声をかけた。

「ご、ごめん。なんか茶化したりして。そうだよな、いつもマネージャーとしてよくやってくれてるのに失礼だよな。今日もこうして夜遅くまでオレの練習に付き合ってくれてるわけだし。」

「うわっ、キャラ違うし。きもっ、」

訂正しよう、やっぱりいつも通りのがさつなヤな女だ。

「あーもう分かったわよ、そんなにしつこく聞く無遠慮な態度と、その気持ち悪い優しさに免じて話してあげる！」

またさらっと悪口を言われた気がするが大体は心あたりがあるので今日のところはもうおとなしくしておこう。

「イッブスよ」

「へ？なにそれ？どっかの外人？」

「あーもうこれだからバカは！まあ簡単に言っとトラウマでうまくバスケができなくなっちゃったってこと。」

「でもいつもオレらと3on3でガンガンバスケやってんんじゃないん。」

「男子相手だとなぜか大丈夫なのよね。元は中学の引退直前の試合でね、相手と意思つきりぶつかっちゃってその子をケガさせちゃったの。幸いケガはたいしたことなかったんだけど、なんだか妙にその時の衝撃が体に残っててね。それからバスケの試合になると体がうまく動かなくなっちゃったの。」

「ふ〜ん、なるほどね。」

「それでバスケを忘れるために女バスのないこの高校を選んだの。」

「でもそれじゃなんで男バスに？」

「入学したその日にね、それでもなんとなく体育館に自然と足が向かっていったの。コートを感じとか懐かしくなっちゃったのかな。したらタツキチ先輩が一人で黙々と練習してた。その姿に思わず見惚れちゃったの。」

「あ、お前やつぱりタツキチ先輩のこと好きなんじゃないか。」

「ばか、そういう意味じゃないわよ！ほら、なんで今まで一人でずつと部活をやってきたのが不思議なほどあの人のプレーってきれいで洗練されてるでしょ。」

「たしかに、それはオレも同意する。」

「その時タツキチ先輩に思わずマネージャーになりたいって言ったの。そして気づいたらイップスのこととか全部話してた。そしたらセンパイが『男子相手だったらもしかしたらだいじょうぶなんじゃない？少なくともサヤちゃんが相手のケガとか気にしなくていいしね。』って」

「センパイ大人だあ。それでウチのマネージャーになったわけかあ。」

「そう。たぶんあのときのセンパイのバスケの姿とその言葉に救われた気がするの。自分がプレーヤーとしてっていうのに全然未練がないって言ったらウソになるけど、どこかふっきることができた感じがするの。今はね、どんな形であれバスケに触れられているっていうのだけで十分楽しい。それに3on3ではおもいきりバスケさせてもらってるからね。だからこれまで通りびしばしマネージャーとしてアンタ達を鍛えていくからね！」

「そういえばハルカはどうしてウチの高校に入ったの？」

「それはまあ勉強してたら自然とこの高校のレベルだったしここでいっか って感じ。」

「進学校のウチの高校そんな軽い理由で入れたのかよ!! アタシや進路のこととか考えて、けっこう勉強でも苦労したっていうのに…」

「バスケ部のこととかはちゃんと調べてたんでしょうね」

「まあね。高校のホームページにもバスケ部って書いてあったし、オレはバスケができればどこでもよかったから。」

「あきれた… もしタツキチ先輩がやってなかったらどうするつもりだったのよ、ま、アンタらしいか。ふふっ」

「まあね〜。あ、やっとなったあ〜。」

「あ〜バカってほんとうらやましいわあ〜」

とりあえず今日学んだのは、無闇に人の過去を聞かないことと、女心がわかるようになるのは当分先になりそうなことだ。

昼時の茶髪の救世主

今日の昼休みも学校はいたって平和だが、オレにとっては勝手が違う。このままじゃヤバい！

急いで隣のクラスにかけこんだ。

「ヨシトおゝ今日の昼一緒に食わない??」

「いいけど、急にどうしたのさ」

「いやね、いつも食べてる連れが急に恋人二人同士で話したいことがあるからって二人でどっか行っちゃってさあ」

「じゃあ他のクラスのやつら誘えばいいじゃん。」

「そこは察してくれよお。」

「はいはい、意外と人見知りちゃんだったのね。そこでおれんとこ来たど。いいよ、たまには部員同士でランチつても。」「そうだよね、だって練習の時だとハードすぎてるん気にしゃべってるヒマもないしね!」

ばればれの言い訳だけどヨシトもそこんとこ分かってくれたらしく、彼はいつもの自分の連れに軽く謝ってからオレと一緒に昼メシを食べてくれることになった。

「てかさ、たしかハルカのグループって他にあと女子二人いるんじゃないかったっけ?」

「そうなんだけどねえ。あっちも気づかってか誘ってくれたんだけどさすがに1対2じゃ女子力に負けるかなあつて。」

「なるほどね。まだまだハルカは子供でいいなあ。」

「それってバカにしてんの?もしかしてヨシトって彼女もち?」

「いやあピユアでうらやましいなあって意味で。あっちなみに彼女はいるよ、他校だけど」

はい出ました『他校の恋人』。なんか学校内でのお付き合いにも増して大人感があるんだよなあ。

「そついえば最近調子どうよ500本シュートの方は？」
「よくぞ聞いてくれました。ただいま順調に進化中であります」
「そりゃ助かるよ、シューターの存在はいるかないかで全然違うからね。」

「そつちの2on2の方はどうなのよ？」

「もう毎日地獄だよ、大昔のドレイかつてくらい働かされてる。」
「うわあ、たしかにそりゃひどそうだよ。」

「特にカズが見てるだけでも一番やばいよ、オレら全員と20センチ近くあるから常に動き回ってないと勝負にならないし。」

「たしかにあの中に混じっちゃうと一人だけ小学生だもんなあ」
「お前も人のこと言えないけどな。」

「うるせえ！それで少しは成果でてきた？3on3ではみんなで試合してるとはいえ疎外感はんばないんだよねえ。」

「人見知りな上にさびしがり屋かあ、これから苦勞するぞあ。」
「あゝそつというのいいから早く教えるよ。」

「そだなあまず最近キソ練でもオレが声出すようになったの気づいてる？」

「あつ、たしかにヨシトの声響くようになったかも！でもそれがどうかしたの？」

「タツキチ先輩に言われたのが『まずお前は気持ちで負けてる。バスケに対する気合いが足りないな』って」

「で、腹いっぱいの声出しと」
「そついうこと。」

「それもあつてかけっこうゴール下のポジション取り上手くなったと思うぜ。一応中学でもセンターやってたけどあれは身長面で仕方なくて割り当てられたってかんじだったからなあ。」

「たしかにヨシトのプレーって元々ゴール下を陣取るっていうより

はちょっと離れてさわやかにシュートってイメージが強かったもんなあ。」

「そのさわやかってこの場合褒め言葉なのか？まあいいや、そんなわけでわたくしヨシトも日々センターとして成長中であります」

「そっか、なら良かったあ。他の2人はどんな感じ？」

「うん、一応ポジション取りのために敵や味方としては周りは見てるけど、ぶっちゃけ自分のことで手一杯で他の人の成長具合までは見れてないかなあ。それは直接本人たちに聞いてみたら？」

「たしかにそだね、あつ、もう昼休み終わるわあ。じゃまた放課後体育館で。」

「おう、じゃあなあ〜」

つついたら咬まれた

例のごとく、サヤが走りながら練習試合について報告してきた。

「今週末の練習試合の相手は毒虐学園になります。」

「おい、なんかこの前の高校にも増してヤバそうな高校じゃないか？」

「豪剣高校に関してはただプレイスタイルが極端なラン&ガンだったんだけど、たしかにこの毒虐学園で最近あまりいい噂聞かないぜ。」

「しょうがないのよ、ウチみたいに極端に人数の少ない所をわざわざ相手してくれる所ってなかなかないんだから大事にしないと！」

「サヤちゃんの言うとおりだよ、別にケンカしようってんじゃなくて正々堂々バスケットするだけなんだから何の問題もないよ。」

「まあそうっすよね。」

「はい、じゃあ明日に向けて練習始めるよ〜」

試合当日現れた毒虐学園の部員たちはウワサどおりというかちょっと“やんちゃ”な格好で現れた。

でもバスケットで堂々と勝ってやろうと肚を決めているオレらは別に気にもとめなかった。

だけど相手のある男が一人こっちにやってきた。

「よお久しぶりじゃんかタツキチい。よかったなあ今年はなんとか部員も寄せ集まったみたいで。」

「人数はぎりぎりだけど寄せ集めだと思ったら痛い目に合うよ、蛇川。」

「くくっ、相変わらず動じないねえ。まいいさ今年あうちはかなりいいメンツが集まっているから後でかわいい一年生が心折られないように気をつけなよ。」

「「忠告どうも。」

「なんかヤな感じの人でしたね。言うことがいかにも三流って感じ。」

「まあ君らは気にすることないよ。ただあの蛇川はプレーの方は一流だから気を抜かないでね。」

「うつつす!!」

試合が始まるとタツキチ先輩の言うとおりとなった。あの蛇川って人はなかなか手ごわかった。本人の性格が反映されているのか相手の裏を読んで動くのが異常にうまい。

しかしあれだけ試合前はタツキチ先輩にからんでいたのに蛇川さんがマークについたのはシュースケだった。

シュースケは執拗なマークにイライラしたのかオフエンスチャージを前半だけで4回も取られてしまった。

「シュースケ、いったんおちつけ。お前が5ファールとられたらこの試合は不戦敗で終わってしまうんだぞ?」

「…うつつす。」

「今のところお前よりも蛇川の方が数段上なんだからそこは素直に認めて、うまくオレ達にボールを回していけ」

「はい。」

「じゃあ、じゃこつからいくぞつ!」

「おー!!」

しかし後半始まって早々、ファールアウトを恐れて動きの悪いシュースケの近くばかりにボールを集められ、一気に逆転されてしまった。

ついには蛇川さんの巧妙な技でシュースケは5個目のファールをとられてしまった。

「あれ〜これでこの試合没収試合になっちゃったじゃん、どうしてくれんの？それともがんばって4人で続ける？」
猛毒高校のやつらはみんなしてニヤニヤしている。

「あ〜あこれでカワイイマネージャーちゃんがいいたら勝負の景品代わりにお持ち帰りでもしようと思ったけどこの姉ちゃんじゃいらねえなあ」

「まったくだ、ははははっ」

その場の空気はかなり悪くなったがここでキレちゃいけない。勝ち負け以前にバスケット部の活動停止になってしまうことがわかっているから誰も何も言えなかった。

その沈黙を当のサヤが破った。

「あ、ごめんなさい色気がなくなつてえ。じゃあアタシが代わりに男として混じつても問題ないかしら？」

「はは、おもしれえ。ま、4人よりは人数稼ぎでもいた方がましだろうしな。」

「よしこれで交渉成立ね。では改めて試合よろしくお願いします。」

そこからうちの翔泉高校の怒涛の追い上げが始まった。相当たまっていたものがあるのだろう、特にタツキチ先輩とサヤがガンガン点を決めていった。

終わってみれば77-59でうちの勝利で今回の試合は終わった。

今回の反省会の中心はもちろんシュースケだった。

「勝負でアツくなつても絶対にキレちゃいけない。蛇川のプレーはあまりマネしたいものじゃないが、アレもルールにのっとつたうえでの一つの戦略だ。今回のことはお前だけじゃなくてチーム全体に迷惑がかかるんだ。仮にこれから控えのメンバーができたとしても絶対だ、いいな。」

「はい。」

「それにしても今回のようなことはおれも勘弁だなあ。ごめんねサヤちゃんにまで迷惑かけちゃって。」

「いえ、あたしはああいうバスケでケンカならドンとこいですよ！」

「たくましくて頼りになるマネージャーでよかった。みんなもよく感謝しておくように！」

「はい！！」

部活休みの3日前

毒虐高校との練習試合から数日後、入部以来初めて休みをもらうことになった。

「ひゃっほーい！とテンションマックスではしゃぎたいところだが、こう急に休みをもらうと何をしたいものか困るものである。」

「ハルカツち、5月5日はヒマしてる？」

そんなことを考えていた時にタイミングよく声をかけるんだよなあ、コイツは。というかいつも絡んでくるんだし偶然でも何でもないか。

「部活もないしヒマだからたぶん家でゴロゴロしてる。」

「だめだぞ、こどもの日にこどもは遊ばなきゃ」

実はさぁリサツちたちとどっか出かけたいねって話してたんだけどドコがいい？」

「えーそんな急に言われても思いつかねえよ。」

「んじゃ山にピクニックに決定ね ハルカツちは高校の近くの駅前に朝9時に来てくれるだけでいいからね」

おいマテ、結論早すぎだろ、たしかにどこでもいって雰囲気はだしてたけども！もうちょい悩ませろよ！

「りさつちい！ピクニックに決定だつてえ！」

「うん、わかったあ！じゃあアタシ達はお弁当がんばって作ってくねえ！」

なんかリサちゃんの方もクラス内で堂々と大声でしゃべるの慣れてきてるみたいだ。ホントお似合いだよまったく。しかもなんだか妙に話が早いぞ！？

「もしかしてこの前の昼、二人でこそこそどっかで話してたのってそれか？」

「あつたりいゝ、バスケット部がその日休みなのはりさつちが女子マネちゃん経由で聞いてたから、なるべくハルカツちにはぎりぎりまで内緒にしとこうって話になつてえ。」

「サヤめ、余計なこと部活の外では平気でもらすのかよ！それにしてもリサちゃんも何気に交友関係広いのか？」

「そういえばこの前オレツちがいなくて寂しかった？」

「べ、別にさみしいとかありえねえし、オレはそんな時堂々と一人でメシ喰つてたよ！」

「でもでもお、隣のクラスのヨシトつちの所に駆け込んでたつて目撃情報を多数受けておりますけどお？」

「あつ、てめえ分かつてていったのかよ、ちくしょあゝゝ！」

こんな感じでヒロには言いように遊ばれっぱなしのオレだった。

いつもの日

ゴールデンウィークで世間が浮かれている中、学校が1日中休みなのを利用してオレたち翔泉バスケット部は普段の倍のメニューをこなした。さすがにそれだと集中力ももたないのでタツキチ先輩が、途中いつもしないようなゲーム感覚のアトラクション的なメニューも組んでくれた。ただし体力的にはそれも十分ハードだった…

徹底的にしごかれたオレたちにもようやく“本当の休み”がやってきた。他の連中は知らないが、オレはもちろんヒロ達とピクニックだ。ここ最近バスケット部の生活だったので実は内心楽しみでしかなかった。

待ち合わせ場所で待っているとヒロとりさちゃんがすでに待っていた。

まさかカップル二人に混じってのオジヤマ虫状態かよ、そりゃちょっとキツイな。

と思っていると4人目の子が現れた。

「あ、おはようアヤメちゃん！」

真っ白な帽子とワンピースを着て、いかにもお嬢様のお出かけといった出で立ちのアヤメちゃんは、オレの個人的安堵感も相まっついてもより8割増しくらいかわいらしく見えた。

「よし、それじゃ全員そろったのでしゅっぱーっ！」

オレたち4人は電車に乗って数駅隣の田舎町で降りた。そこからす

ぐ近くにある小山に登ってくつろぐことになった。

日頃練習でくつたくたのオレを氣遣ってか、のんびりしたプランを立ててくれてたみたいだ。意外と気が利くな、ヒロのやつ。いや、これはりさちゃんの提案かな。うん、きつとそうに違いない！

「いやあ、やつぱり自然の中って落ち着くなあ〜！天然の芝生もちよ〜気持ちいい〜」

「さっきから思ってたけどハルカッチ、今日はいつもよりだいぶテンションアゲアゲだね」

「わ、わりいかよっ」

「そんなことないと思うよ、今日のハルカくんちよつとかわいいつ」

りさちゃんも褒めてんだか、からかってんだかよくわかんないなあ

「アヤメっちはどう、楽しんでる？」

「うん！私も山とか森とか好きだなあ。」

「アヤメもようやく笑えるようになってきたね。この子ね、最近カシにふられてずっと落ち込んでたの。」

「ふ〜ん、そうなんだ。でもアヤメちゃん、くすくす笑ってるときってリスみたいでかわいいよね」

「そ、そんなことないよ〜」

「あいかかわらずハルカッチの言ってることは謎だよなあ」

「ね〜。」

なんだこのバカカップル、こういうところで息ぴったりそろえやがって！

「ありがとね、りさ、ヒロくん、今日は誘ってくれて。それにハルカくん見てるとなんか元氣出てきちゃった、ありがと。」

オレが何かしたのはわからなかったけどまあいいか、みんな楽しそうだったし。オレもかなりリフレッシュにはなったし。

これで明日からの練習もはりきっていくぜい！

30日戦争

たった1日あった奇跡のような休みがあった次の日、みんなことなしにはつらつとした顔になっていた。

たぶんそれぞれ思いっきり休みを満喫できたことと、あとはもうすでにバスケがしたくてうずうずしているのだろう。たぶんオレも同じ顔をしている。

今日は練習前に軽くタツキチ先輩から話があった。

「今日からちようど1か月後、地区予選の大会が始まる。昨日わざわざ休みをとったのは休養という意味もあるが、気持ち思いきって切り替えてもらうためだ。そのつもりで覚悟しておくように！」
「ういっす！」

タツキチ先輩の熱は日に日に高まっていき、それに伴ってオレ達の気持ちもバスケの上手さも上がっていった。でも体力がついてきたと思っただらさらにもう1ステップ上の練習がハードに書き換えられていくのだから毎回4人とも汗だくづくのへっろへるだ。

技術面でもようやくフリーではスリーポイントも安定して入るようになったと思っただら、3on3でのディフェンスが厳しくなる一方だ。なのでシュートもなかなか決まらないのでこれまた精神的にたまらない。

その気持ちは他のメンバーも同じなようだ。ヨシトもいまだにタツキチ先輩相手だとゴール下で仕事させてもらえないとぼやいている。それでも日に日に体つきもプレーもたくましくなっているのがわかる。

シュースケはシュートが決まらないと決まって舌打ちをしていたのだがタツキチ先輩に叱られてやめた。それからはむしろゴールへの

執着心は一層強くなったみたいで、今ではチーム1のスコアラーになりつつある。

カズは普段が一番おちゃらけているが、そういえばバスケットのことで愚痴ったりとかは聞いたことがないかもしれない。それなのにポジションや身長の関係で人一倍動くため、いつも限界ギリギリまで自分を追い込んでいるのがわかる。

1か月、ただひたすらメニューとしては今までの練習を繰り返す日々が続いた。

そうとうとマンネリ化しそうなものだが、実はちょっとうれしいことがあったのだ。徐々に我が翔泉高校の男バスの知名度が上がってきたみたいで、週一で“そこそこ”、わかりやすく言うと2回戦上がれるか上がれないかくらいのレベルの高校と試合をさせてもらえるようになったのだ。まあそこそこののでタツキ先輩のいるウチの敵ではなく、20〜30点差をつけて勝利しつづけていた。

そうすると試合後はかぎってタツキ先輩から「お前たち、よくやった！が、ここここはまだ甘いぞ」というアメとムチが、サヤからは「またスリーはずしてんじやいのよ、ばかハルカ！」とオレだけ特製のいばらのムチが容赦なく浴びせられた。

公式デビューにそびえるデカイ壁

ついに公式戦を迎えることになった。

抽選の結果、初戦は大岩高校になった。

「さあ、お前らにとっては公式戦初デビューだ、緊張してんじやないぞ。だいじょうぶか、ハルカ」

「あ、あいつ！」

「なんだよめつちや声裏返ってんじやんしっかりしてくれよ」

「うるせえなカズ、お前だつてさっきから落ち着きなくボールをずう〜と手で回してんじやねえか！」

「バカヤロウ、これはオレなりのリラックスほうつてやつでだなあ」

「オレの視界でちよろちよろしないでくれないか、チビーズ」

「てめつ、シユースケたまにしゃべったかと思うと生意気なあ」

「まあまあ3人とも緊張するのはわかるけど落ち着きなつてえ」

「そういうヨシトも動揺してんじやないのお???いつもきれいにセツトしてるオシヤレ髪がくしゃくしゃだぜ」

「はいは〜い、なんかイイ感じで4人とも緊張がとれたみたいだね、じゃ体育館の中行くよあ」

結局タツキ先輩の誘導(?)のおかげでうまいこと落ち着いたおれ達だった。

「今日の相手はなんてたつてとにかくでかい。フォワードとセンターが3人とも190オーバーらしい。ガードの2人にしたつて180あるぞ。ハルカ、カズ、お前らが特に厳しいマッチアップになると思うけど気持ちで負けんじやないぞ！」

「うつすー！」

実際試合が始まる前の整列で並んでみて驚いた。自分よりデカい選手なんて毎回だけど、こつも5人ともでかいと威圧感はんぱない。ジャンプボールは相手に取られた。

抜かれないようにしっかりマークしたけど頭の上から簡単にパスを通されてしまった。

そこから一気に相手の得点になると思いきや、ウチの巨人、ヨシトが見事にシュートブロックを決めてボールはカズにわたった。そしていつから抜けだしていたのかシュースケがすでにハーフラインまで走りこんでいる！

カズからそのままパスを受け取り速攻でシュートを決めた。

「よし、ナイスだ。お前たち！先取点は大きいぞ！」

その後もウチの攻撃パターンは次々と決まり得点していった。

ただしあちらの攻撃はそれ以上に激しかった。はつきり言ってカズとオレの所からのパスが全然防げていない。横方向のパスを簡単に通させないことと、ドリブルで抜かれていないようにするだけではない。はいはいだった。

そのためにフロントコートの人3人の負担は相当なものだったのだと思う。

しかしタツキチ先輩が中心になってシュートを防いでくれたおかげで前半の得点は3点リードしたまま折り返すことができた。

「よし、よく踏ん張ってるぞみんな。ただもう少し得点が欲しいな。ハルカ、相手のマーク外すのはキツイか？」

「いえ、先にもう相手の方がバテきてるみたいなんでそろそろスリー打ってきます。」

「そうよ、アタシがわざわざ付きつきりで練習見てんだから結果出しなさいよね。」

「わあってるよー！」

「あとはシュースケ、お前は後半のディフェンスは最低限でいい。」

とにかくチャンスがあつたらガンガン走ってカズからボールもらいに行け！」

「うつつす！」

後半始まってすぐ、予想通り疲れの見える相手のマークが甘くなつた瞬間、カズからいいタイミングでパスが来た。すかさずオレはこの3か月の思いをこめた渾身のスリーポイントを放つた。

シュパッ

「よっしやあ！」

後半早々、幸先よく決まったオレのスリーを皮切りにシュースケを中心にしてどんどん得点を決めていった。

一方ディフェンスにおいてはタツキ先輩が鬼のように動いて相手の動きを封じていた。まあそのおかげで他のオレ達がオフセンスに集中できたわけだが。

ピーッ

体感的には40分以上とも思える長い試合は終わった。

得点は80-62でオレ達の勝ち。

「っしやあー！！！」

今までの練習試合とは比較にならないほどの汗と疲労感もあった。

しかしそれ以上に全身で充実感を味わっていた。

これが相手チームのデカさからうけてたプレッシャーなのか、公式戦ならではの緊張感からくるのかもわからないまま、ただただオレたちは叫んで喜び合った。

Next Stage

公式戦初勝利から一夜明けて、いつも通り寝ぼけ眼のまま授業を受けている。

「…であるからして、ここの文法は…」

なんだか昨日の試合が夢みたいだ。ていうか今まさに夢の中にいてしまいそうだ。

「ハルカ、聞いているのか、おい！」

「しゅ、しゅみません！」

やばい思いつきりかんでしまった。

クスクスとクラス中に失笑が広がる。

またあのバカツプルにいいネタを提供するハメになってしまったみたいだ。それに怒られすぎてこの大杉先生には下の名前で呼ばれるようになってしまった。まあわざと寝てるわけじゃないからこうやって起こしてくれる先生の方が実は助かるんだよなあ、こんなこと言ったらまた怒られそうだけど。

予想通り昼休みにヒロ達に英語の授業のことをイジられたあと、放課後体育館に向かった。

「昨日の試合は4人ともよくやった、お疲れ様！特にハルカとカズ、よく最後まであの身長差でやってくれていたな」

「うつつ。」

「まあカズくんはともかく、ハルカは身長分の穴埋めができてたかつていうと微妙だけどねえ」

「おいマネージャーなんだからもっと選手が気持ちよくプレーできるように発言しろよなあ」

「あらホントのこと言っただけじゃない、それにアンタちょっとマネージャーの仕事はき違えてるんじゃないの!？」

「前々から思ってたんだけどお前には癒しつてもんがたりねえんだよ！」

「はあ？だからあんたはマネに何を求めてるっていうのよ？」

「まあまあ夫婦漫才はそのへんにして。」

「夫婦漫才なんかじゃありません！」「こいつとだけはありえないっすよ！」

「二人とも落ち着いて。さあ次の対戦チームの話をするからね。」

「はい。」

「次は去年ベスト8の竹川水産高校だ。昨日の大岩高校や今までの練習試合の相手とはわけが違うぞ！」

「マジっすかあ燃えてきたあ！」

「これだから単純バカはうらやましいよ。タツキチ先輩、昨日その竹川水産の試合見てたんすけど、あのチームのSFの鮫島って選手、かなり手ごわそうでしたよね。」

「よく見てるねカズ。たしかにアソコは去年ルーキーだった鮫島が入ってから急激に強くなった。当然明日も要注意人物になってくるだろう。ポジション的にマッチアップはシュースケだけどちよつと荷が重いからディフェンスはオレだろうね、死ぬ気で止めるから安心してよ。」

「頼りにしてますよ、センパイ。」

「どうもお。さて、他の選手に関しても多少情報はあるから確認しておこうか。サヤちゃんお願いね。」

「はい。」

その瞬間、他のメンバーの目つきが変わった。

最初は強いところとやれる！って単純に浮かれてたけど、そうだが、負けたらタツキチ先輩は引退なんだとふと気づいて真剣にサヤが言う相手の情報を聞いた。

背水の陣

公式戦も2回目となると少しは慣れたかと思ったけど、やっぱりこのピリピリとした緊張感にはまだ慣れないな。

「よしスターターはカズ、ハルカ、シュースケ、ヨシトとオレで行く。」

「せんぱい、オレらは控えないんだからこのメンツになるに決まってるじゃないですかあ。」

「それもそうだな。でもなんか改めて確認しておきたくてさ。それじゃ行こうか。」

「ういっす!」

試合が始まるとジャンプボールから競り勝ったらヨシトからカズがそのままレイアップを決めた。

この日のオレは絶好調で7本中5本のスリーポイントを決めた。

カズの高速パス回しも他のチームメイトとうまくかみ合い、シュースケなんかは一人で22得点もあげた。

ヨシトはポジション取りがうまくできたのかシュートも相手のブロックショットも何度も決めた。

このチームもなかなかオフェンス主体のチームで、ガンガン点を取りに来た。

その中でも圧巻だったのはタツキチ先輩と鮫島さんの勝負だった。鮫島さんがペネトレイトしてゴール下でジャンプしたとき、ヨシトとタツキチ先輩のブロックが入った。しかし二人の隙間からダブルクラッチを決めてしまった。一方タツキチ先輩は1on1の状態からチェンジオブペースで一気に抜き去ると相手のセンターも華麗に

かわして得点した。二人の攻防は見てすさまじかった。試合前、タツキチ先輩が宣言していたとおり、お互い抑え合っていたといっても互いに20点近くの得点をたたき出した。

絶好調と言っているほどの出来だったオレ達だったが、ただ相手がそれ以上に強すぎた。

せっかくエースの鮫島さんをタツキチ先輩が互角の勝負をしてくれていたのに、1年4人が他の相手のチームメイトと勝負されたときは完全に地力の差が出て、得点は徐々に離れていった。

そして翔泉高校は71 - 92で負けた。

キャプテン命令

試合後、誰も言葉を発することなく会場から直接、翔泉高校まで戻った。

「終わっちゃったな。」

「ばかハルカ、タツキ先輩の前でそういうこと言うんじゃないわよ。」

「いやありがとうハルカ、その一言で少し気持ちの整理がついた気がする。」

「あつ、すいません、それなら良かったんですけど。」

「ふう〜よし、言おう。お前たちと3か月やれて本当に楽しかった、ありがとうな。」

「そんなこと言わないくださいよ、オレらのほうこそタツキ先輩のおかげで自分たちが思ってた以上にバスケも上手くなれたし、それに改めてバスケってすげえ楽しいって感じる事ができました！」

「そういつてくれて嬉しいよ、ヨシト」

「たしかにハルカの言うとおりオレのバスケ生活は今日で終わった。ただしお前たちにはあと2年ある。」

「おれ、ほんとに感謝してます。この3か月でバスケ観、いや人生観が変わったっていつてもウソじゃありません！センパイ、オレ達になんかできることありませんか？」

カズはとて真剣な目でそう言った。もちろんオレだって同じ気持ちだ。

「そうか、ならお前らの代で全国に行ってみせる！もしお前たちがそんなふうにおれに何かお返しがしたいと思ってくれているならそれがオレに対する恩返しだと思ってくれ。お前たちなら絶対できる。」

「

「はい！」

「それで新しいキャプテンについてなんだが、シユースケになつてもらおうと思つている。」

これにはサヤも含め全員が驚いた。てつきりカズかと思つていた。バスケのプレースタイルでも日頃のコミュニケーションの面でも中心的存在にいたからだ。

「うん、やっぱりみんな怪訝な顔をしているねえ。一応オレなりの理由を話しておこうか。」

意外な人選だつただけに気になるぞ。

「シユースケはこの中でも一番ゴールへの執着心が強い。それはつまり勝ちに対するこだわりが強いともいえるとも思う。オレがさっき言った“全国”という言葉は決して夢物語じゃなくこのメンバーなら十分に叶えられると思つている。4人ともその素質と気概を持つているとずっと前から思つていた。そのためにも、どん欲に勝ちに行くチームになつてほしいという理由が一つ。」

「他にも何か理由があるんですか？」

「あとはこのわがまま王子は部長にでもしてキャプテンとしての責任感をもたさないとチームプレイしなさそうだからねえ。」

なるほどねえ、たしかに。

「シユースケ、やつてくれるかな？」

「うす、センパイより必ず強くなります。」

「くうく言つてくれるねえ、まあその図太すぎる神経もキャプテン気質だかつて感じた理由の一つなんだけどね。」

「一見むちゃくちゃに思えたシユースケのキャプテンだけどさすがタツキチ先輩というかよく考えてるなあ。」

「これから数日、サヤちゃんにはしばらく練習は軽めにしといてもらうから、それぞれのメンバーとサシで話そうよ。新しく設けたい課題もあるしね。」

タツキチ先輩はまだまだ元気そうだ。そしてオレタチはまだまだし
ごかれる日々が続きそうだ。

ファミレスで受け継がれる意志

2回戦で負けた日から3日後、タツキチ先輩と話す機会が設けられた。

話す場所が部室じゃなくて近くのファミレスっていうのがちょっとガチっぽくて緊張するな。

「よ、待たせたな。」

そんなオレの不安をよそに、入部したて以来の柔らかな表情で現れた。「いや別にそんな待ってないっすよ。それより話ってなんなんすか？」

「まあそんな急ぐなつてえ。メニューなんか頼んだ？ここのいちごパフェちよ〜うまいんだぜ。」

3か月同じ部で活動してたけど、いまだにこのセンパイのペースはつかめない。

「まずは改めてウチの部活に入ってきてくれてありがとう。」

「ちよ、ちよつとやめてくださいよ後輩に頭下げるなんて！それにオレは自分がバスケットかかったから入っただけですし。」

「ははっ、他の3人にも同じようなこと言われたよ。そうだとしてみオレにとっではお前たちは大恩人だ。高校のバスケット生活の最後で思いつきり試合ができたんだからな。」

「そ、そんなもんすかねえ。」

「それにしてもお前の上達っぷりにはびっくりしたよ！」

「またまたあ、最後までオレのこと無理して持ち上げなくてもいいすよお〜」

「いやお世辞じゃなく、素直な気持ちだよ。最初にお前のシュートフォームを見たときから絶対にスリーポインターとしてコイツ伸びるなっとは思ってたけど期待以上だったよ。」

「そつつすか、そういう風に言ってもらえるとやっぱ嬉しいです。」
「それもこれもサヤちゃんのサポートがあったからこそだつてこと忘れずに感謝しとけよ?」

「そ、それは素直にうんとは言いづらいですけどなるべく努力します。」

「ホント君ら二人はお互い素直じゃなかったよなあ、見てる分にはおもしろかったけど。」

「タツキチ先輩はオレとサヤをわざとペアにしたんじゃないかって今更ながらちよつと思つたけどまあいいや。」

「それで今度はちよつとまじめな話になるんだけど」
「タツキチ先輩は一旦間を置いたのでオレも少し姿勢を正した。」

「お前も含めて4人ともバスケットプレーヤーとしてはまだまだ発展途上の段階だ。練習つてのは昨日よりも今日、今日よりも明日上手くなるためにやってると言つても過言じゃない。」

「はい。」

「チーム全体の練習に関しては新キャプテンのシュースケとサヤちゃんに話してあるがハルカには個人的なアドバイスだけしておこうと思う。」

「はい、なんででしょう?」

「まずはスリーのシュート練習を今まで通り欠かさずやって、得点面で頼れるシューティングガードになること。2つ目はディフェンスだ。カズもそうだがお前たちには身長というハンデがこれからもずっとつきまとうってくる。大岩戦で見せたように少なくとも横からパスやドリブルで抜かされないようにしてほしい。強豪校だと180センチ以上の体格で、ウサ並みのスピードを持ったガードの選手もざらにいる。そんな相手に対抗するために徹底的に足腰と相手の動作を見極める目を養うこと。そして最後に3つ目。お前にもカズと同等のパスやドリブルの技術を身に着けてほしい。」

「それってPGが2人になれってことですか？」

「簡単に言つとそうなるかな。もちろんSGとして外からシュートを狙ってほしいし、その上で今まで以上に積極的にボール回しに参加してほしいということだ。逆にカズにはシュート練習を徹底するよう指示してある。」

「もしそれが実現できたらオレら二人だけでもかなり相手を翻弄できますね！」

「その通りだ、かなり厳しい要求だがこれからやっていけるか？」

「はい、死ぬ気で取り組んでまいります！」

「よしこれでオレは安心して引退できるよ。じゃあこれからも練習がんばってな。」

「はい！」

自分のプレイヤーとしての新しい可能性を想像して興奮する反面、もうタツキ先輩がコートにいなくなるのだと思うとやはり淋しさがこみあげてきた。

襲名披露宴

タツキチ先輩とオレとの個人面談（？）が終わった次の日から本格的に、シユースケ新キャプテンの元で練習がスタートすることになった。

これからの部活の取り組み方なんかを全員で共有していくためとか何とかでサヤ主体でミーティングが開かれた。

「えっと、じゃまずむつつり新部長から挨拶だけしてもらおうかな。」

「サヤが半分にやけた顔でそう言った。」

「オレは勝つことにしか興味ない。センパイと違って自分不器用なんでよろしく。」

「なんかしまらないわねえ、まあいつかシユースケらしくて。その代り他の3人も全員副部長という認識でしっかり支えてね!」

「うっす!」

続いてサヤから練習メニューが説明された。ていうかシユースケはキャプテンになってもあまり発言する気はないようだ。

「あ、そうだと忘れるとこだった、タツキチ先輩から最後のお言葉がありました。」

「こら、サヤ、勝手にセンパイが死んじゃったみたいない方してんじゃねえ!」

「あゝもうハルカってばそういう揚げ足取りの時だけは反応早いわね。いいから耳かっぽじって聞きなさい。これからあなたたち一人一人に二つ名が与えられます。」

「え、それって猛将みたいなのやっ?」

「そうよ。みんなには大きく羽ばたいてほしいという意味と翔泉高

校の誇りを受け継いでほしいという意味で全員空を飛ぶ生き物の名前になっ
ています。まずはキャプテンのシユースケは隼^{ハヤブサ}。」「
うわぁいいなあかつけえ。」

「続いてヨシトくんは鷹^{たか}。」

なんか頼りがいある感じだな。

「そしてカズくんは雀^{スズメ}。」

くくっ、小物っぽいな。しょぼっ。

「ハルカ何一人で笑ってんの？あつ、アンタは蜂^{ハチ}よ。」

「なんでオレだけ鳥じゃねえんだよ！」

「まだまだ半人前だっというタツキチ先輩からのメッセージなんじやねえのか。」

「そういうカズだっつてスズメって。十分微妙だと思うけど。」

「なんだとお。」「やんのかこらあ。」

「はいはい、そこ、迫力もないケンカしない。それぞれの名前の由来については追々説明するからとりあえず今日の練習メニューの説明に入るわよ。」

そんなこんなで憧れの二つ名をもらったわけだが、しばらくその名前にこめられたタツキチ先輩の深い思いを知らされることはなかった。

来週金曜までの宿題

オレ達はそれぞれ新しい課題を設けられたことと、タツキチ先輩が抜けた関係で練習多少メニューの変更があった。

キソ練が終わった後の3on3の代わりとして、カズとオレが分かれてそれぞれシュースケかヨシトと組む。そこにサヤが加わった方がオフェンスとして3対2で対戦する。それでチームとしての実践練習を身に着けるということで前よりも長めの練習が続けられた。

その後それぞれシュート練習などの個人メニューをこなすこととなった。

そしてオレ達には宿題が出されることになった。そう新しい部員である。

今まではぎりぎりとはいえ5人そろっていたがこのままでは来年の一年生が入ってくるまで練習試合さえ組むことができない。

そこでオレ達はそれぞれあらゆる人脈を使って新人部員の確保にいそむこととなった。

オレの場合はまずコイツからだった。

「ヒロく、バスケ部に入ってくんない？」

「ハルカツち、この前は初心者お断りとか言っておきながら虫が良すぎないかい？」

「ごめん、その件に関しては調子に乗ってましたすいません。でもオレ友達少ないし頼めるのお前くらいしか…」

「ははっ。冗談だよハルカツち。でもオレツちが生粋の帰宅部志望だってことも事実なんだよねえ。でも他の部員さがしに協力することくらいはがんばっちゃうぜえ。」

「まじで!?!」

「リサっちの友達関係からもあたってみるよ」

「ああ、心の友よ」

そしたら早速、次の日の昼休みに見つけてきたとヒロから報告があった。

いつものお昼の女子メンバー3人に混じって、1人男子がいる！しかもなんかアヤメちゃんと仲よさげに手をつないでらっしゃいますけど、どうということ！？

「あっ、紹介するね、アタシの新しいカレのジロウくん。」

「どうも、初めまして6組の新田侍浪にっただじろうって言います。」

「お、おいヒロ、おれは新しいランチフレンドなんか頼んでねえぞ。バスケ部員を探してきてくれて言ったんだぞ！？」

「頭が固いなあ、ハルカツちは。このジローじろうっちは野球部の元エースにしてアヤメっちの現彼氏にして未来のバスケ部員なのだ。」

「ごめん全然話が見えねえんだけど、オレの頭が悪いのか？」

「もうヒロくん、ハルカくんのことからかいすぎだよ。でもそんなお茶目なトコがあたしは好きだよ。」

おいこのバカップル誰か止めてくれ。

「アタイの友達は大バカばっかか。いいかハルカ、この新田ってやつは要するに今日からバスケ部に入ってくれてるって言うてんだよ！」

おりよう、お前も十分バカだろ！細かいトコはしよりすぎなんだよ！とここでようやくウワサの新田君が話し始めた。

「実はオレ野球部でピッチャー志望で今までずっと野球漬けだったんだけど最近肘壊しちゃってさ、もう医者からまともに野球はできないって言われたんだ。でもスポーツの種類によっては全然問題ないらしくって、それにもう一回スポーツで死ぬ気でやりたくって仕方がない気持ちですつといたんだ。」

「それでアタシがハルカくん達バスケ部のこと話したらジロウくん乗り気になっちゃって呼んだの。ごめん迷惑だった？」

「うっん、全然！むしろアヤメちゃんナイスプレーだよ！逆転サヨナラ満塁ホームランて感じ！」

「よかつたあ」

「じゃあ新田君、今日の放課後から来てくれるかな？」

「いいとも！あつ、それとおれの呼び方はジローでいいよ」

「なんだかコイツとは楽しくやれそうだな。」

その後は6人で仲良くランチタイムだった。女子3人のガールズトークを聞いていて分かったんだが、どうやらアヤメちゃんはこの前の他校のイケメン男子とジローの間にも25才の社会人と付き合ってたらしい…言いたいことはなくはなかったがバスケット部に一役かった恩人なものもあるし、とりあえず今回は黙って他の人の話に合わせておいた。それに当のジローはその話の間も終始にこやかだつたしまあいいよね。

ライバル登場!?

その日の放課後からジローは早速練習に参加した。後で話を聞くとヨシトと同じクラスらしく、よくバスケの話を聞かされていてラブコールも送られていたらしい。だが、さも自分が引き込んだかのようにならず自然にジローのことを迎えるあたり、さすがバスケット部の伊達男だ。

ジローは野球をずっとやっていただけあって筋はよく、バスケ姿もある程度サマになっていた。これで身長も180センチあるというからすぐにでも実戦でやっていけそうだった。ただやはり初心者を40分フルに動いてもらうというのは無理があるのもう2人ほどは欲しい所だ。

そのことが不安だったのでそのことについてサヤに聞くと、彼女は不敵に笑っていった。

「だいじょぶ、あたしとカズくんに任しておきなさい!」

まあだいじょぶと言われたんだからそれを信頼するしかない、というかオレにはも打つ手がないからどうしようもないんだが。

その2日後、現時点で部員6人目候補となる男がカズと一緒に現れた。カズより10センチほど大きいから身長は170後半でとか、ブリーチングしたショートヘアーをがちがちにワックスで固めていて、耳にはピアスをしている。要するになんかチャライ。

「サヤちゃあ〜ん!」

そのチャライやつは体育館に入ってくるなりそう言って両手を広げてサヤまで一直線に走ってきた。

「うざい！」

その一言と同時に蹴りで文字通り一蹴されるチャラ男。

「だからサヤにはそういうコトやめとけっていったるお。」

カズには珍しく頭を抱えながらやってきた。

「カズ、こいつ誰なんだよ？」

「あ、これがウワサのチビツ子シューターですかい、カズー？」

「あーそうだよ。」

「てめつ、初対面から失礼な奴だな、お前こそなんなんだよ？」

「あ、申し遅れやした、わたくし本日付でバスケット部もといサヤちゃん所属になります葛城恭弥かつらぎきょうやであります！」

「『もといサヤちゃん』て言葉は余計ですけどね！」

なんだかサヤの機嫌がいつにも増して悪いぞ、まあ原因はあきらかだが。

「おい、なんでこんな変なヤツ勧誘したんだよカズ！」

「ちょ落ち着けてハルカ。こいつ元々バスケット部でやってたらしくてシューターとしてもなかなかでさ」

「そゝなのだ。聞けばサヤちゃんと君は夜な夜な無理やり二人つきりで特訓に付き合わされているというじゃないか？」

「あれは前のキャプテンからの指示で続けてるだけで変な意味はありません！」

「そんなに熱くなるなよ、マイハニー。だからまず君からレギュラーをもらって、おれがサヤちゃんと毎日らぶらぶ特訓をする！」

「レギュラーも渡さないし、サヤとの練習のジャマもさせねえ！」

「あゝ盛り上がっているとこ悪いが練習始めるぞ。」

シュースケの冷めた一言で急に恥ずかしさがこみ上げてきたオレは動揺をごまかすようにいつも以上に練習に励んだ。

1%のつながり

「あゝもうやなヤツ！やなヤツ！やなヤツ！」

「どうしたんだい、昨日ジブリ作品でも見たの？朝っぱらからハルカツちがテンション高いわいなんて珍しいねえ。」

「別にテンション高いわけじゃなくてちょっと昨日むかついたことがあっただけ！」

「え、なにになに？」

「思い出すのもイヤだからしゃべんない！」

でも結局、昼休みにヒロがジローに聞いてきて全部話された。

「なるほどねえ、ついにハルカツちにも恋のライバルが現れたわけかあ。」

「ちつがうう！オレは自分のバスケプレイヤーとしてバカにされたことに腹がたってんの！」

「でも本当に二人が付き合っちゃったら辛い？」

「そ、それは部活動に支障をきたさなければ勝手にすればいいし！」

「でも目の前でいちやいちゃされるのってウザくない？」

りさちゃん、それをきみが言うかね。

「まあサヤにその気がないから問題ないっしょ」

「あ、出ました恋の勝利宣言！」

「だから違うつつうの！！」

ジロー&アヤメカップルはくすくす笑ってるだけだし、今日に限ってつっこみ役のおりようは風邪で休みだしで今日のお昼はひどく疲れた。

昨日さんざんもめた末、なぜかキョーヤとオレと一緒にシユート練習することになった。

別にサヤが良かったわけじゃないけどなんでもよって今度はコ

イツなんだよ！

「まず聞いときたいんだけどさ。」

「え、なにになに？ サヤちゃんをオトスためのマル秘作戦なら教えられないよ！？」

「ばか、違うつつうの！ 今日の練習見ても思ったけど、お前普通に上手いじゃん。なんで今までバスケット部入らなかったの？」

「うーん、なんていうか一言でいうと中学で燃え尽きちゃったって感じかな。」

うちのクラスでも他の部活やってたヤツが言ってたけどやっぱりそういうのあるんだ。

「じゃあさ、なんで今さら再開したの？」

「そりゃあもちろんサヤちゃんのためだよ。」

またコイツは！

「ごまかしてんじゃねえよ、サヤなら入学からずっと男バスのマネやってんぞ！」

「サヤちゃんのことカズ経由で知ったのが最近なんだよね。で、彼女に頼まれちゃったときに一目ぼれ。」

「ホントにそれだけの理由なのか？」

「まあ99%はね。」

高っ！

「じゃあ残りの1%は？」

「カズってクラスでも元気で輪の中心にいるようなヤツなんだけど、どこか冷静っていうか冷めてるところがあるっていうか。でもあいつ、バスケの話するときだけはいつもとは違ってホントに目をきらつきらせて話すんだよね。それ見てたらまた無性にバスケやりたくなっちゃってる自分がいてさ。」

ふーん、カズもそんな一面があるんだ。たしかにオレは部活にいる時のアイツしか知らないもんな。

「でもお前にはレギュラー譲らないからな!」
「ていうか今PFのポジション空いてるっしょ、オレあそこでもいいよ。ジローくんはまだ初心者っしょ?」
「はあ、お前PFなんかできんのかよ?」
「ま、身長ある分、君よりは融通聞くよね」
「やっぱこいつむかつく。」

その後、負けたくない一心でシュートを打ち続けた。
たぶん本当にコイツとのレギュラー争いは有力なPFが入ってきてたからだな。

足りない

今日の練習が30分ほど終わった時に遅れてサヤがやってきた。

「はい、じゃ明日試合します」

なんだその授業中の抜き打ちテスト的感覚は？

「おい待てよ、ジローとキョーヤが入部してまだ数日後だぞ!？」
毎回毎回ムチャな女だぜ。

「待ってましたぜ、マイハニー！君のためならどんな試練も乗り越えてみせるよ」

しかもコレがイイっていうさらにアホなやつもいるし！

「ハルカもキョーヤもうざつたいから黙ってて!」

うわっ、こんな色ボケ野郎といっしょくたにされちまった！

「いい、明日の試合相手は前にやった柏木高校よ。」

そつえば公式戦前の1か月の期間にやった高校の中にそんな名前があつたかも。

「で、注意すべき選手とかは？」

「あつちはスタメンのほとんどが3年生で抜けてるから特に情報はなし！健闘を祈る!」

「丸投げかよ!」

なんだよそれ。まあいいか、これまでよりだいぶレベルは下がってるってことだから楽勝だろ！

今回は向こうの高校で試合をするということで朝早く部員全員で駅に集合して電車で向かった。

「いやあやつぱ久々の試合だとわくわく感がハンパねえな。」

「ちゃんと怪我しないようにストレッチとかはしとけよ。」

「じゃあ新キャプテンからひと言どうぞ。」

「もちろん勝ちに行く。行くぞ！」

スターターはPGカズ、SGオレ、SFシュースケ、PFキョーヤ、Cヨシトだ。

試合開始早々カズからシュースケの速攻ラインから得点が決まった。負けじとオレもディフェンスをかわしてパスをもらい3ptを決めた。

キョーヤはやはりPF向きではないようだ。確かに器用ではあるし外からのシュートは何本か決めていたが、180センチもなく細身の彼にとってゴール下での動きはかなりきつそうだった。

しかしその分をカバーするようにヨシトがリバウンドを要所で抑え、あとはシュースケが意地でシュートを何本も決めた。

結局試合は70-65と勝ったものの、予想以上にタツキチ先輩の抜けた穴を感じる結果となった。

「うん、やっぱり足りないわね。」

「そりゃ新チームできたてはやはやだから当たり前だろ」

「ううん、そういうことじゃないんだなあ。まあ任しといて。」

なんのことやらさっぱりだが、サヤは不適な笑みを浮かべていた。

それぞれの3か月間

むちゃぶりの練習試合からさらに数日たって、だいぶジローも練習の一員としては十分に参加できるようになってきたし、キョーヤも徐々に勘と体力が戻ってきたようだ。

しかしこの前の試合で明らかに浮き彫りになってしまったのはPF専門の選手不在という点だ。タツキチ先輩も本来でいえばむしろSFが天職だったのだろうが彼は体も鍛えられていたしゴール下での勝負強さもあつたからシュースケと並んでスコアラーとして活躍しつつ、PFとしても十分に機能していた。

しかしもうその頼れるセンパイはいない。そんな不安からか、逆に4月入部メンバーの方が浮足立っているようにも見えた。

そんな折、今日もサヤが練習に遅れて体育館にやってきた。その後ろには見慣れない、やたら威圧感のある人影がある。

「さあ速く入って！」

実際身長は180センチ前後しか（それでもオレからすりやデカいのだが）ないがやたら大きく見える。それは気合いの入ったモヒカンでもなく、目つきの鋭い強面のせいでもなかった。すごくガタイがいいのである。

「今度はラグビー部からでも引つ張ってきたのか」

「違うわよ、彼はまごうことなきバスケットマンよ！アタシは新勧の時期にカレに出会ってて、その時すでにバスケット部に入る決意もしていたの。」

「でもそんなヤツ今まで見たこともないぜ」

「キョーヤみたいに突然目覚めましたパターンてやつか？」

「マイハニー、おれじゃ物足りないっていうのかい？」

「そうじゃなくてちゃんと理由があるのよ。あと今度『マイハニー』
って言ったら二度と口きかないから!」
「わかったよ、さやちゃん。」
「珍しくキョーヤが落ち込んでる。」

「まずは自己紹介してもらいましょうか。」

「き、桐島徹平きりしまテツペイです。よろしくお願いします。」

あれ、いかつい見た目の割にかわいい声してるぞ。それにしゃべると意外におとなしそうな印象だ。

「彼はね目つきが悪いからって昔からよくからまれてたんだって。

それで強くなるうと思っておもいきってモヒカンにして、体も鍛えるために中学ではマジメにバスケに取り組んでたらしいの。」

おい、なんかサヤが勝手にテツペイクんの身の上話を始めたぞ。

「さらに勉強にも一生懸命取り組んだわ。そしてついには見事この翔泉高校にも合格したの!」

「おおー!」

いつの間にかみんなもサヤの熱気に引き込まれている。

「それなのに入学してすぐにある事件が起きたの。校内にタバコが落ちてたの。」

「あーそういえば4月の最初先生たちがそれで騒いでたかも。」

「それでその見た目から、真っ先に容疑者にされたのがこのテツペイクンてわけ!」

「テツペイクンワルだなあ〜」

この余計なひと言は力ズだ。たぶんオチをわかってて楽しんでやがるな。

「す、吸ってないですよ!未成年はダメって法律で決められているし、何より体に良くないし!」

うーんいちいち言うことと見た目にギャップがあって好感が持てるなあテツペイクン。

「そしたら謹慎が3か月よ!?!3か月!まず証拠もないってうちの

にあの先公どもあつたまおかしいとしか言いようがないわ！」

「たしかにこの一部の先生の取り締まり方えげつないもんなあ。」

「それで今日、テツペイクんの入部届と一緒に、きつちりその原因となつた犯人とへっぽこ刑事役の先公の謝罪文も提出させてきてやつたわ！」

「姉御やるう〜！」

「でもその間どうしてたの？ヒマでしようがなかつたつしよ。」

「謹慎でやることなかつたから毎日10km走と筋トレとバスケのフットワーク練習とか…、あと疲れた時は勉強くらいかな。」

この人パネエ〜

こうしてまた一人『大型新人』が入ってきた。

夏休みといえば

こうして翔泉男子バスケット部は7人となった。

決して多いとは言えないが控えの選手ができたことと、単純に人数が増えたので練習にも幅が出てきた。

途中加入の中でも一番の存在感はテツペイだ。

体が強くスクリーンアウトの技術がうまい。加えて全身の筋肉がともしなやかでジャンプ力に非常に優れている。生粋のリバウンダーだ。インサイドが弱点だったウチのチーム状況を一変させてしまった。

そうなると思いでどこかで問題になるのはキョーヤだった。タツキチ先輩のいなくなった今となつてはマネージャーであるサヤが監督として試合でのスタメンなどを決めるようになっていた。サヤはその時々でキョーヤに役割を与えた。

「シユースケには今日体力度外視でいってもらうから途中からいつでも出られるように準備しておいてね。」

という時もあれば、

「キョーヤ、今日はSGとしてスタメンでいくからカズくんとうまく連携しつつ外からガンガンいってちょうだい！」
なんて時もある。

後者だと当然オレはスタメン落ちだ。そのことをサヤに抗議する一言。

「だってアンタの方がちびじゃん。」

この女には馴染みの仲間とかそういう甘ったるい考えはないらしい。相手に合わせて容赦なくスタメンは変更してくる。

まあ勝ちに貪欲な点に関しては評価しているが。

初期メンバー4人以外の3人にもサヤから二つ名が付けられること

になり、おれ達はそれにちなんだ技も身に着けていった。

毎日ハードな練習と約週一の練習試合をこなしているとあつという間に夏休みがやってきた。

「さあ、明日から夏休みです！夏休みのイベントといたらなんでしょう??」

「海！」

「プール！」

「キャンプ！」

「花火大会！」

「流しそうめん！」

「スイカ割り！」

なんだこの楽しげな連想ゲーム(?)。もちろんオレもノリノリに答えてるうちの一人だが。

「ほかには、ほかにはあ？」

「夏祭り！」

「正解！」

「ん？」

なにをもつてして正解なんだ？

「わたしたち翔泉バスケット部は『夏祭り』を開催したいと思います！」
「まじで!?!」「うっひょい、さやちゃんの浴衣姿あ」

「ははははは、見事な浮かれっぷりで片腹痛いわ！」

なんか急にサヤが悪の親玉みたいなセリフを吐きだしたぞ？
シュースケがぼそつと言った。

「夏合宿祭りと練習試合祭り」

そういうことかあ〜。くそっシュースケもグルかあ。

「ばっかじゃあないのアンタ達。アタシらはバスケット部なんだから当然じゃない！」

そんなわけでオレとキョーヤ、あと地味にテツペイも落ち込みながら、それぞれに配られた予定がびっちりつまった日程表をながめる羽目になった。

よみがえる熱気

どのチームにとってもそうだが、勝負の夏がやってきた。

いつものキソ練のメニューより多めにこなしてもまだ時間はたつぷりあるのでサヤも加わって4対4の試合形式で練習が行われる時間が多くなった。授業もないし一日中バスケし放題だと浮かれているばあいではない。日中の練習は当然体育館の熱気は容赦なくオレたちを襲った。暑さと疲れの極限状態の中、いつもと同じように動こうとするだけでもなかなかハードだった。

水分補給や休憩は十分にとっていたがそれでも途中で倒れるメンバーが続出した。

そしてオレも御多分に漏れず、合宿4日目にしてぶつたおれてその後数十分眠ってしまった。意識がもうろうとする中、中学のときのことを思い出していた。

そう、あれも暑い夏の日のことだった。

あの時は部員数も20人近くいたので5対5で、ほぼ実践通りで練習を行っていた。

「ハイパス！ハイパス！ハイパ……ナイツシュー」

こんな感じの掛け声を一日に何度もしていた気がする。

その原因となる理由を聞くと、あるチームメイトが言った。

「だってお前のシュートじゃ位置が低すぎてどうせブロックされて決まんねえよ。」

身長のことをバカにされたことではなく、チャンスさえ与えられない、その言葉が悔しかった。

だからそれ以来、以前にもましてオレはシュートにこだわりシュー

ト動作の速さと正確性（当時は2pt限定）を身に着けた。
今のバスケ、とりわけシュートへの情熱の原点はあの時にあるのか
もしれない。

「…るか、ハルカ！」

「う、うん？」

「もう、心配したじゃないの、ずっと意識戻らないから救急車呼ば
うか本気で迷ったんだから！」

「ごめん。」

「自分の限界を超えてでも、無理はしないでよね！」
かなりムチャを言われてる気がするがとりあえずうなずく。

「さすがに今日は練習やめときましよう。あとは他の6人で3on
3でやってもらうわ。」

この日もまた、初めて練習中に意識を失うという経験と、あのサヤ
に優しくされるといふ数少ない思い出の日となった。

おアツいって

なかなかハードな練習と試合日程だったため、練習試合当日にも関わらずまったく動けないメンバーも出てくるようになった。そんな時は

「ジローくん、GO！」

の一言で初心者ジローも容赦なくコートに送り込まれた。ジロー自身が大変なのはもちろんのこと、負担が大きいのは一緒に出ているスタメン連中だった。自分たちも疲労が相当たまっている中、まだまだバスケの動きに慣れていないジローのフォローをしながら動かなければならない。当然負け試合の悔しさもかなり味わった。

そんな肉体的にも精神的にも徹底的に追い込まれた中、8月の中旬になってようやく一日休みをもらうことができた。

「明日の休みの日に関してなんだけど、ちょうど夏祭りがあるんだけど誰か行く人いない？」

「まさかまたそうやってオレ達を地獄に陥れる気か！？」

「違うわよ、今度はホントの夏祭り。実はジローくんが提案してくれたんだけど彼女のアヤメちゃんと一緒にみんなもどうかって。アタシはいっぺんそのアヤメちゃんて子とも話してみたいと思ってたし行くわよ。」

「わたくしハルカ、ホントの夏祭りだったら喜んで行かせていただきます」

「オレもさやちゃんのいるところだったら這ってでもいくぜい」

「ぼ、ぼくも行きたいな。」

意外とテッペイもイベント好きらしい。やっぱなんかええ奴やわあ。

「じゃ決まりね、明日夕方6時集合だから遅刻しないように！」

「はあい」

「あ、ハルカあ」

一番最初に待っていたのは浴衣姿のサヤだった。浴衣ってホント女の子を無条件で5割増しにするよな。

とはいっても普段とちよつと違うと思ったのは出会って最初の3秒くらいで、あとは普通に会話しているとバスケット部連中は全員そろった。

「なんかアヤメちゃん以外にもう一人女の子呼んでるらしいよ。あ、来た来た」

「こんにちはあ。」

「なあんてステキなお姉さん、お名前はなんと？」

アヤメちゃんには目もくれず、おりょうの目の前にたち両手を握った。なんかキョーヤのテンションが変だ。あつでもいつも変か。

「いやタメだよ。名前は尾川涼子だけど。」

「りょうこさあん。なんてイイ響きなんだ。ごめんさやちゃん、オレ、自分の本当のマイハニーを見つけてしまったみたいだ。」

「ちよ、ちよつとお、なんでアタシがふられたみたいになってんのよ。」

「ごめんサヤちゃんオレが余計な企画立てたばかりに」

「や、やめてよジローくん、その変な気の使い方!!」

「おいおい泣くとせつかくの晴れ着が台無しだぜ??」

「黙れ、チビハルカ!!」

「サヤさん、そのうちまたきつといい出会いがありますよ。」

「テツペイくんまで!? アンタもつかい謹慎処分にするわよ!!」

「す、すみません!!」

復讐に人のトラウマえぐるなんてさすがタフな女だぜ、というかみんながイジりすぎだな、反省、反省。

キョーヤのお熱の対象がサヤからおりょうになったこと以外は特に何事もなく、のんびりと祭りを楽しむことができた。

夏の終わり

次の日の練習で、あれからおりようとキョーヤに進展があったのか気になって聞いてみた。

「いや、全然。アドレスも教えてくんなかった。」

「そうなのか！？前におりように聞いたんだけど付き合う第一条件の『自分より身長の高い人』はクリアしてるけどな。」

「『チャライのはキライ、まずはそのピアスとれ』って言われた。」

「じゃあ取っちゃえばいいじゃないか」

「いやこのチャライオレを認めさせてみせる！」

なんだか変なトコでポリシー持つてるのが個人的にはおもしろかった。

「そういえばなんで急におりように一目ぼれしたんだ？」

「だってあの男を下に見るようなきつつきい目線にもうイチコロだったぜ。」

確かに目つきの鋭さならサヤよりおりようの方が若干上かも。

「もしかしてお前DMなのか？」

「ちげえよ、ああいう勝気な女の子をオレ色に染めちゃうのが男のロマンだろ？」

「よく分からんがバスケットに支障が出ないようほどほどにな」

「そりゃもちろんよ！」

「そこ、しゃべってるヒマあるんだったら真夏の校庭10周でもしてもらおうかしら？」

「すいませんでした！」

校庭10周はさすがになかったがこの日の練習でいつもより割増でサヤの指導が厳しかったのは気のせいじゃないだろう。まったく女

つてのはメンドクサイ
って言ったら怒られるか？

夏休み後半も合宿をこなしつつ練習試合を行ったが、夏休み前半で相当精神的に鍛えられたことと一日気持ちと体をリフレッシュできたからか劇的ではないが同じメニューでもみんなの動きはよくなっていた。練習試合でも勝ち越すことができた。

隼とクワガタの回（前書き）

すいませんここからしばし中二病的な技がちよいちよいですが、
あたたかい気持ちで読んでいただければ幸いです。

隼とクワガタの回

夏休みは終わって練習量は減ったものの、オレ達のバスケットへの熱量は変わらなかった。10月に行われる新人戦に向けてよりいっそう練習に励んだ。

そして大会初日を迎えた。

「よし、アンタ達今日までよくがんばった！行ってらっしゃい！！」
まずはサヤから珍しく激励があった。

「今日は100点とって勝つ！」
「うっす！」

キャプテンの100点越え発言からはこの大会に対する気合いがにじみ出ていた。

新人戦一回戦で派手に活躍したのはフォワードの二人だった。

ここで、夏前からの猛練習で身に付けたそれぞれの二つ名に由来する技が披露されることとなる。

まずシュースケから。試合開始早々相手のディフェンスと1on1になったと思ったら次の瞬間抜き去ってしまっていた。

「出たあ、『隼の剣』！」

ベンチで大はしゃぎしているサヤに代わって説明しよう、シュースケは一瞬足を止めた後、高速で2回フェイクを入れることで相手を翻弄しドリブルで突破してしまうのだ。

今日のシュースケの調子がめっちゃくちゃイイのを感じたカズはボールを彼に集め、シュースケは一人で50得点もたたき出した。まさにゴールはオレのもんだと言わんばかりのプレーだった。

そんなシュースケの活躍をアシストしたのがテツペイだ。

「スクリーン！」

カズが叫ぶか叫ばないかの絶妙なタイミングでテツペイはディフェンスとの間に割って入り、パスを受け取ったシュースケは悠々とレイアップシュートを決めた。

とにかくテツペイはボールを持っている時よりもむしろフリーでいるときにその力が最大限に発揮された。

さっきみたいにコートで一番激しい所に入って抑えるべき相手をそこからこでも動かさない、そんなプレーをサヤはクワガタに例えて『シザーハンズ』と名付けた。

キャプテンの宣言通り113 - 58で初戦は圧勝した。

蚊とバッタの回

この前気分よく圧勝したオレ達は当然、3日後の2回戦に駒を進めることになった。

その期間の練習は1回戦の相手が弱すぎたのもあってみんな元気がありあまっていたのでサヤは容赦なくハードな練習をさせた。特に試合の出番のほとんどなかったキョーヤとジローにはそれ以上にだ。

当日、会場の前で待っているといつまでも経ってもシュースケとテッペイが来ない。サヤがもうぶち切れ状態でシュースケに電話した。「今ドコで何やってんのアンタ!」「すまん、昨日興奮しすぎて寝れずに寝坊した。」

「アンタねえ、それでもキャプテンだってことわかってんの!?!? 緒戦の時のあのアツさはどこ行ったのよ!?!」

「…面目ない」

「もういいわ、とりあえず今から死ぬ気で会場向かいなさい」

「うつす。」

「さて続いてはテッペイね。一番新人のくせに何をやっているのかしら!」

「す、すいません、サヤさん。朝会場に向かう途中見知らないヤンキーの人たち3人からまらまして」

「うそっ! 大丈夫!?! ケガとかない?」

「いえ、ボクの方は。ただ試合前だという高揚感と時間の焦りでちよっと加減を間違えっちゃって…」

「えっ、どういうこと?」

「その3人を病院まで送っていったのですいません！今日の試合には間に合わないかもしれないですう〜」

まったくどこまでお人よしなんだ、それにしてもヤンキー3人相手に病院送りとはさすがウチの頼れるパワーフォワードだぜ！

「さあミンナも聞いた通り今日は久々に5人ギリギリでの試合よ！まずはファールアウトに気を付けること！」

「うつつす！」

「あとはペース配分ね！後半体力なくて走れないようだと話にならないわよ！」

「うつつす！」

「それからカズくん、ヨシトくん、ハルカの3人はこっちに来て。あとの2人は入念にウォーミングアップをすませておくこと！」

「こういつちや不謹慎かもしれないけど、負けられない試合でのエース不在のこの状況を実は待っていたわ。」

「どういう意味だ？」

「まずはキョーヤとジローくんが実戦ではどれだけの力を発揮できるか見てみたかったの。それとも一つ、エースがいなくなっただけにそれを精神的にもプレー面でも貴方たち3人がどれだけあの二人を生かしながらチームを引っ張っていけるのかということにすごく興味があつたわ」

「たしかにそれはおもしろいかも！」

「この先も試合が体力勝負になった時十分考えられるパターンだからな」

「ただ忘れないでね、絶対に勝って終わること！」

「うつつす！」

相手チームには幸いシューターもいないみたいなのでお互いのフォロームoshiやすいゾーンディフェンスをしくことになった。

攻めに関してはカズがこのまえ控えだった2人に何度もパスを回した。

まず最初にチャンスが回ってきたのはなんとジローだった！

「ジローくん、『ライダーキック』！」

これはもちろん、ファールをしるという指示ではない。『バッタ』の二つ名をもらったジローは飛び出しがうまくボールをもらうと相手ディフェンスが反応できないでいるうちに一気にゴール下まで駆け抜けてシュートした。まさにバッタのジャンプのように恐ろしい瞬発力だった。

づづいてキョーヤの見せ場がやってきた。ディフェンスの穴を見つけひよひよいとコート内を動き回るため彼のプレースタイルから二つ名は『蚊』になった。

「『モスキートアート』華麗に決めちゃいなさい！」

一瞬、ベンチの方をみてにやりとしたキョーヤだったが次の瞬間相手のディフェンスをかいくぐってここしかないという位置でカズからパスをもらい得点した。

一方のオレはとういうと3ptを2本決めた以外はひたすらカズのボール回しのアシストに徹した。

こっちの戦力ダウンは否めなかったし、相手も初戦に比べると強かったためかなり拮抗した試合となった。

途中、何度もヒヤッとする場面もあったが、おれ達正規レギュラー組の最後の踏ん張りもあつて61-52でなんとか勝った。

試合後のペナルティ

「昨日は控えのいない状況の中よくやってくれたわみんな。でもこれからの相手はもっと強くなっていくから油断しないように今日も練習に励むわよ！」

「うっす！」

「それからシユースケ、眠れなくて遅刻なんて元気が有り余ってる証拠ね。そうねえ、最近涼しくなってきたし試合前までの2日間校庭20周でも行ってもらおうかしら。あ、ミンナの練習のジャマにならないように4対4までには戻ってきてね。終わらせられなかったら続きは全体練習の後でね！」

キソ練の間に20周なんて半分も終わるはずもない。いくら遅刻したとはいえその練習メニューは鬼だ。

「わかった。」

そういつてシユースケは校庭の方に迷わず走って行った。

「それからテツペイ、ああいうトラブルはうまくさけること！下手したら暴力事件でバスケット部全体が廃部扱いになっちゃうかもしれないんだからね！！」

「すいません、」

「さいわいアンタがちゃんと病院まで送って行ってあげたから、あちらさんもなんかそれに感謝して円満にすんだみただけど。」

「サヤ、もうそのへんにして練習始めようぜ。」

「ハルカ、アンタは黙ってて。ヨシトくん、ちょっとこっち来て。」

「おれか？、おう」

「おもいつきりテツペイをひっぱたいてちょうだい！」

「マジか！？」

「あんたが本人のテツペイを抜かせば一番パワーがあるからね。」

「まあ自分で痛みも知つとかないとな。覚悟はいいか？」

「はい」
バシッ!!!

普段の温厚なヨシトとは思えないほど容赦ないピンタがさく裂した。
しかも何度も。

ヨシトも副部長としてこの大会への思いをぶつけたんだと思う。

「テツペイ、アンタの場合は不可抗力の面もあるからこれで許してあげる。今度はこういうことがあってもうまくかわすように! さあ練習始めるわよ。」

この前の試合に対するケリがついたところで、次の試合まで日にちが若干あることもあってこの日の練習はシュースケほどじゃないがなかなかハードだった。

そのおかげか、次の3回戦では難なく勝利することができた。

雀の回

シュースケの鬼メニューも解除された日、サヤから次の対戦相手に対する発表があった。

「次は夏ではベスト8のアリス学園よ」

「なんかカワイイ名前だな。」

「そんなのんきなこと言ってるのも今のうちよ。あそこは交換留学がさかんで本場アメリカからもたくさん留学生が来てプレーしているんだから。」

「まじかよ、そんなの反則だろ!？」

「だからかなり個々の選手の能力は高いと言っているいわ。これからスタメンの情報を言うのでよく聞いておくように。」

「PGは桜井健一175センチ。唯一の日本人よ」

逆にアメリカ人からスタメンとってるってところが不気味だ。

「SGは180センチのヘンドリックス。かなりしつこいディフェンスが持ち味みたい」

「続いてSFとしてはかなり大きめの195センチのステイービー。」

「

「そしてエースのマイケル。身長は187センチ。どうやらポイントフォワードというポジションみたい。簡単に言くとPGのできるフォワードと言ったところかしら。」

「最後にCは205センチのポール。他のスタメンの中でも群を抜いて大きいし、はっきり言ってこの身長はかなり脅威よ。」

「化け物みたいなあつまりだな」

「こりゃ不安要素山積みだ。」

「そういうと思って、前の試合のビデオを取ってきたわ。これでしっかり相手の動きをチェックしておきましょう。」

試合の前日ということもあって練習は休養もかねてほとんどビデオ観戦に費やした。

「いよいよウワサの留学生軍団との対決だな。」

「とにかく全力でやってやる！」

気合入りまくりのオレらだったが、その後キャプテンから一言。

「いいかお前ら、相手がどこだろうが勝つ！」

「うつつす!!!」

試合開始のジャンプボールでヨシトとボールが並んだ時190のヨシトが普通の身長に見えてしまった。当然最初のボールは取られ、ステイビーが強引にボールを持ってきてシュートを決めた。その後も桜井とマイケルの中と外のPGを中心にゲームを組み立てたられ、一気に0-8まで持っていかれた。

「カズくん、ここは仕切り直しよ！」

「わあつてる！」

いつになく闘志がみなぎった眼をしたカズからまずオレにパスが回した。そうするとすかさずこちらに走りこんでパスを受け取り、テツペイを使ってシュースケをフリーにさせるとパスを出した。そして難なくシュートを決めた。カズが中心になって相手にとっては予測不能なパスの流れだったに違いない。

「よし出ました、高速パス回し『ジャラジャラ麻雀』！」

そう、カズのパスは麻雀を始める前の牌のように一見入り乱れているように見える。普段一緒に練習しているおれ達でないと予測できない動きだ。そのため今のようにな一方的な攻撃ができたのだ。

ここから一気におれ達の反撃が始まった。最初強豪相手に浮足立っていたおれ達だが、カズのプレーでいつもの動きができるようになる

つ
た。

鷹と蜂の回

こちらの得点はカズがうまくマークを外れるようにパスを出したことで点が取れてたが、相手の猛攻がなかなか止めることができなかった。

ステイービーがその長身を生かして強引に何度もゴール下へつつこんで決めてくる。

特にマイケルの動きが格段によく、テツペイの『シザーハンス』がほとんど通用しなかった。フォワードの位置でボールをうまく回せる人間がいるというのはかなりやっかいだった。コイツがエースなのは間違いないようで自分からも積極的に打ってがんがん決めてくる。

さらにまたマイケルからこのボールにボールが回りシュート体制に入った。

その時ヨシトが速いタイミングでシュートブロックを決めた！

「高速ブロックシュートでた、『鷹狩り』！」

ヨシトは柔のセンターと言っている。ゴール下で力勝負に持ち込むのではなく自分がある高さを生かして、瞬時に動いて相手が嫌がるプレーをする。身長差ではどうしてもかなわない分速さでそれを補ったのだ。この試合のゴール下の高さ勝負でははつきり言ってヨシトしかできなかったなのでこのプレーは大きかった。

そこからテツペイがボールを拾い、シユースケにパスをしてゴールを決めた。

なんとか得点を離されずに試合が進んでいったがこのままでは差は埋まらない。

「ハルカ、『ミツバチ』よ！」
ベンチからサヤの指示が飛ぶ！
「あいよ！」

とはいったものの、おれがマッチアップしてるヘンドリックスはデ
イフェンスはかなりねちっこくなかなかシュートチャンスができな
かった。オレは走りに走ってマークを外し、カズからパスをもらっ
た。

パスをもらった瞬間にすぐにシュート体制に入った。これだけは負
けられねえ。

シュパツ。

「決まったあ、『^{3ptシュート}ミツバチ』!!!」
今やかなり高確率で入るようになったオレの3ptは『ミツバチ』
と呼ばれるようになった。

この後も前半間際になってオレのミツバチは相手ゴールを2回刺す
ことになる。

意外な人選

「前半お疲れさま！なんとか同点にまで追いついたわね。やっぱり終盤の『ミツバチ』3連発が効いたわね」

「どうもっ！」

「でもハルカ、いったん下がりましたよ。」

「ちよつと待てよ、オレはまだやれるぜ？」

「相手のヘンドリックスのマークはずすのに走り回ってて自分が思っている以上に疲れているはずよ、ここは一旦キョーヤに任せなさい。」

「だいじょうぶだよ、ハルカ、お前以上に点とってやるから」

「あつ、てめ〜」

「はいそこムダなエネルギー使わない！」

「それとカズくん、あなたも相手をかく乱してくれてて相当疲れると思うからシユースケ、キョーヤでボールがangan運んで行ってね！」

「うっす！」

「それでも終盤までは厳しいだろうから最後はハルカがもう一度入ってPGになってもらいます。」

「えっ？」

みんなリアクションを取る間もなく、後半開始の合図が告げられた。

後半に入って相手もメンバーチェンジをしてきたみたいでSFとCが少し小さい選手（でも180半ばはある）に変えてきた。交代した二人はどうやらかなり走れる選手らしく試合は開始早々から速い展開で攻めてきた。

ただ身長が下がった分インサイドのディフェンスは楽になった。こちらにも負けじとシュースケやキョーヤが切り込んでいった。しかし相手の運動能力が高いために1対1の勝負では簡単に抜くことができず、攻撃の起点はカズがやはり中心になるしかなく、見ているだけで苦しそうなくらい追い込まれていた。

「ハルカ、しっかりと準備しときなさいよね。これがあんたのPGデビュー戦なんだから。」

残り時間10分となったところで、カズと交代した。

コートに入った瞬間今までは違った緊張感があった。常に指令塔としてチームを支えてきたカズが抜けたまま戦うのは初めてだったからだ。

コートに入るとみんなが声をかけてきてくれた。

「お前らしくやればだいじょうぶだよ」ヨシトお。

「オレからちゃんと見せ場作ってやるよ！」なんかキョーヤが今日は頼もしく見える。

「ハルカくんいつも練習してるからだいじょうぶだよ」テッペイありがとう。

「速めにオレにボール回せ。」シュースケらしい励ました。

「っしやあー！やってやんぞ！」

当然カズのようなパス回しができるはずもなく、シュースケ、キョーヤと一緒に中心になってボールを回し始めた。幸いなはこのメンツだと得点力があるということだ。シュースケを中心に、キョーヤはどこからでも打てるしヨシトはミドルレンジからの高い打点でのシュートも打てる。それを壁になってテッペイが支えてくれ

た。
そうしてインサイドに人が集まってくるとオレが『³ptシュート ミツバチ』で打ち抜いていった。

しかし5点差がついたままどうしてもその差を埋められないでいた。残り時間3分でこれまた限界に来ていたシユースケと交代し、待望のカズが帰ってきた。
そこから再び『^{高速パス}回し ジャラジャラ麻雀』がさく裂し、82-79で辛くも勝利することができた。

次どうする？

帰り道、おれ達は今日の感想を言い合っていた。

「これでオレたちもベスト8かあ〜！」

「なんか実感わかないけどな」

「日頃あれだけ体力も鍛えてるっていうのにスタメン3人がガス欠なんて、ホントおそろしいチームだったよな。」

「たしかに個人の能力でいったら県内トップクラスだったのかもしれないわね。」

「そんなとこによくオレたちが勝ったよなあ。」

「まあ相手がチームとしてバラバラで、特にディフェンスが機能していなかったからな。」

「それでも勝ちも勝ち！それでいいじゃないか。」

「まあそれもそうか！」

「だな！」

「アンタ達、浮かれるのはそこまでにして帰ってミーティングやるわよ！なんたって今度はいよいよ四強の一角との対戦なんだから！」
「うっす！」

「まずは今日の反省ね。何かある人？」

「体力が持たなかった。」

「そうね、シックスマンのキョーヤがいなかったかと思うとぞっとするわ。」

「でもそれは今ここで言ってもしょうがないことだろ。」

「いいえ、ペース配分を考えるとということである程度対応できたよ。特にカズくん、あなたが抜けたらこのチームが崩壊することが今日改めて分かったと思うわ。」

「…ああ、わかってるよ」

分かったことだが、暗に自分じゃまったくカズの代わりにならなかったと言われているのはシヨックだった。

「その代りそれ以外は死んでよし！」

「……」

「あつ、ヨシトくんも例外じゃないからね。明後日は高さもそこまであるチームじゃないから場合によってはテツペイくんになつてもらってジローくんも投入しようと思っているの」

「いくらなんでもムチャすぎないか？」

「ジローくんもかなり伸びてきているし、明日はどうせ正攻法でいってもダメなんだからこのメンツでできることはすべて試してみようと思うの。よしじゃあ作戦会議終了！今日はとりあえずゆっくり休んでね！あつジローくんは明後日のためにも今からキソ練きつちりこなすこと！」

「うっす！」

なんだか今度の試合はとんでもないことになりそつだ。

自分の立ってる場所

今日の対戦相手はここ数年ベスト4の一角を担っている飯田高校だった。

結果から言うとオレ達は67 - 108で見事に惨敗した。

相手の異様に早いパス回しに翻弄され続け、それを補うためにみんな必死に動いたがそれでも勢いは止められなかった。

その中でジローは思った以上に奮闘してした。運動量でいえば他のメンバーと比べて遜色ないだろうし、ディフェンスは十分に役割を果たしてくれた。それでも結果の上ではまったく勝負になっていたのだから、まさしくウチの現状の100%出し切ったうえでの完敗だった。

サヤも部員全員が精神的にも肉体的にも相当まいっているのを見てミーティング等はすべて次の日以降にすることを告げた。

帰り道、ジローに誘われて二人で遠回りして川沿いを歩いていた。

「いやあ今日はこっぴどくやられたなあ。」

「たしかに。」

「オレさあ今日つくづく思ったんだけど」

ジローはそこで一旦言葉をきった。

「ん、どうした？」

「野球でもそうだけどバスケットで経験がいかに大事かって改めて気づいたよ。オレなんて今日何の役にも立たなかった。」

「そんなことねえよ、ジローは十分に動いてくれたしそれだけでだいぶ助けられたもん。」

「サンキュ。でも動けるだけじゃダメなことくらいわかってるよ。」

オフェンスなんか自分の武器がないと何もできやしねえ。もつと相手の動きを読んだりとかパスコースを防ぐような位置取りをするとかかディフェンス一つとってもまだまだやることいっぱいだなあ。

「そんなのオレも変わらねえよ。オレがもしPGとしてチームを動かさせてたらカズも休んでもらってもっと楽にさせたりもできるだろうし。」

「たしかにハルカがそうになったらスゲエことになるな！…決めた、オレはディフェンスの鬼になる！もう迷わねえ！」

ジローのその言葉には、『本当は攻撃でも活躍したかったのに』という今までためこんでいたであろう気持ちが垣間見えた。ただ逆に自分の役割を見つけて今ふつきれたのも感じられた。

「なんたって元ピッチャーだからな！守りに関してはどんと頼りにしてくれよな！」

「おう、頼りにしてるぜ！リリーフはまかせたからな！」
「いいなその考え！そうだよな、何も先発だけがすべてじゃないもんな。ちょうどオレの背番号は控え投手が着る10番だし！ありがとうハルカ、なんかオレ自分の居場所見つけられた気がする！」

10年間野球一筋だった男がそれまでの経験もつらさも飲み込んで、真のバスケットプレーヤーとしてスタートしようとする瞬間を目撃したように感じた。

万年バスケバカのオレも負けられねえ。そう思うとさっきまで下を向いていた顔から自然と笑みがこぼれた。

派手に落ち込むのは今日まで

完敗した次の日、ミーティングが行われた。

サヤが今までになく優しく声をかけた。

「まずはみんなお疲れさま。あなたたちはよくやったわ」

「くそっ、オレにもっと体力があってふんばってれば！」

カズが珍しく悔みごとを言う。

しばし沈黙が生まれる。他のメンバーは何か言う気力もないみたいだ。

「でもあつちは2年生中心のチームなんだし、これから練習していけば……」

「そんなこと言っただって負けは負けなんだよ！」

シユースケが吠える。

「……怒鳴ってわりい」

よっぽど負けたのが悔しかったのだろう。そこにはキャプテンとしての自分のふがいなさを責めているようにも見えた。

ここでジローが話し始めた。

「オレが言うのもなんだけどさ、おれ達って今回の試合で個人としてもチームとしてもまだまだ課題がいっぱいと気づいたわけじゃん。それって伸びしろがたくさんあるってことだろ。こっからまた気持ち切り替えてがんばってこっせ」

オレも自分の気持ちをみんなにぶつけてみた。

「オレはまだまだ強くなりたい。正直昨日はしょげてたけどそれじ

やダメだつて前に進めないって気づいた。それに試してみたい技とかがあって今は練習したくてうずうずしてる。」

「まったく、初心者のジローとチビハルカにそこまで言われたらしようがねえな、よしサヤ今日の練習は何にする?」

カズに元気が戻ってきたようだ。

「オレももう泣き言は言わないし、負けるのはそれ以上にまっぴらごめんだ、サヤ早く練習しよう。」

「そうこなくっちゃね。キャプテンがそうだったからには遠慮せずガンガン行くわよ!」

「うっす!」

「ただ来週から学校で何が開かれるかしってる?」

「さあ?」

大多数の部員の答えがこれだ。

「…翔泉祭です。」

「そう翔泉祭よ、我が校伝統の文化祭よ。アンタ達名前すら知らなかった人もいるんじゃない?さすがテツペイね!」

「えへっ。」

こいつは心から嬉しそうな顔をしている。無邪気でいいなあ。

「我がバスケット部としては文化祭においても全力をだして参加していこうと思います!」

「なんでだよ、今みんなバスケにやる気だしてきたとこなのに!」

「そうはいつてもなかなかあの試合でのダメージはアタシも含めて大きいと思うの。そのためにも翔泉祭でおもいきりはっちゃけましょう!それにアンタ達どうせいつもバスケのことばっかでクラスのこととかかまってないでしょ、たまには社会貢献しなさい!」

「は、は〜い!」

オレがお前で 私がアンタで

というわけでこれからそれぞれのクラスで積極的に翔泉祭に参加されるようマネージャー命令がでた。

もちろんその間も最低限のバスケの練習はきっちりこなしていたが。

うちのクラスはなぜか『男女入れ替え喫茶』なるものに決定した。男子はメイドやナース、人によってはばっちりドレスアップしてお客をおもてなしするわけだ。一方の女子は当然男装することになる。

「やっぱハルカくんて小さいからゴスロリとか似合いそうだよねえ」

「わかるわかるう」

リサちゃんやアヤマちゃんなんかが騒いでいる。

いつときますけどあんたらよりは一応身長あるんですけど！

「じゃ脱いで」

「へ？」

「服作るのにサイズ測るからに決まってるでしょ、こつ見えてもアヤメは服飾部なんだからね」

もうなされるがままだった。でも女装ってちょっとたのしみだったりもする。

当然のん気に服を作り上げるのを待っていればいいというわけでもなく、部屋のかざりつけやら当日出すお菓子の準備やらで大忙しかった。

翔泉祭当日を迎えた。

オレは当初の予定通りフリフリがついた黒を基調としたカワイイドレスが着せられた。

「や〜んカワイイ〜」

日頃は仲のいいメンバー以外からの女子からはほとんど空気扱いのオレだが今日は勝手が違う。

「オレこのハルカならイケるかも」「わかるわかる！」

おいおいやめてくれよな…今日は女子にも男子にもモテモテみたいだった。

「チヨリース！」

そう言っただけで登場したのは、渋谷風にはっちりメイクをしたギャルのヒロだった。いつもの軽〜いノリが合っただけではまり役だった。

その隣に髪を金髪にしたギャル男がいる！いつもは清純そうなりサちゃんに恐ろしいまでのイメチェンだった。

いつも以上にバカップルに見える。

普段女の子らしいアヤメちゃんがなにに変身するのか楽しみなところだった。彼女は長い髪を後ろで一つ結びにして侍姿であらわれた。うん、やっぱりカツコイイよりかわいいだな。

女子で一番人気だったのはおりょうだ。コスチュームテーマはずばりヤンキー。髪を完全に上に立てて眉毛も細めにしていてぶっちゃんけかなりコワイ！

「あ〜〜おりょうサマあたしをどこかに連れ去って〜」
とりあえず女子には好評みたいだった。

服飾班ががんばってくれたおかげでウチのクラスのコスプレはレベルが高く売り上げも上々だった。

もっかってまっか？

今日は自由時間をもらえたのでバスケット連中のクラスを中心に回ることにした。りさちゃん達は今日は女の子同士だけで回るとうことで今日はヒロと二人きりだ。

「あゝ腹減ったなあ、なんか食べない？」

「じゃあここにしよう、ジローつちと、でっかいのにオシヤレでうわさのヨシトつちがやってるお店だし。」

「へいらっしやゝい、てなんだハルカとヒロかよ」

「ちいゝす。たこ焼き4つともちチーズ味2つ。」

「よく食うね。」

「朝から何にも喰ってなくてさあゝ。ちゃんとお前らの売り上げに貢献してあげるんだから感謝しろよ？」

「へへっ、どうも！あいよ！」

裏で一生懸命たこ焼きひっくり返してるヨシトにもちよっかいをだしに行った。

「ヨシトお、お前の他校の彼女さんは今日は来てるの？」

「ええ？ああ、あそこの近くでたつてクレープ食べてる3人組。」

「あ、あれか。で、どの子？」

「黒髪ロングで一番背の低い子。」

けっこうかわいい。でも150センチないだろ、これはかなりの身長差カップルだな。

「ふうゝヨシトつちやるう。」

ヒロお前初対面なのにガンガンくるな。

「デザートなんか食べたいなあ。」

「あつ、シュースケがパフェやってるみたい。それにしても店の名前が『スイーツ（笑）』で」
ふざけた名前の割にはなかなかおいしかった以上に驚いたのはシュースケが受付だったことだ。日頃の声だしのおかげか声自体はよくでていたがその光景はおれには不自然で滑稽に見えた。

カズとキョーヤの店にも立ち寄ってみた。どうやらホストクラブ風のコンセプトのようだ。

「なあ、なんかお客さん女の子ばっかじゃねえか？」

「まあだいじょうぶっしょ、店員さん指名でカズっちとキョーヤっちお願いしまっす。」

「おゝキョーヤあ」

「ちいゝす、ハルカのまぶダチのヒロって言います」

「いいねえそのノリ」

コイツら気い合いそうだなゝ

「それにしてもここのお客女の子でござったがえしてんな。」

「そりゃあオレの魅力が世の女性を引き付けちゃうんだなあゝ。今もむりくり抜け出してやってんだぜ??」

「そりゃどうも。」

「もう年上の女性とかいっぱい来ちゃってオレにとって天国かもゝおい、この前のおりようはどうなった!? ああコイツはタイプだったら誰でもいいっていうアレなのか。」

「ハルカあ、昨日のお前のゴスロリなかなかアリだったぜ、やっぱチビはうらやましいなあゝ」

「うるせえ！それよりカズはどうした？一応指名したんだけど」

「カズくんは当店の一番人気となっておりますので知り合いの男連中なんかに構ってるヒマはないのであります。」

たしかに隣できゃーきゃー言われてる中心にちらりとカズが見えた

ので会うのはやめて次の店に行くことにした。

「今度はサヤんどこでも行ってみるか」

「おお、うわさの女子マネちゃんについて会えるう」

店に入るとサヤの威勢のいい声が聞こえた

「はいはいみなさん見てらっしゃい寄ってらっしゃい、勝てば5000円のケーキがまるまる1個もらえるのに、一回たったの3000円だよ」

「なんだなんだ？」

見ると Teppai が机の上に右腕を出して座らせられている。

「なにやってんだ？」

「見て分かんない？腕相撲。ちなみに Teppai は今日48連勝中。はんぱねえ」。

「アンタ達もやる？勝てばケーキ1ホールよ？」

「さすがにそんだけ相手してれば疲れてんだろ。じゃあやったるうじゃんか！！」

二人とも瞬殺だった。

「よしこれで50連勝つと 毎度あり」

くそつ完全にカモられてしまった。しかし Teppai のやつあの力は反則だろ…

こうして楽しい文化祭二日目は終わった。

2位じゃダメなんですよ

「さあ次は体育祭よ！」

文化祭が終わったその日の練習からウチのバカマネージャーはこんなことを言い出した。

「はあ？翔泉祭今終わったとこなのに何言ってるの？それに体育祭はまだ2週間後だろ！」

「お、エライぞ、ちゃんと日程を把握してるなんて。」

「そりゃどうも…って別にそんなこと言われてもうれしくないわあー！！！」

「まあ落ち着きなつてハルカ。で、体育祭にもなんか意図があるっていつの？」

「ふふつ、それはねアンタ達には我が校の猛者どもとガチンコ対決してもらいます！」

「そりゃ出るからにはがんばるけどさあ。」

「あまあ〜い！そんな心意気で全国が狙えると思ってるの！目指すは全員個人種目優勝よ！」

ウチの高校は進学校なのでそこまで部活動には力を入れてはいないとはいえ、各部のEーS級、特に陸上部の面々がその障壁になるのは明確だった。

「これからアタシからそれぞれ出場する競技を指定するからしつかりクラスで勝ち取ってくるのよ！」

こうしておれ達は個人で1位をとるべく体育の練習でも部活と同じくらい懸命に励んだ。部活の間中はいつもより倍増して徹底的に体力トレーニングが課されたのは言うまでもない。

2週間の部活の練習と体育祭の二重の負担とプレッシャーで本番を迎えた。

まずは50m走からだ。

「カズくん、ふぁいとー！」

となりで一段と気合の入ったサヤの声がする。

基本クラス対抗なのでクラスごとに別れて応援のはずなのに、バスケット部に限ってはサヤを中心に一か所に集められている。

先生たちに何度か注意されたがその度に

「見逃してください！その代りウチの部員が全員1位とって大会盛り上げますから！」

という勝利宣言をしてしまったのだからますますやるしかなかった。

そうこうしているうちに50m走はカズが景気よく1位を取った。

やっぱアイツの瞬発力はんばねえな。

「シユースケくん、この勢いでよろしく！」

と100mに送り出されたのだったが、運悪く陸上部のエースが登場し2位になってしまった。

つづいて400m走で走るのはオレだ。

これが思ったよりキツイんだよな。50m走みたいに全力で走る状態をずっとつづけるのだから途中で心が折れそうになる。

そんな気持ちが出てしまったのかぎりぎりです選通過したものの、決勝ではブービーで終わってしまった。

「なっさけないわねえ。ま、これにはあんまり期待してなかったんだけど。」

じゃあやらすんじゃないやねえよ！このために毎日きついつい走り込みさせられたんだからな！

続いては1500m。走るのは運動量ピカイチのジローだ。サヤの采配は見事に的中し、1位を獲得した。

次からはイロモノ系競争の競技が始まる。

まずはイロモノ系王道、障害物競走。

ここはバスケでも器用にいろいろな役をこなすキョーヤの順番だ。周りが網くぐりや平均台で苦労しているところをスイスイとゴールしてしまった。当然1位。

続いてパン食い競争。これに出場するのは部内でHighestなヨシトだ。パンを取る時もほとんどジャンプすることなくゲットし1位をとった。こりやさすがに反則だろ。

そう思っていたらそんな他の部員のヤジをぶつとばすように、次のやり投げで50m以上も飛ばしぶつちぎりでの1位をとった。

ここからがウチの体育祭の不思議なところ。普通は団体で和気あいあいとやる競技を代表者1名ないし2名をだしてガチでやるうといのうだ。

まずは綱引き。ここで登場するのはパワー自慢のテツペイ。

引く力もさることながら、踏ん張りがとにかく強く持久力もはんばない。最終的には相手が根負けして最後まで勝ちぬいた。

そしてバスケ部にとって最大の見せ所、ガチンコ一人玉入れ。代表者はクラスで2人まで出られる。

そう、このために2週間、部員全員がシュート練習700本を義務

付けられたのだ。

本番の球と違うじゃないかと抗議したら一言。

「バカじゃないの？そんなことしたら本末転倒でしょ。あくまでバスケの練習の一環に決まってるでしょ。」

…おっしゃるとおりでした。

これに関してはバスケット部の圧倒的な展開だった。

その中でも優勝の行方はシュースケとオレに絞られた。

3ptで鍛えていて遠くからでも決定率の高いオレに対して、シュースケはとにかくシュートに持つていくまでのスピードがハンパなく速い。

結果打ち負けてシュースケが1位をとった。

130

ここで気づいた。ヤバイ、オレだけがまだ1位をとっていない。ちなみにサヤはというと一番得意な距離だという100mできつちり1位を取っている。

そんなオレに救世主のような企画が最後に待っていた。『部活対抗二人三脚』である。

「よし、ちびっこブラザーズ行ってきなさい！」

今はもはや何も言うまい。勝たなければオソロシイ制裁ときつと鬼のようなトレーニングが待っているに違いない。

それは連帯責任であるということも十分承知しているカズも、いつものケンカモードもなく真剣だ。

「よーい、ドンー！」

さすがは半年以上ガードコンビとしてやってきただけあって息がぴったりあう。ついでに言っとくと身長もほぼぴったりだしな。

足の速さだけで強引に走っていた数々の部の代表たちを抑えて、おれ達は真っ先にゴールテープを切った。

まったく、試合以上に緊張させられたぜ。でも危機に瀕したときに必死に応援し合ったときの部員の一体感と、普段のバスケットで得られるものとは違った種類の自信がつかめたような気がする。

クリスマス？なんだそれ？

校内にバスケット部旋風を巻き起こした体育祭から一か月、それからまた放課後はバスケのバスケットによるバスケのための練習を夜遅くまで行っていた。

冬休みに入るその日から食い気味で合宿がスタートした。

サヤは体育祭でなにかヒントを得たのか、今回はレクリエーション的な練習が取り入れられた。負けたら当然のようにコート内ダッシュユ20往復（ただし3分以内）というキツ〜イ罰ゲームも待っている。

まず一つ目はコンビを組んでフリスロー対決。

ペアはシュースケとサヤ、キョーヤとテツペイ、カズとヨシトになった。

そうすると自然とオレの相手はジローに決まり、それはさすがに…と言おうとするとサヤから

「アンタは自称、翔泉高校No.1シューターでしょ、これくらいハズレとして当然よね。」

と一言。

自称した覚えはまったくありませんが。

でも実際SGとしてやってくたためにはそれくらいのモノを背負っていかねばならないのかもしれない。

そしてオレは堂々と部内トップの決定率91%をたたき出した！！

ちなみにジローには比較的あまりシュート練習はやらせてなかったので合計得点はオレ達の組がビリだった。

そして待っている地獄の往復ダッシュ。もうオレが悔しさにまみれ

ながら苦しんで走っているのをサヤが見て楽しんでいるとしか思えない。

しかし同じ罰ゲームなのにジローは余裕そうだ。くそっ、さすがは1500mの覇者だ。

一応気持ち程度の休みだけもらって、このペアのまま次の種目も続行された。

続いては2対2でのドリブル突破対決である。一方がオフセンス、他方がディフェンスになり総当たり戦でゴールラインまでの到達時間を競う。もちろんできるならスティールもありだ。

オレもパスやドリブルの練習にも最近かなり力を入れているもの、カズやシュースケ、キョーヤなんかに比べれば劣る。これじゃさつきより絶望的かと思っていたが、オフセンスはともかくディフェンスでジローがなかなかの粘りをしてくれたのでビリはまぬがれた。

今度はオレとシュースケとカズの3人が組んで残りのメンツがディフェンスになっての練習だ。

「改めて敵にするとたけえし、それにかなりやりづれえな。」

「ていうか3対4で時点でかなり無理があるだろ。」

「弱音はいてんじやないわよ！これでアンタたち点数とれなきゃさつきまでの倍のダッシュだからね！」

「うす！」

もうやるしかないみたいだ。

こんな風にあらゆるプレッシャーをかけられながらの練習というか軽い拷問というか…は一週間続いた。

合宿が終わった頃には今年はもう残りわずかとなった。

飽きたあゝ

大晦日と元日の2日だけは休みをもらったので家でのんびりするこ
とになった。

家っていうのはなんというか、いくら学校が楽しくなってもそれ
も落ち着いて帰ってこれる場所だ。

しかし最初に言っておくがウチには決して『妹』などという萌えポ
イントの高い存在はいない。
いるのは

「おい、ハルカ。このゲーム一緒にしようぜ」と、5コマにも関わ
らず平気で友達感覚でからんでくる弟だけだ。

うちで『お兄ちゃん』なんてフレーズが聞かれることはほとんどな
い。あるのは弟が友達を呼んだときに気恥ずかしそうにオレを紹介
するときだけだ。

ちなみにウチの両親を紹介しておくとかカンは特にこれといった趣
味もなく、マジメが取り柄といっておもしろみもない感じだ。最近流
行りの韓流ブームとやらにもまったくノル気もないらしい。まああ
れはあれでもし自分の母親が韓国ツアーとか行ってたら複雑な気持
ちになりそうだが。ただ、そんなオカンにもハマったものがある。
オーケストラを題材にした某ドラマは大好きで、サントラCDまで
大人買いしていた。だから今でも帰ってくると家ではコンサートが
開かれていることがある。

一方のオトンは流行りもの大好き人間だ。発売当初からすでにスマ
ートフォンを手に行っているうちの一人だがそのタッチ操作がなんと

もたどたどしい。機械オタの弟いわく、宝の持ち腐れでイライラするらしい。それに関しては同感だ。

さらに最新式のウォークマンを買ってきて一言。

「で、AKBの歌でどれ流行ってたんだ？」

なんかこのセリフを自分の父親から聞くと若干せつないものがある。

やっぱり訂正しよう、落ち着くには落ち着くが、半日で家にいるのは飽きた。

そこでオレは紅白そっちのけでバスケ部の面々に電話をかけまくった。

元日に来たのはカズとジロー、そして彼女のアヤマちゃんだった。アヤマちゃんは今日は髪をアップにお団子にしててかわいい。

「新年あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます。」

「なあハルカ、これで全員か？」

「いや、いちおうもう一人くるはずなんだけど…」

「あつけましておめでとう〜！」

でっかい声と登場したのはサヤ。

せっかくの着物にも、最初のリアクションすらできなかったじゃねえか。

「ったく、もっと女の子らしいあらわれ方はできないのか？」

みんなで初詣にいったあとお祈りをする事になった。

「ジロー、お前は何お願いしたんだ？」

「チームのためにディフェンスで頼れる男になれるようにって。」
「おお、なんたるチームをおもいやるお願い！」

「ひどい、アヤメのことはなんにもお願いしてくれなかったの？」
「もちろん二人がずっと仲良くいられますようにってのもお祈りし
といたよ。」

「ふふつ、嬉しい。」

「バカップルなかなかこの二人もお似合いになってきたな。」

さて、順番的に今度はオレの番だ。

「身長があと20センチ伸びますように」

あつ、つい声をだして言ってしまった。

「ハルカ、それはちよつと無理なんじゃなあい？」

「うっせえな！それよりカズ、お前はなにお願いしたんだよ。」

「オレはもつと夢は大きく30センチ伸びますように」

「お前の方がかなりのムチャなお願いだろうが！てめえの成長期は
とつくに終わってんだよ！」

「ああ？てめえもだろ？」

「そこつ、新年早々ちよちやいケンカしないの！」

「そついうサヤは何お願いしたんだよ？」

「もちろん全国大会優勝に決まってるじゃない！」

はい、一生貴方様についていきます。

なんだか今年もバスケ一色な一年になることは間違いなさそうだ。

今年はまだまだこれからよ？でもそんなの関係ねえ！！

「来週、聖仙高校に殴り込みに行くわよ！」

1月2日に早速体育館に召集されて、バスケットとしての新年一発目の発言がこれだ。

「あそこつてたしかこのまえの新人大会でベスト8に入ったところだよな？」

「そんなこと新年1発目からやってダイジョブか？」

「そんなくつたら心配する暇があったら練習する！なんたって相手は部員50人はいるんだからね！」

「当然ベンチメンバーも12人そろって充実してるってわけか」

「そういうこと！でも同じベスト8なんだから気後れせずに攻め気で行くわよ！」

「うっす！」

「このチームで要注意なのはキャプテンのPG天王寺誠一郎よ。彼はどんなチームメイトでも器用に使いこなすわ。だから容赦なくベンチメンバー全員を使ってくるというかなり王様チックなプレーをするわ。」

「なるほど、そうするとこっちは相手のペースに合わせずある程度体力配分を考えていく必要があるわけか。」

「そうね、でもそれじゃ後手後手になるからあくまで攻め気よ！ジロークン、頼りにしてるからしっかり特訓の成果見せてね！」

「おす！」

新年明けても当然のように合宿が生まれ、新学期が始まる前にもかかわらずバスケット部の面々だけはふらふらで登校するハメになった。

そして聖仙高校との試合の日になった。

「いい、今回はペース配分というのも重要な課題になってくるからそれを踏まえたくうえで戦ってきてね」

「だが絶対に前半から負けずに点とりにいくからな！」

「うつつす!!」

試合開始してから7分ほどはウチの有利な展開になった。シュースケが合宿中に磨きのかかったドリブルでどんどん抜き去っていく。しかしそこからメンバーチェンジをされて状況が変わった。まったく別のチームになってきたかのようにプレースタイルが変化してきたのだ。それに翻弄されるかのように失点が続いた。

すかさずこちらメンバーチェンジをした。

「ジローくん、ハルカと交代よ。ディフェンス面でうまくガード陣をつぶしてカズくんを楽にさせてあげて！」

後半は3点ビハインドしたまま迎えた。

「いったんシュースケを下げるわ。キョーヤ、暴れてきてちょーだ
い
い」

「りようかいつす！」

キョーヤが入ったことで一時は再び勢いが出てきたがなかなかその後には点数が伸びなかった。

「ハルカ、テツペイクんと交代よ。ジローくんにはかなりきついで相手のPFとマッチアップしてもらおうわ。」

一旦休んで力の戻ったオレにキョーヤとカズはボールを集めてくれ、その期待に応えて『^{3 point}ミツバチ』を決めていった。

そんな中、ゴール下が手薄になってもらっては困るので、実質交代要員のいないヨシトはかなりキツそうだった。それでもずっと踏ん張ってくれていた。

残り時間10分となった時に再びシュースケを投入し得点ラッシュ

となった。

「さあ残り三分よ、体力気にせずガンガンにつっこみなさい！」
カズからのめまぐるしい『高速六ス回し麻雀ジャラジャラ』からキョーヤ、シュースケのスコアラークンビが速いテンポで点を取っていった。オレもとどめに『ミツバチ』一本決めたところで試合終了した。

得点は81 - 77でなんとか勝利に終わった。

今日は、一人一人の持ち味も存分にだせた内容だったし、文字通り7人とも死力を使い果たした戦いだっただけだ。

意地っバレンタイン

今日の日付は2月14日。

一年で男子がもつともそわそわする日がやってきた。

べ、別に女子からどうしてももらいたいわけじゃないけどね。ただオレってほら、チョコとか割と好きだしやっぱおいしいチョコとかもらえたら嬉しいかなあなんて。

そしていつも同じメンバーのはずなのに、いつもとはちょっと違う雰囲気の日休み。

「はい、ヒロくん。あたしからの手作りチョコ。」

「サンキューりさっちい。さっそく愛のチョコレートいただきます。」

「もうヒロくん、ホントは家まで大事に持って帰ってもらいたかったんだぞ。」

「ジローくんあのね、私も一応作ってきたんだけど食べてくれるかな？」

「もちろんだよ、ありがと。」

くそっ、バカップル×2め、人の目の前で楽しくチョコレート渡しやがって。

「あつ、ごめんハルカくんの分作るの忘れちゃってた。」

「ホントだ、私もだ。ごめんねハルカくん。」

ようやくボクが存在にキツイテクレマシタカ。デモモウオソカッタネ。

まあいいけどね、こんな大本命見せられた後にもらっても微妙だしい。

「そつだ。おりょうはハルカくんの分作ってきてくれたりしてない？」

「アタイはそういうチャラついた風習には乗っかる気はないよ。」
こうしてオレが唯一仲良くしている女性3人からの義理チョコもあ
てが外れてしまった。

けつきよく今日一日は特に女子に呼び止められることもなく、放課
後いつものようにバスケの練習にいそしんだ。

すると帰りがけにサヤに呼び止められた。

「ちよつとハルカ!」

「なんだよ、これからまさか特訓とか言い出さないだろうな?」

今日はいつもの練習量だけどイロイロあって疲れてるからもう早く
帰りたいんだよ。

「ち、違うわよ!これ!」

「なんだよこの包み?」

え、ちよつと待って、もしかして?

「見りゃわかるでしょ!チョコよチョコ!」

「まじでか!?オレにくれんのか?」

「べ、別にあんただけのために作ったんじゃないんだからね!」

「わあってるよ、他の部員にもあげたんだろ。」

「ほ、他の人にはあげられなかったの。」

「なんでだよ?ミンナにもあげりゃいいじゃねえか。」

「ほ、ほんとに部員のみんなにあげたかったんだけど。ほら、ヨシ
トくとジローくんは彼女がいるからあたしがあげてややこしくな
ってもらっても困るじゃない?」

ヨシトはわからないが、ジローの方はあー見えてアヤメちゃん嫉妬
深いタイプらしいからたしかにそれは賢明な判断かもしれない。

「それにカズくとキヨーヤはクラスでも明るくって女の子からも

たくさんもらってるみたいだし。」

意外とあいつらやるなあ。なんか気軽に義理チョコとかあげやすそうなタイプだもんな。

「シュースケもあれでクールに見えるから隠れファンが多いみたいで今日いっぱい手に持つてるの見ちゃったんだよね。」

ま、まあたしかにシュースケって見てる分にはカツコイイもんな。

「それにね、今日クラスでテッペイくんにあげてる子がいたの！しかもちよつと本気マツっぽかったし。」

まさかテッペイまでもが！？

「けつきよくテッペイくんからは照れて何も言い返してあげれなかったみたいけど。」

うん、そこはテッペイらしい。

「だ、だから仕方ないから誰からももらえてない、かわいそうなアントが責任もって食べなさいよね！」

「しょ、しょうがねえな。もらってやるよ！なんたってオレ甘いもの大好きだし。」

「アントがいてホント助かったわ、このまま自分で持って帰るのもアレだったし！」

「そりゃどうも！お役にたてて光荣ですっ〜」

「ありがたく食べなさいよ、せっかくアタシが一生懸命作ったんだから！それ食べたのに明日からの練習でへばってたら許さないんだから！」

「へいへい分かってますよ〜」

こうして自分の部のマネと、しょうもない意地の張り合いをしたまま今年のバレンタインは終わった。

ちなみに今年唯一収穫したチョコは甘酸っぱい味がした。

1年のシメ

3月ももう下旬に差し掛かっていた。

ベスト8という看板にも実力がともなってきたようで、これまで年明けから練習試合をかなり組んできたがほとんど負けなしだった。最近は個人の動きもいいしチーム全体もノッてきている。

そんな折の練習後でのこと。

「春休みは一年の思い出づくりのためにみんなで旅行に行くわよ！」

普段きつちり練習を行っているとはいえ、新人戦終わってからちよくちよくイベントが入ってくるなあ。まあいいか、楽しそうだし。

「やつほ〜い！！で、どこに行くんだ？東京か？京都か？それともいつそ沖縄とか？」

「期待させてるところ悪いけどそんな予算はないわ。場所は長野よ。」

「長野かあ〜でも長野も自然がいっぱいありそうで悪くないよな。」

「あつ、ちなみに目的地は長野第二商業高校だから。」

え、イマナントオツシャイマシタ？

「いつときますけどのん気に観光する予定なんて一切組んでいませんからね。」

くそつ、この鬼マネージャーがただの娯楽を提供してくれるはずなのは分かりきっていたじゃないか！

「そこつ、なんか異論でも？」

「いえ、なんにも問題ないであります！」

こうして思い出旅行という名の、試合遠征の出発の日を迎えた。そうは行っても遠出というのはなんかそれだけで楽しい。みんな行きのバスの中では大いにはしゃいでいた。

「でもどうして県内の高校じゃなくて他県までわざわざ行くんだ？」
「それはアンタ達に体験してほしい選手がいるからよ。任せなさい、遠出しただけの収穫は必ずもたらしてみせるから！」
「なにやら不敵な笑みを浮かべている。しかしサヤがこういう顔をしている時はろくな目にあつたためしがない。」

「石川県から来ました、翔泉高校です。今日はよろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

「しゃーーす！！！！！！！！」
「けっこうこつちも気合い入れてあいさつしたつもりだったが、なんだかその3倍はあるうかという声量で返された。とりあえず元気だけはすごいことは分かった。」

しかしよく見てみると部員の数は一〇人そこそこしかない。

「なあこつて」

「長野第二商業高校、創部3年にして長野県内ベスト4にのしあがった強豪校よ！一時はタツキチ先輩しかいなかったウチと境遇は似てるでしょ？ただしベスト4の名は伊達じゃないから覚悟しておきなさいよね！」

「うっす！」

試合が始まるとまずその気迫に圧倒された。全員がボールに対する執着心が強く、全員がワンマンプレーヤーのスコアラーなのかと思うくらいガンガン切り込んでくる。そんなオラオラな集団を相手の

PGが器用にまとめているので、アリス学園のような能力だけにまけたチームではないのでオフENSに隙がない。ディフェンスにおいても激しい動きでまったくこちらの攻撃をさせてもらえない。

前半10分を過ぎたあたりからシユースケがまず動きが悪くなっていった。相手に対して意地になって何度も1on1をしかけていたからだ。まあそのおかげで一人で12得点もあげていたのも事実だった。

代わりにキョーヤがすぐに投入された。パス中心の攻撃に切り替えたおかげもあってチーム全体としてはだんだんと点数がとれるようになっていった。しかし相手の攻撃はまったく防ぐことができなかった。

後半いままで縁の下でずっと踏ん張ってきたテツペイを下げジローに代わった。平面での攻撃は多少抑えることができたが、当然ゴール下ではやられっぱなしだった。その後も自転車操業のごとくメンバーチェンジを繰り返したものの全く歯が立たず65-112で久しぶりに惨敗した。

しかも一番おどろきだったのが、あれだけ激しく動いていたにもかかわらず相手は一度もメンバーチェンジをすることはなかったのだ。同じような境遇でもこんなにも差が開くのかと思った。しかしまだまだ自分たちにもできることがあると分かったし、おれ達もがんばればこうなれるという希望にもなった。一人一人それを考えていたのか、帰りのバスは行きとは打って変わって静まり返っていた。

あれから1年

あの長野での一戦以来、個人でもチームでも課題が見えてきたよう
で目的意識をもっていつそう練習に励むようになった。

そして新しい4月を迎えた。

バスケ部は新入生勧誘のために実際にプレーを実演することになっ
た。もちろん演出監督はサヤだ。

「いい、アンタ達がいくら強くなったと言ってもまだまだ足りない
部分が多いし、控え要因の不足という問題は未解決のままなのよ。
この勧誘イベントにかかっていると行っても過言じゃないから各自
覚悟しておくように！」

「うっす！」

「で、当然誰がプレーするかが重要になってもらうわけなんだけど、
」

ここでサヤは一旦ためる。一瞬目があった。まさかオレか？オレの
華麗なる3ptシュートが1年生の前で披露させちゃってもいいん
ですかあ！

「シュースケとヨシトくとカズくんで行こうと思います。」

オレじゃなかったあ！っていうかオレ以外の初期メンバー全員だし
！！

「あ、あとついでにハルカの『ミツバチ』^{3ptシュート}ショーもやるときですか。
」

「よっしやー！って、ついでみたいに言うな〜！！！」

勧誘イベント当日ではウチのパフォーマンスはかなり評判になった。
なんたってヨシトが派手にダンクを何本も決めてきたからだ。それ

をアシストするのがカズ。絶妙なタイミングでパスを出すので、ヨシトもダンクにいきやすいし、きれいに見えた。

シュースケが速いドライブでつつこんで行ってディフェンス役のヨシトをさらりとかわしてあつという間にシュートを決めてしまった。1年生の興味を引くという点では大成功と言っていいだろう。

あ、もちろんオレもバンバン『ミツバチ』決めたりしましたよ！

そしてその日の放課後、10人ほどの仮入部員が集まってくれた。

「来てくれてありがとね。今日は見学だけにしておくから気軽に見て行ってね」

サヤが異常に優しい。おれ達にはこんな声色使ったことないくせに。

「おい、ここのマネさんかわいくないか？」

「うん、スラッとしててかなりイイよね」

そんなこそこそ話が聞こえているサヤもまんざらではなさそうだ。

次の日から一年生にも、徐々にではあるが練習に参加してもらおうことになった。

そして一週間が経過した。

今日集まったのは3人だった。

「あ、ある程度予想はしていたものこのこまでヒドイとは思わなかったわ。」

「だから言ったじゃねえか、もう少し軽めの練習にしようって。」

「バカ言ってるんじゃないわよ！アタシが見たかったのはウチの練習を見ても気後れせず、バスケに取り組もうという気概よ！！」

「よく入ってくれた。名前と身長、ポジションを言ってくれ。」

まだわめいてるサヤをよそに、キャプテンのシュースケが仕切る。

まずはかなり存在感のある彼からだった。

「石久保利文いしくほりつぶんですう、ポジションはCでしたあ。」

「キミ、90はある？」

まずカズがつつこんだ。

「あ。すいません言い忘れてましたあ。身長は191ですう。」

「じゃなくてオレが気になっちゃったのは体重の方なんだけど……」

「すいません受験で太って100キロ超えちゃいました。」

通りで恰幅がいいわけだ。

「まずキミの場合はやせることだな。あとあだ名はイシちゃんだけでっ！」

「次、」

再びシユースケが愛想なしに仕切る。

「城貴文じょうたかふみ、187cmです。ポジションはPFやってました。」

「お前の名前はなんか地味だ。つつうわけでバスケットではジョーだな。」

カズが勝手に独断であだ名をつけている。

それにしても今年の新人はなかなか大型なあ。ま、チーム的にはうれしいことだけだ。

それにしてもコイツ練習前から気だるそ〜

「次おれしゃべっていいですか？片倉壮真かたくらさうまって言います。身長は181あります。でもポジションはPG希望っす。ぶっちゃけシユースケさんのドライブもヨシトさんのダンクもチョーかつこよかったんですけど、個人的にはカズさんのプレーが一番しびれました！」

ようしゃべるやつちゃな。PGってのはおしゃべりが必須なのか？

「あと最後にこの子をちゃんと紹介しとかないとね。」

いつの間にか体育館から消えていたサヤが戻ってくると、隣には女の子がいらつしやるではないか！

「マネージャー希望の井上心晴いの上 心晴です！」「もちスラ」を読んでバスケット部に入ろうと思いました。」

「え、ゴメン何それ？」「もしドラ」じゃなくて？」

「違います！わたしが言っているのは『もちろん高校バスケットのマネージャーになるような人はスラムダンクを読んで赤木晴子ちゃんに憧れてるよね』です。」

なんだその2匹目のドジョウ的名前は。それに湘北のマネと言えば彩子さんだろうが！

「知らないなあ。ねえ作者ってだれなの？」

「えっと井上雅彦っていうんですけど…。」

「え、もしかしてあの漫画の作者ご本人が書いてるの？」

「あつ、違っんです。実は作者はウチの父なんですつ。たまたま作者さんと名前が似てるからって『スラムダンク』に昔からかなりはまっちゃってて。それでアタシの名前もホントは『晴子』になる予定だったんですけど、でもお母さんがなんとか止めてくれて交渉の結果、心晴心晴になりました。」

なんとも楽しげな家族だな。

「さあ自己紹介もすんだわね、さっそく練習始めるわよ！」

「うっす！」

こうしてひと癖もふた癖もありそうな新人部員と新マネージャーの紹介は終わった。

第2の

一年生が入った後も特に練習メニューを変えることなく、おれ達は地区予選に向けて練習に励んでいた。

それでも、今はキソ練だけとはいえ1年3人のうち誰一人やめることなくついてきているのだからなかなか根性のあるメンバーだと言っている。100キロ越えだったイシちゃんもおもしろいように絞れていった。

今日はカズと2人でシユート練習500本（オレだけは3pt）をこなしていたので最後に帰ることになった。

そしたら部室の前でタオルとスポーツドリンクを持っている男が立っている。そのウワサの1年の一人、ソーマだ。

「カズさんお疲れっす！」

おれは！？と一瞬思ったがまあよしとしよう。オレは“大きな”人間だからな。

「オマエまたかよ」

どうやらカズは毎日のようにコイツに付きまとわれているらしい。

「なんで毎度毎度オレにかまってくるんだよ？」

「だってオレ、カズさんに憧れてこの高校選んだんですもん。去年の新人戦の華麗なパス回しホレボレしちゃいましたもん。」

「い、いちおう礼は言っとくよ、ありがと」

「あざーす！」

「あのく、さつきから誰かワスレテマセンカ？」

「あっ、ハルカさんいたんすか。オーラなくて気づかなかったす。

「よし決定。明日からコイツのこと先輩の権限でしごきまわろう。」

「そんなことよりさ、」

おい、カズ！そこはさらつと話を変えるんじゃない！

「お前の動き見てて思っただけど、もしかして初心者なのか？」

「そうっす、うちの中学バスケット部なかったっすから。その代りバドミントン部で体はキツチリ鍛えてました！」

たしかにコイツの動きは独特っつうか、セオリー通りじゃないところあるんだよな。

「その割にはPGとしてよく周り見えてるっついうか、他の人の動き見るのうまいよな。なんでなんだ？」

「バスケット自体は昔っから大好きでNBAの試合テレビでやってたりしたらずつと見てましたもん。高校の試合も何度も見に言っただんす！それでカズ先輩の勇姿もばつちり見れたっつわけです！」

「なんかお前も苦労してんだな。」

「別にハルカさんに同情とかされたくないっす。」

また人が下手にでりや調子に乗りやがって！

「へえ、なかなかおもしろい経歴なんだな」

「あざーす！」

だからなんなんだこの違いは！！

「その身長ならフォワードもできないけどPGのままでもいいのか？」

「全然いいんす！翔泉で第二のカズさんになりたいんで！これからご鞭撻のほどよろしくお願いしやーす」

よくわからんがコイツがカズ命ってことだけはよく分かった。

先代の仇討

いよいよ地区予選大会が始まった。

1回戦から3回戦までの相手はもはやオレたちの敵ではなかった。あつとついうまに4回戦を迎えた。

3回戦の終わった次の日の練習前にサヤが言った。

「今まで簡単に勝ち上がったとはいえ、それは相手に強豪校がいなかったからよ。でも次の相手はそうはいかないわよ。」

「なんとたつて次は竹川水産だからな。」

そう、去年の地区大会では敗戦した相手だ。しかもタツキチ先輩を引退させることになってしまった最後の試合でもある。オレとカズとヨシト、そしてシユースケは燃えないはずがなかった。

「シユースケ、今年はアンタがあつちのエースの鮫島とマッチアップすることになるのよ。覚悟はできてる？」

「もちろんだ。」

「そうね、愚問だったわね。それじゃ今日はシユースケにプレッシャー与えるためにキョーヤとカズくん相手に1対2でひたすら実戦練習してもらおうわ！」

「うっす！」

4回戦当日を迎えた。

空気がピリピリしている。公式戦、しかも実力が高い相手との試合ならではの緊張感で翔泉バスケット部は包まれている。

試合が始まった。

どこかイヤな予感的中してしまったようだ。シユースケが気負い

すぎていて思うようにプレーができていない。立て続けに鯨島のところから8点をとられた。

ここでサヤがタイムアウトを取った。

「いったんシュースケ下げてキョーヤに行ってもらった方がいいんじゃないのか？」

「それはできないわ。これは翔泉キャプテンであるシュースケには絶対に乗り越えてもらわなければ困るのよ。」

「たしかにな。ここでアイツを越えられないようだと一生全国なんて行けないな。」

「そういうこと。だからアタシがタイムアウトをとって言いたかったことは一つ。何が何でもあの鯨島を倒してきなさい！」

「うす！」

試合が再開されてから早々、シュースケにボールが回った。形として鯨島との1on1になった。そこで一気にシュースケが抜き去った。

「よし、大成功ね、『ファルコンブレイク』！」

今までのフットワーク練習、そして実戦の中で磨かれた切り裂くように速いシュースケのドリブルはそう呼ばれるようになっていた。

そこから調子を完全に取り戻したシュースケは何度も自分のドリブルからチャンスを作り、自分でも得点を決めていった。

しかしそこは鯨島もあちらのエース。オフェンスもディフェンスもずっと相手をしていたシュースケの疲労は相当であった。

それでもサヤは変える気はない。

後半になってドリブルではもう突破できないという場面が増えてきた。

そんな時サヤの声が飛んだ。

「アンタタツキ先輩を超えるんじゃないの!？」

次の瞬間からシュースケのプレーが変わった。自分でいけそうになりときは追い込まれる前に他のメンバーに早めにパスを出し始めるようになったのだ。自分一人で闇雲に戦うのではなく、仲間を活かすというチームプレーをするようになってきた。

そのボールが回ってきたオレはその期待に応えるべく、
『3ptシュートミツバチ』
を決めた。

そうして87 - 75で見事去年の雪辱を晴らし勝利した。

目指すべき所

おれ達には、ずっと勝利に歓喜している暇はなかった。
何しろ今度の相手は文字通り『最強』だからだ。

「いい、アンタ達。次は7年連続で全国出場している精機高校よ。
鮫島だけを抑えていればいいワンマンチームじゃないから全員心し
ていかないと勝負にすらならないわよ！」

「うつつす！」

「その中でも双子の帯野^{タイヤ}兄弟は要注意だからね。」

「ああ、去年の新人戦で見たよ。たしかオレ達と同じ2年なのにあ
の精機でレギュラーとってんだよな。」

「2大エースと言っても過言じゃないわね。精機高校の特徴はなん
といてもその統率されたチームバスケよ。まずはそれをどう崩す
かよね。」

去年の精機高校の試合をとったビデオを観戦しながら議論し合った
が、具体的な打開策はなかなか見えなかった。

そしてそのまま試合当日を迎えた。

まず気おされてしまったのはこちらの攻撃が全く通用しなかったこ
とだ。

ディフェンスは一見マンツーマンでついているように見えたが、仮
にドリブルで抜いたと思っても次の瞬間すぐにヘルプが来てまった
くゴールエリア内への侵入を許してくれなかった。

そうなつてくると重要になるのが外からの攻撃だ。3ptシュータ
ーであるオレの役割が最重要であることはわかっていた。

「ハルカっ！」
カズから絶妙なタイミングでパスがくる。ノーマークでシュート体制に入ったところだった。しかし突然ボールをはじかれた。双子の兄、たいやソク帯野即だった。

即はシューターとしても恐ろしく速いモーションで、3ptをばんばん決めてきた。それはウチのチームで一番動きの速いカズでも全くとめられなかった。

さらに弟の開カイもやっかいだった。シュート動作が独特なのでことごとくタイミングをずらされてしまうのだ。この大会でディフェンスのスペシャリストとして活躍してきたジローでも翻弄され続けた。

この開と即を中心に精機高校の面々はシュートをほとんどはずさなかったため相手にはリバウンドが必要なかった。リバウンダーを立てない分、シューターが4人もいて容赦なく打ち込んできた。

結果、56 - 115というダブルスコアで大敗した。

「これが来年倒すべきレベルだ、よく覚えておけ。」

自身も悔しそうにしながらシュースケが言ったこの一言が、どしりと胸に突き刺さった。

2年8組の授業風景

「…るかくん、はるかくん！」

なんだ？このよく聞く展開。ああ、デジャブってやつか。それとも夢か。いや夢だな。だってなんだか気分がふわふわしてるし…

「ハルカアンタさつさと起きなさいよ！」
一瞬体がおもいきつりガクつと揺れた。

気づくとそこは教室だった。そしてオレはいつものように眠っていらしい。

ただおかしいことがある。オレの前にだけ机がない。いや正しくは前方に派手に倒されていた。

察するに犯人は隣でいきりたってるこいつだ。

「ホント毎度毎度なんでアンタだけ寝てんのよ！？それじゃまるでアタシの練習がきつすぎるみたいじゃない。」
いやそれはあながち間違っちゃいないと思うが。

「つてえな、サヤ。」

「なによ、アンタがあほづらして寝てるのが悪いんでしょ！」

「だからって机蹴っ飛ばすとかありえねえだろうが！」

「あ、あの…はるかくんもさやちゃんも授業聞いてくれるか、な？
このかわいい声の主は新任の島谷秋奈先生だ。しまたにアキナもちろんあだ名はアツキーナ先生。ウチの2年8組の担任でもある。なんかうるうるした目でコツチを見つめている。これはこれでやりづれえな。一応謝っておこう。」

「すみませんでした。」

「声が小さい！」

「うつせえなお前がでしゃばってることじゃねえだろ！」

「アンタの態度に誠意が感じられないって言ってるのよ！」

こうしてオレとサヤの口論が10分以上続いている間にチャイムが鳴った。

「そ、それでは今日の授業を終わりますっ。」

もう完全に涙目になってアツキーナ先生は教室を出て行った。

おれ達二人はお互いバツが悪くなり、そっぽを向いて座っていると例の男がやってきた。

「おアツイね〜お二人さん。授業中に夫婦げんかなんてさすがにオレっちもマネできないぜっ！」

「殴られてえのかてめえは！」「3秒以内に訂正しないと倒すわよ！」

「おうさすがに息ぴったりだねえ。」

そう、2年になってもヒロとは同じクラスになったのだ。しかもこともあるうか、ウチのバカマネージャーも一緒になってしまったのだからいつそうタチが悪くなってしまうた。

「もう疲れた。寝る。」

「はあ、アンタさっきまで寝てたのにどんだけ寝るのよ!? あっ、わかった。このまえの精機の試合がショックすぎて眠れないんですよ?」

またコイツはイヤなところを突いてくる。まあ睡眠それ自体はこれまで通りなのだが。

「ち、違つに決まつてんだろっ！勉強しすぎて夜遅くなつただけですう。」

「よく言つわよ、下から数えたらアツと言つ間に名前が見つかるよ
うな成績しかとつてないくせに。まったくどうやってこの学校にも
入れたのか不思議でしょうがないわ。」

「っんだよ。そ、それはお前の練習メニューが」

「あつ、そうやって結局人のせいにするのね。言つときますけどア
タシも含めてカズくんやヨシトくんはそこそこ成績いいんだからね
！」

「あゝもう！うるさい！うるさい！うるさい！！！」

「ははっ、ハルカっちとサヤっち見てるとこっちまで恥ずかしくな
つちゃうぜ」

ちなみにこの意見にはクラスの大半がうなずいていた。この一年な
にかと大変そうだ。

OB(?)戦

屈辱の大惨敗から一か月、おれ達は個人の練習はもちろん、チーム練習もかなりやりこんできてきた。もつすぐ2度目の夏がやってくる頃のこと。

例のごとくサヤが体育館に入ってくるなり叫んだ。

「明日タツキチ先輩が来るわよ！」

「まじで!?!」

初期メンバーは4人はシュースケも含め大盛り上がりだった。

「アンタたち、浮かれるのはそこまでよ! OB戦やるんだからね!」

「えっ、OBつつたつてタツキチ先輩しかないじゃねえか」

「もしかして、もっと年上のセンパイでも連れてくるんじゃないのか?」

「そこらへんはよく分からないけど、『強力な助っ人を連れてくるからね』とだけは言っていたわ」

当日タツキチ先輩と一緒に現れたのは元猛将高校のウサさんだった。

「おつす。」

「こんにちはーつす。」

「元気でやってるみたいだね。おつなかなか人数も増えたみたいじゃないか。」

「そうなんですよ、おかげさまで10人になりました!」

「サヤちゃんから聞いてたけど実際目の前になるとなんだか泣けてくるなあ」

「タツキチ先輩、泣くのはオレらが全国行くまで取っといってくださいよ。」

「そうだったね。そう、じゃあさっそく全国に向けてOB戦と行きますか！」

「あの、助っ人ってウサさんだけですか？」

「そうだけどなんか不満でもあんのかよ？」

『ウサギ』ってあだ名の割には気性の荒い人のようだ。さては身長
の要素だけで名前付けたな、猛将のあだ名付もいい加減だな。

「い、いや別にそんなことないっすけど、まず人数足んないじゃないですか。」

「それに関しては悪いけどそっちの1年生3人を借りるとしようかな。君らは2年の7人でいいよ。」

「え、でも悪いですけどそれじゃ試合になりませんよ？」

「だいじょうぶだよ。サヤちゃんから聞いてるけど1年くん達もがんばってるらしいじゃない。」

「それにオレ達2人をなめてもらっちゃ困るなあ。」

「なんだかウサさんの目がコワイ、というかそれ以上に自信にあふれているのでそれ以上は誰も追及しなかった。」

「じゃあ始めるとしようか。」

試合が始まるとまずソッコでウサさんとタツキチ先輩のコンビに
得点されてしまった。その後もリードされた状態がずっと続いた。
本来なら1年3人と2年のオレ達レギュラー陣とじゃ明らかにこちら
の方が格上なのに、あの二人がうまくそれをカバーしている。ど
うやら試合前に細かく指示を出しているらしく連携もできている。
さらに試合の中で1年3人の武器なんかを見抜いて上手く活用して

いる。さすがとしかいいようがない。

しかしオレのマークはソーマだったので、今まで強豪校と戦ってきたオレの敵ではなかった。『3ポイントミツバチ』も何度か決めた。

そうするとオレのマッチアップにウサさんがついてきた。ちなみにカズはさっきまでウサさんにつかれて完全に抑え込まれていた。

1年の時に最初にやった最初にやった試合を思い出す。

ウサさんは言った。

「本気で全国行きたきゃオレを倒してみろ。」

自分と身長は大して変わらないその人が、なんだかとてつもなく大きく見えた。

雀蜂

最初はやつきになってドリブルでウサさんを抜こうとしていた。が、身長が低いということ以外は猛将のレギュラークラスだったウサさんに通用するはずもなく、何度もスティールされた。

ここですかさずサヤがタイムアウトを取る。

「ばつかじゃないの！？アンタがウサさん抜けるわけないでしょ！」

「そうだぜハルカ、一人でバスケットしてるんじゃないんだ。」

「ちえっ、わかったよ。シュースケにそれ言われちゃおしまいだなっ。」

なんだか余計な気負いがとれたみたいだった。

「いい、必ずカズくとコンビでいくのよ。アンタ達の特訓の成果見せてらっしゃい！」

「うっす！」

「お、なんかさっきと目の色違うなあ。なんかいい作戦でもおもいついたか？」

「まっ、そんなとこっす。」

そこからカズとオレとの抜群のコンビネーション技がさく裂した。オレにマークがつくとディフェンスの裏から現れたカズにボールを渡しシュートし、カズを抑えようとすればオレにすぐさまボールが回る。お互いに動きがわかりあっているからこそできる技だ。2人だけで一気に12点をもぎとった。

それは、オレはパスワークを、カズはシュートをお互い徹底的に磨

き上げたからこそだった。

あの時は二人がかりでもウサさん1人に抑えられていたのに、逆におれ達二人で相手チーム全員を翻弄していた！

試合後、タツキチ先輩が言ってくれた。

「少し形が見えてきたみたいだね、『ホーネット』。」
「なんでですかそれ？」

「君たちのコンビネーションの名前だよ。『スズメバチ』を英語でいうと『ホーネット』っていうんだよ。君ら二人の動きを見た時からイケルと思っただけで構想してたし、サヤちゃんには伝えてあつたんだよ。」

「もしかして、それでオレらの二つ名が『雀』と『蜂』だったんすか？」

「そーだよ。なんかカツコイイ必殺技の名前ないかって引退する前からずっと考えてたんだから。」

なんともお茶目なセンパイだ。でもいつか、これでオレとカズには『身長』を埋め合わせる『大きな武器』を手に入れたのだから。

20分クッキング

夏が過ぎ、秋がやってきた。新人戦の季節だ。

もつとも、3年生のいなかっただおれ達翔泉高校にとっては主力も含め、もちろん全員残ったままだ。ずっとレギュラーを張ってやってきた、その堂々たる風格(?)で破竹の勢いのごとく、ベスト8まで勝ち上がった。

次の対戦相手は奇しくも去年惨敗した飯田高校だった。それに去年対戦した時よりも仕上がりがいいというから油断ならない。

「全員わかっているとと思うけど、こっから勝負だからね。相手のスタメン予想発表するわよ。PGなまにしき笹錦、SGたまいつてら玉業寺、SFたまね多摩根、PFいもり井森、Cにくい仁久井。相手はパスバスケのスペシャリスト集団。各自マンツーマンについても、しっかり全体の動きをみるように!」

「うす!」

序盤は相手ご自慢の速いパスワークにやられて先制を許し、流れをもっていかれかけた。

そこをカズがステールを決めたことでペースを持ち直した。

しかし飯田も簡単には崩れない。パスでつないで簡単にゴール下まで運んでしまった。

だがそこからはウチのインサイド組が簡単には打たせない。

ゴール下でボールを持っていた多摩根はスリーポイントゾーンの外にいた玉業寺にパスを通した。

「スリーは打たせねえよ！」

すかさずオレは玉業寺にマークに付く。

「甘い。」

そう言つてオレが走つてきた方向にパスを出して、再びボールを中に入れた。

やられた。

そこでフリーで受け取つた仁久井が豪快にダンクで決めた。

この、『中ー外ー中』の絶妙なパス回しが牧野高校の得意技だった。去年もこのパターンで何度もやられている。

今の多摩根ー玉業寺ー仁久井の名前から『親子井』と呼ばれているらしい。

「なにしてんの！」「そのふざけた名前の技」を防がないと永遠に点取られ続けるわよ！」

サヤがベンチから叫ぶがそう簡単に止められりや苦勞はない。

途中玉業寺に代わつて流鶉がでてきた。

そうすると牧野最強の技がさく裂する。コート上5人で華麗にパスを回し相手を料理する『ビーフカレー』の完成だった。

前半は相手のペースに乗せられ、28 - 35で折り返した。

「うちそうさまでした、が！」

「もう！なにいいように遊ばれてんのよ！こうなったら徹底的に機動力と粘り強さでパス潰しよ！テツペイ、ヨシトを下げキョーヤ、ジローに入ってもらわ。」

「まじで？そんなことしたら中ががら空きじゃんよ。」

「それでもあの『お料理タイム』を止めることが先決よ。とにかくみんな止まらないこと！そうすれば簡単にはパスが通らないはず！」

後半始まってすぐに、まずキョーヤがスティールを決めた。さすが『蚊』だ。相手もそのふわふわした動きは予想できなかったらしい。そこからシュースケがお得意の速攻を決めると一気に反撃ムードになった。

こっちもパス回しなら負けていない。カズとオレとを起点とした、作戦名『ホーネット』で自在にパスを回し、マークの外れた方が射抜く。ここにキョーヤとシュースケの得点力も加わることで相手に負けず劣らずの多彩な攻撃をしかけた。守ってはジローが相手プレイヤー同士の直線状にうまくポジションニングすることでパスの流れを悪くした。

しかしこちらの『高さ』がなくなった分、仁久井が強引に一人でシユートを決めてきた。こうなるとどちらがパス中心のチームだったかわからなくなる。

十分に相手のパスワークを乱せたところでジローを下げヨシトが入

った。

ここからはお互いに乱打戦だった。

こうなってくると五分の戦いで前半のビハインドの分が効いてきた。

「さあラスト一本よ」

残り30秒のところまで80 - 82。もちろん「カギ」になってくるのはオレだった。

当然相手もオレの『ミツバチ』を警戒してキツイマークがはりつく。それを走りこんでカズからなんとかスリーポイントゾーンの外でパスを受け取ると、迷うことなく打った。

シュパツ。

入った。

が、次の瞬間。

着地するときに、先ほどまで執拗に追いかけてきた相手選手の足の上に着地してしまった。一瞬「ぐにゃっ」とした感覚が足を襲った。

思わず痛みでうずくまってしまった。

その後はヨシトにかかえられてベンチに下がった。

代わりに入ったジローを含め、コートの上5人が残り時間を見事に守り抜き、チームが勝利するのをただベンチで見つめていた。

誰が悪いんでもない

オレの足は全治一か月の捻挫だった。医者曰くその間は絶対安静だそうだ。

そんなことはおかまいなしに、ベスト4のシードを持っていた高校を倒すとその後は他のグループをそれぞれ勝ち上がってきた3校と総当たり戦の決勝リーグが始まる。

オレのいない穴が思っていた以上にでかかったのか、それとも元々のチームの地力の差か、3戦とも完敗に終わった。

3戦目が終わった瞬間に、サヤにぼやいてしまった。

「あゝあ、なんか簡単に終わっちゃったな。」

「ああもう！外のシューターがいないからどの試合も中を固められると全然手が出せなかったし！だいたいあの時ハルカが上手くよければこんな結果にはならなかったのに！！」

「ふざけんなよ、もとはと言えば牧野戦で最後オレの3ptが決まっただけりゃ、決勝リーグにすら行けてなかったかっただけだからな！！」

「なによ、その上から目線な発言！」

「なんだよこのへボコーチ！」

もう売り言葉に買い言葉だ。

「落ち着けよ。」

隣のベンチに座っていたシュースケからぼそりと言われた。

「ごめん自分が出れないのでイライラして、つい言い過ぎた。それに今の今まで試合がんばってたみんなにも悪かったよ、謝る。」
「ううん、アタシの方こそごめん。完全に八つ当たりだよ。一番つらい思いしてるのはハルカだっていうのに。」
「なんか急にしおらしくされるとどうにもやりづらい。」

「仲直りのしるしにガリガリくん買ったげる。」

「やったー！ってオレはそんな安っぽい男じゃねえ！！」

「じゃあしょうがないわね。ハーゲンダッツよ。」

「く、くそ迷うつ」って言うと思ったら大間違いなんだからね！
「なんだか微妙にいつもとお互いの立ち位置というか、言いそうなセリフが逆な気がするの、気のせいかな！？」

もちろん、ハーゲンダッツは帰り道のコンビニの前でおいしくいただきましたけどなにか？

今できること

「オーイエツ！オーイエツ！」
次の大会に向けてミンナ声を張り上げて練習に精を出している。

オレはコート隅でそれを見つめている。ただしボーっとではない。部員一人一人の動きを確認するために頭を使い、神経をすり減らしながら見ている。あとでサヤから「今日の　　くんの調子はどうゆう風に見えた？」などという『抜き打ちテスト』まであるのだから気は抜けない。

しまいには「シュートバカがこれで他人の動きをしつかり見る機会をもらったんだから、むしろケガさせてくれた相手に感謝しなきゃかもね」なんて言いやがる。

足をけがしているオレの練習と言えば、もっぱら椅子に座りながらのドリブルとサヤ相手にパス練だった。パス練に関しては、全体のメニューが終わってそれぞれ個人練習する際に、試合中のコンビネーションの関係もあるのでカズにも相手をしてもらった。

「あととはにかくボールを常に触っていること！」
片足ケガしてただでさえ歩きにくいつていうのに、その上四六時中バスケットボールを持たされるのを義務付けられた。
ただ、タツキチ先輩やサヤが思い描く『ホーネット』の完成形にはまだほど遠く、それにはまずオレのボールハンドリングの向上が必須だった。もちろんカズもPGの役割に加えて、自分でシュートにいく練習に余念がない。

正直、コーチや初心者みたいなことばかりやらされてストレスがた

まっているのも事実だった。だがそれ以上に今までコートの中では見えなかったものが見えるようになってきたことが驚きであり、楽しくなった。さらに基本の動きに立ち返ることで自分のボール回しの粗さにも気づいて修正することができた。

「はい、しゅーん！」

「今から重大発表をします」

何やらサヤが自信ありげな顔だ。イヤな予感しかしない。

「2週間後は何の日でしょうテツペイクン？」

「翔泉祭です！」

「まさかまたクラスの出し物ががんばってか？」

「違うわよ、そんなハルカみたいなバカの一つ覚えなんかしません！」

「オレがいつバカの一つ覚えなんかしたっていうんだよ！」

「まあまあ二人とも。で、その重大発表って？」

「せっかく人数も増えてきたことだし、今年はこのバスケット部で翔泉祭の出し物やります！」

サヤの監督ぶり

「はあ？オレらでいつたいなにするっていうんだよ？」

「それはもう決めてあるの！オリジナルの劇なんかどうかしら。幸いカワイイ女優が二人もいることだし」

「えっ、まずコハルちゃんはいいとしてもう一人はどこから連れてくるん…うぐっ」

サヤのローキックがオレの無事な方の足にキレーに決まった。って
いうかひざ裏は反則だろ。

「でも劇ってまず台本作りから道具の準備まで大変だろ？」
ここで冷静にヨシトが返す。

「そこらへんは抜かりなしよ。すでにコハルちゃんには台本書いて
きてもらってるから。」

「おお」

「えっへん、なんたって『もちスラ』の娘ですから！」
いやそこはあまり自慢されても困るのだが。

「それに服飾部のアヤメちゃんにもすでに話はつけてあって現在製
作真っ最中よ！」

「えっ、オレも聞いてないんですけど!？」

ジローが本気でテンパっている。

「そこらへんは女の友情ってやつよ。でもアヤメちゃん、『ジロー
くんのためだったら何でもする』って快く引き受けてくれたわ。」

ジローは一転デレデレである。

「そんだけ準備万端なのはわかったけどさ、肝心のおれ達の演技練
習はどうすんだよ？言っとくけど、バスケの方に支障が出るのは勘

弁だぜ？」

そうだそうだ、カズ言つてやれ！

「もちろんそれも任せなさい！ちゃんとバスケットを取り入れたすんばらしい内容になっているから。」

こうして次の日からバスケットの練習の合間にちよこちよこセリフの練習ははさみつつ、普段と同じ量の練習量をこなすことになった。

とうかさやはどんどん、違った方向で『監督』として才能を開花させているんじゃないか？そんなことを思う秋の一日であった。

茶番劇（前書き）

いわゆる「劇中劇」というやつですが、今まで以上に安っぽい内容となっておりませう。

バスケットとしては本編と関係ないので興味のない方は読み飛ばしてください。

茶番劇

さて皆さんお待ちいたしました。今からバスケット部による演劇「バ助っ人三兄弟」を始めたいと思います。まず最初に配役をご説明いたします。

バ助っ人太郎：円谷秋祐つぶらやシュースケ

バ助っ人次郎：葛城恭弥かつらぎキョーヤ

バ助っ人三郎：森山和彦もりやまカズヒコ

町娘ティファニー：井上心晴いのうえコハル

ティファニーの父親：桐島徹平きりしまテツペイ

女王：黒川沙耶くろかわサヤ

大魔神：小森慶斗こもりヨシト

子分ども：その他の部員

ちなみにけが人のオレは、こうしてナレーションとしてひたすら語っている。

昔々ある村で父一人娘一人で仲良く暮らしておりました。

「なんかあの娘気に食わないわね、子分どもさらっておしまい！」

「うい〜」

「あ〜れ〜」

「ああティファニーを返しておくれ、私にとってたった一人の大切

な娘なんだ。」

「ほーほっほっほー。娘を返してほしくば我が城まで来るがいい。」
サヤはバスケ部の『女王様』っていう点ではいつもどおりだな。だから演技も人一倍上手い、というかはまり役だ。あの天然そうなコハルちゃんはどこまで意図してこの台本作ったのだろう？気になるところだ。

困っている父親のところに3人の勇者が現れました。

「ボク達の名前はバ助っ人太郎」「バ助っ人次郎」「バ助っ人三郎」
「娘さんはボク達が必ず救ってみせます。」

「おおー、それはありがたい。ぜひお願いする。」

それにしてもサヤ以外は見事な大根役者ぶりだ。劇としてかろうじて成り立っているのは服飾部による豪華な衣装による雰囲気づくり、という面が大きい。

「バカなバ助っ人兄弟どもよ、わが子分どもにバスケでボコボコにやられるがいいさ。いけ大魔神！」

「お安い御用で、女王様。来い子分ども！」

「うい〜」

なんか二度手間な気がするが今さら言ってもしょうがない。

ここから劇はステージを降りてコートで行いますので、皆さま客席の移動をお願いします。

そしてバ助っ人兄弟3人対子分6人という明らかに人数バランスの

悪い中でバスケットが行われた。特にヨシト、イシちゃんはその190センチ越えという大きさだけでも威圧感がある。いくらドリブル突破のうまい3人をそろえているとはいえ、1ゴール入れるのに3分かかった。もちろん、ここらへんの演出はガチである。

なんで戦闘方法がバスケットなんだ？っていうのは、いつものサヤの「すべてはバスケットのため」主義からきている。ちなみに父親役だったテツペイは裏ですぐさま着替えさせられて自分その1として再出演している。この劇は徹底してバスケット至上主義だ。

ここらへんは日頃のバスケットの実力を、演出を使って「魅せて」いたのでこの場面ではお客さんは大いにわいていた。

くそつ、それにしてもナレーションなんてつまんねえ。オレもケガなけりや役もらえてたのになあ。

こうしてめでたく救われたティファニーはバスケットに目覚め、『バ助っ人姫』としてバ助っ人兄弟とともに生きていくことになりました。新たな旅立ちの日、ティファニーを送り出す父親が複雑な気持ちであったのはいうまでもありません。

ちゃんちゃん。

紅白戦

新人戦から一か月たち、ようやくオレの足も完治した。

復帰して一週間たつと、まだ完全とは言えないまでも、ほぼケガ前と同じくらい動けるようになった。

そんなある日の放課後のこと。

「今から試合するわよ!」

「今から!？」

「平日にわざわざどこかの高校でも呼んでるのか？」

「違うわよ、部内でやるの。ほら、どっかのバカがようやく治ったことで動ける部員も10人になるでしょ。それにそろそろ一年生もみんな実戦で使ってみたいと思ってたところだし。」

「なるほどね、で、チーム分けはどうするんだ？」

「そうね、一年生3人にハルカとシュースケに入れてもらおうかしら。ハルカがこの1か月でどれだけゲームの流れを読めるようになったか見たいからね。ソウマくんと一緒になって、うまくゲームを組み立ててちょうだい。」

「りょうかい!」

「ちなみにそっちの監督にはコハルちゃんにやってもらいます!」

「は、はい!」

どうやらサヤと同じくコハルちゃんも、マネージャーとしてだけではなく監督業もこれからやっていくつもりらしい。

それにしても久々のゲームだ。なんかいつも以上にわくわくする。というか緊張の方がデカい。いくらPGとしてソーマが入っている

とはいえ、今回はオレも、ゲームメイクにも積極的に加わるという責任もあるからだ。

あちらの実力は言わずもなだ。カズがいるから全体にうまくまとまっていてバランスがいい。問題はそれにどう対応していくかだ。

「あつ。」

ボールを持ちながら考え事していると早速キョーヤにスタイルされてしまった。

「なにポーツとしてんだよ、ハルカ！」

一瞬、サヤかと思っただが、一応今は敵チームの監督だしそれはありえないか。…とするとコハルちゃんか？

見るといつもは肩まで伸ばしている髪を、高い位置で結んでポニーテールにしている。そして気のせいか若干いつもより目つきがコワイ？

「おいハルカ、反省の返事は？」

「は、はい！すいませんでした！」

どうやら髪を結ぶと性格が変わるようだ。でも、いくらなんでも変わりすぎだろ…

よし、気合い入れなおしてやってやる！

「まず一本いくつすよ、ハルカさん。」

「わあってるよ、ソーマ」

なんだかコーハイにダメだしされっぱなしだな。

「オマエの相手はカズだし、きつくなったらすぐにオレかシュースケにボール回せよ。」
「りょーかいつす！」

すると早速ボールが回ってきた。

くそつ、キョーヤのやつ、ちよろちよろ動きやがってパス出しづらいつたらありやしねえ。

そう思った次の瞬間、シュースケがジローを振り切ってフリーになっているのが見えた。

すかさず前方にパスをだす。

シュースケはそれを受け取ると、ゴール下をかくぐって簡単に決めてしまった。つたく、つくづく頼りになるキャプテンだぜ。

一方、オレのところにはボールが回ってきてもなかなかシュートは打たせてくれない。さすがチームメイトだけあってオレの『ミツバチ^{3ptシュート}』はかなり警戒されているようだ。その代りソーマと連携してパスを回してチャンスをつかがった。コイツ、『第2のカズ』を目指しているだけあって全体を良く見通せているみたいで意外とやりやすい。

その後はインサイド二人にボールを集めてみた。二人とも190センチ前後あるだけあってゴール下でボールを渡せばそこそこ決めてくれた。まあ、ヨシトの『^{高速ブロックショット}鷹狩り』でかなり止められてもいたが。

それよりも二人が活躍したのはディフェンスだった。

イシちゃんも部内一の体格だ。入部当初は100キロオーバーだった。「お肉」の気になる体型も、いまや鍛え上げられた90キロにま でなった。そのどっしりした姿から『カブト虫』と呼ばれ、ゴール

下の威圧感ハンパでなくその存在感だけで立っているだけで相手にプレッシャーになる。そこにこれまでの練習で技術も加わり、「ゴヘラクレスイル下の脅威』と呼ばれるようになった。

一方ジョーは『カマキリ』という二つ名になり、得意の『カマイタシユート後のブ手』ロックで何度もヨシトやキョーヤの攻撃を止めることになる。

「これでインサイドはだいぶ人材が充実してきたね。」
試合後、サヤは満足げに言った。

今年こそサントさんがやってくる

10人で戦えると確信したサヤ（とあとたぶんコハルちゃんも）は練習試合を組みまくった。

毎週土日はどこかの高校に遠征である。ひどい時なんて「5人ずつでやれば問題ないでしょ？」とか言っただブルヘッダーなんかもやらから大変だ。

そんなこんなであつという間に冬休みがやってきた。今年も当然のごとく合宿があるのだが、なんと25日にはクリスマスパーティーをするというのだ！

もう気分はウッキウキだ。その後のハードな練習なんて関係ない、目いっぱい楽しんでやろう。

実はこのイベントが決定したのには理由がある。なんとイシちゃんの家はチキンをウリにしている某ファーストフード店の店長さんで、ソーマの家がケーキ屋さんをやっているというのだ！イブの日に売れ残ったチキンとケーキをいただいでメインにしようというのだからサヤもなかなかあざといな。

さらにジョーの家は電気屋さんなので、余った電球で貸し切りの教室をイルミネーションに仕立てた。まったく今年の一年生はなんて優秀なんだ！

最後はみんなでプレゼント交換だった。ちなみにオレがもらった箱は開けた途端、おもちゃのヘビが飛び出てきた。たぶん犯人は一番

爆笑していたカズだ。あとでとっちめてやる！

「はい、お遊びはここまで！」

突然サヤはそういうと全員に片づけを命じ、おれ達は明日からの地獄に向けて夜の10時に消灯した。

サンタのプレゼント

合宿はクリスマススの反動なのかなんなのかわからないが、確実に去年よりもハードになった気がする。

まずケガ防止のためにも体を温める意味でコート外周を一時間みっちりやらされた。

そのあと当然コート間ダツシュに加えて、スリーメンでのパス練習などが入る。

一通り全体のキソ練メニューが終わるとようやく休憩である。

そしてここからがまたキツイ。

チーム内のいろんなパターンで実戦経験を積んでおこうということとでさんざん5対5で試合をやらされた。時にはヨシト、イシちゃん、ジョー、ジロー、シユースケと、完全に上からデカい5人対残りというムチャクチャな組み合わせもやらされた。

こんなにゴールが遠いと思ったことはなかった。いくらサヤに、ポジション的にこの組み合わせは絶対ありえないだろうって言っても「想定できることすべてをするまでよ」の一点張りだ。おかげでこっちは身長の手を改めて感じることにになり、それをカバーできるような考えでプレーするようになった。一方ノツポ組は相手の素早さに対応していくこととか、いかに自分でゲーム全体の流れを見る練習になったのだそうだ。

この期間中ではさすがに個人練習で疲れるメニューをこなすのは不可能なので、主にシュート練習などにあてられた。ジローなんかに関しても壁役として立ってくれたりしたが、これは自分自身の練習にもなっていた。

今年も大晦日と元旦の二日だけはサヤも日本人の端くれとして（？）
休みをくれたがあとはバスケ漬けの冬休みで3学期を迎えることにな
った。

苦い思い出

「これからはレギュラー関係なく、調子のいいやつからガンガン使っていくからね！」

この宣言がサヤからなされてからというもの、別にみんな今まで本気だったわけじゃないが、よりいっそう燃えるようになった。

ただしオレだけは違うことを言われた。

「今んとこアタの代わりだけはいないんだからまたケガしたり、途中でぶっ倒れないようにしなさいよね！」

これは「期待してるわよ」っていう捉え方でいいのだろうか？毎回わかりにくいやつだまったく。

そして今年もやってくる2月14日。
幸か不幸か今年その日は日曜日だった。

「2月14日は練習試合に行きます！」
その日程には、みんななんだか知らないがテンションが上がらないみたいだった。デート予定だったジローとヨシトは特に残念そうだった。

県内のめばしい所とはほとんど練習試合を行っていたため必然と遠出になり、小旅行が当たり前になっていた。

今日の相手は富山県の強豪、大橋高校。190センチ級の選手がこ

るごろいるパワー系のチームだった。

「テツペイ、なに当たり負けしてんのよ！あんたが力で負けたらどこで使うっていうの!？」
「サヤの容赦ない声が飛ぶ。」

「ジョー、何回上からシュート決められりゃ気が済むんだよ！」
代わりに入ったジョーにも、ポニーテールの熱血状態のコハルちゃんも吠える。

これに加えてヨシトもイシちゃんもインサイド組は試合ではもみくちゃにされ、ベンチではボロカスに言われた。
まあ、おれ達のマッチアップ相手もかなり力押しのだリブルで攻めてくるからこっちはこっちで大変だったのだが。

試合はなんとか65 - 61で競り勝った。

「今日の試合で言いたいことは山のようにあるけど、今日という日に免じて説教の代わりにチョコをあげる。」
「おお？これは思っても見なかった展開だ！試合後ということもあって甘いものはかなりありがたい。」

「はいコレ。」
渡されたのは10円チョコだった。いやそりゃ甘いくておいしかったけどさ…

「人数多いんだからこれでも感謝しなさいよね。」
いや、言うほどウチは大所帯じゃないだろ… よっほど去年の空回

りが効いていたらしい。

「あの〜、アタシからもあるんですけどお。」
「そうだった！今年のこの部にはコハルちゃんという女神もいるんだ
った！」

しかし期待を胸に膨らませて包みを開けてみると、何ともユニーク
（いびつ）な形をしてらっしゃる！

「これ一生懸命昨日作ってきたんです。」

こう言われたら食べるしかない。勇気を出して、このチョコ大好き
人間ハルカが真っ先に口にした。

「ぐっ。」

ゴージャのような味がした。

「どうですか？」

「う、うん、トツテモオイシイヨ。」

「よかったあ。今度また何か作って持ってきてますね。」
「ヤバい、誰か止めてくれ。」

「なかなかまいっつですなえ。」

さすがイシちゃん、キャラ通りほんとにおいしそうに食べてる！

あとの面々は苦い顔を必死で隠しながら飲み込んでいた。

試合には勝ったものの、なんだかすつきりしない一日だった。

ラストチャンスに備えて

とある3月の日の練習中のこと。

ブチッ

なんか縁起の悪い音がした。

足元を見てみると靴ひもが切れていた。

「あちゃー、やっちゃまった。練習どうしょ。」

「先輩、任せてください」

コハルちゃんはそう言うのと、どこかからヒモを持ってきてすぐに交換してくれた。あまりの手際の良さに「いいよ、自分でやるから」というヒマさえも与えられなかった。

その日の練習はその後は何事もなく無事に終わった。

「そろそろこのシューズも寿命かな。」

かかと部分が特にすり減った靴底を見ながらつぶやいた。

「そうだハルカ、今度一緒にシューズ買いに行かない？オレもちようちどほしかったトコだし。」

カズがそう言うってきたので、特に断る理由もないのでオッケーした。

ちょうど靴ひもが切れた二日後は我が部のキチヨ〜〜な休みだったので、その日を利用してバツシユを買いに行くことになった。

「このモデルちよーかつこよくねえ？」
「いややつぱこの最新バージョンっしょ」

お互い値段やサイズのことなど気にせず見たいものをただ眺めていた。

ふと、カズは思いつきなのかどうか分からないが、こんなことを言ってきた。

「なあせつかくだからお揃いのやつ買わねえ？」

「なんでだよ？それってちよっときもちわりいよ。」

「ほら、おれ達も次の大会でホントに最後だろ。せつかくタツキチ先輩から『ホーネット』って名前もらってコンビ組んでるんだしなんか足並みそろえたいなって思ってる。」

「なんだよそれ。上手いこと言ったつもりか？ でもいいかもな。

色違いとかで同じやつ買おうよ。」

「ありがと。」

そこでお互いのバッシュを一緒に悩んで決めた。

「あとは練習しまくって試合で勝つだけだな。」

「ああ、そうだな。このバッシュと一緒に全国まで駆け上がっていきよう！」

夕焼け空をバックに、これまでの付き合いで一番長く2人で語り合った。

第3の

4月を迎えた。オレももう3年生だ。

ここでとつても素敵なお知らせがあります。

なんと今日の身体測定の結果、わたくし東ハルカの身長が168センチになりました！！！！

思えば入部してから3センチも伸びたことになるのであります！

これは翔泉バスケット部のパワーアップも間違いないし！

そして放課後、嬉しそうな表情を出すことなくさりげないフリをして聞いてみた。

「そういえばカズ、お前身長いくつだった？」

「え、オレ？171センチになったよ。ついに170台の大台突破
！」

その瞬間、オレのテンションは見るも無残にガタ落ちしていくのであった。

「なにちっさい話してんのよ、けっきょく172のアタシより小さいじゃないの。」

この鬼デカ女め、またケンカをふっかけてきやがった。

「そんなことより一年生来てるみたいだから自己紹介してもらいましょ。」

身長のことと頭いっぱいだったので気づかなかったが、体育館の入り口には数人の一年生らしき子たちがいる。今はまだ仮入部期間だ

けど、女子マネ二人がもう正式決定みたいな空気を出している。サヤも去年のことは反省したのか、とりあえずバスケット部に馴染ませて取り込もうという作戦らしい。

あらためて一年生を眺めてみる。やっぱりバスケットやってるやつって180センチくらいはみんな当たり前前みたいにあるんだよなあ。おっ、一人だけかわいいサイズ感のやつがいるぞ？

「なるみりヨウスケ鳴海遼輔です。ポジションはSGです。去年の試合見ててカズ先輩と一緒にプレーしたくてこの高校に入りました。」

ソーマに続いてカズ信者がここにもいやがったか。っていうかSGならオレに憧れて入ったとか言えよコノヤロー。まあいいか自分より小さなかわいいコーハイだ、大事にしないな。

「リヨウスケくん、身長いつてないでしょ、いくつ？」

「あつ、すみませんでした170ちょうどです！」

前言撤回。やっぱりコイツかわいくない。

こうして今年も部内最少プレイヤーはオレのままだった。

背番号発表

どうやらあの生意気チビ……リョウスケはかなりの実力の持ち主らしかった。入部後、全学年混合でやった紅白戦でもバンバン3ptを決めていたし、なかなかゲーム全体の状況把握なんかもうまい。なんでも、中学県大会で準優勝したチームのレギュラーだったのだから、いくらウチがベスト4に入ったとはいえ実績のまだ浅いウチに入学したのが不思議なくらいだ。よっぽどカズと組みたかつたみたいだが、残念だったな。このオレがいる限りその夢は叶わないぜ。

まあそんなことは置いといて、今週から始まる地区予選に向けてサヤからユニフォームが配られた。

「5番シユースケ、6番ヨシトくん、7番カズくん、8番ハルカ」
ここまではこの2年間ずっと変わらない背番号だ。ちなみにキャプテンナンバーである4番はおれ達にとって師匠とでも言うべきタツキチ先輩の永久欠番として空けている。

「つづいて9番キョーヤ、10番ジローくん、11番テツペイ、12番ジョーくん、13番イシちゃん、14番ソーマくん」

最後の大会もやっぱりこのメンバーでいくみたいだな。まあ下手に一年に入られてもやりづらいだけだし。

「そして最後に15番リョウスケくん。」

えっ、今ナントオツシャイマシタ？

「おいサヤ、別にムリして人数そろえるのに一年入れる必要ないんじゃないか？」

「別に人数合わせのためなんかにわざわざ入れたりしないわよ。リヨウスケくんはウチにとつて念願のシューターよ、それもかなり完成度も高いしこれからの試合で絶対に必要になつてくるわ。」

「シューターならこのオレがいるだろ。何の不満があるつていうんだよ。」

「前にも言ったけど、急なケガや体力不足でアンタが使えなくなつたらどうするつていうの？新人戦はアウトサイドから攻めきれなくて負けたの忘れたわけじゃないでしょうね？」

「ぐっ。」

「さいわいカズくんとの相性もいいみたいだし、場合によってはスタメン起用もありえるわね。」

「マジっすか！？あざーす！」

くそっ、ここにきてまさかのスタメン落ちの恐怖と戦うハメになるとは…

オレは思わず初期メンバーに助けを求めてしまった。

「ヨシトお、これつてあまりにもひどい仕打ちだと思わねえか？」

「まあオレもジョーやイシちゃんとは常にレギュラー競争してるからな。変わんねえよ。」

たしかにそうか。

「シュースケお前からもなんとか言ってくれよ」

「勝てるメンバーがベストメンバーだ。」

コイツはこういうやつだった。

最後の頼みの綱はコイツだった。

「カズ〜」

「オレは点をとってくれるヤツが一番のパートナーだと思っている。

」

薄情な奴らめ！

ただ、みんなの言っていることが正しいということも心のどこかで分かっていた。

今のオレにできることは練習して今までの技を磨いてこの一年坊主に負けないことだった。

ミスマッチ大作戦

去年なんとかベスト4に入りこんだおれ達はシード権が与えられていた。

初試合はいきなりベスト8になった高校との試合だった。今回はリヨウスケもいるので体力は気にしなくていいと言われたので動きまわってチャンスを何度も作り、13得点2アシストを決めて交代した。

認めたくはないがリヨウスケは十分強豪の高校レベル相手でも通用した。他の2年生勢のレベルアップもあって選手層の厚くなったウチは、今回は危なげなく決勝リーグに臨むことになった。

「さあいよいよこっから本番よ！最初の相手は金剛高校。鉄壁の巨人と呼ばれているわ。なにせ2m級の選手を二人も抱えているかなり大型のチームで、ディフェンスがかなり強力よ！」

まじかよ、最高がヨシトの193センチであるウチにとってその身長差だけで十分脅威だ。

「相手のスタメンを発表するわPG錠前^{じょうつまえ}178センチ、SG鎖玉^{くさりだま}181センチ、SF鑢溝^{やしみぞ}191センチ、PF釜田^{かまた}199センチ、C鎧塚^{よろいづか}203センチ」

全員とんでもなくデケエー。きれいにウチのレギュラーより10センチはでけーぞ。

「ゴール下の戦いはかなり厳しくなると思っからインサイド組は覚

悟しておいてね。イシちゃんとジョーの出番も当然多くなってからそのつもりで。」

「うっす！」

「それを少しでも助けるのがアウトサイドプレイヤーの役割よ。ハルカあんたが3ptを決めればそれだけディフェンスも広がらざるをえないからね。」

「うっす！」

ついに決勝リーグ第一戦がが始まった。

ジャンプボールは当然のごとく相手の鎧塚がとった。

そこから一気に速攻で点をとってくるかと思っただが、時間をかけてボールを運んでいる。そしてゴール下で再びボールをもらった鎧塚がダンクで決めた。大型チームならではの戦い方だった。

それならこっちは得意の速攻で点を取らせてもらおう。

しかし錠前のマークがきつくカズが珍しくなかなかパスを出せないでいる。どうやら高さだけではないようだ。

なんとかオレを経由してシュースケにパスを通した。

テッペイが徹底してスクリーンアウトをして抑え込んでいる。あとはシュースケがつつこんで決めるだけだ。

しかし釜田と鎧塚の双壁に阻まれてエースの攻撃まで止められてしまった。

その後もなかなか点をとれないでいると選手の交代があった。なんとシュースケを下げてリヨウスケの投入だった！

「サヤはこれ以上ミスマッチの差広げてだいじょうぶなのわかってるのか？」

コートに入ってきたリヨウスケに言った。

「そのサヤさんからの伝言です。二人で思いつきし外から射抜いて行けっつ。」

リヨウスケはにやっつとして言った。それを聞いてオレも一緒ににやっつとした。

そんな作戦はお見通しだったと言わんばかりに、カズから強烈なパスが何度もおつてきた。それを最小限のシュートモーションで打つ。正直あの高速パスを受け取つてすぐに打つのはかなり厳しかったが、それ以上にマークがきついのでそれくらいの速さで打つていくしかなかった。それでも、二人ともノツていたのかよく入った。

その代りディフェンスはザルになったが、意表を突いた作戦で相手が動揺したこと、3 pt という点数のマジックによって 27 - 28 まで追い上げてきた。

中の踏ん張り

「前半シューターの二人はよくやったわ。でもこれはあくまでも奇襲よ！後半はこんなこと通用しない。なんとかインサイドでも点を取っていかないの」

「まずリヨウスケくんは下げましょ、お疲れ様。シュースケをもう一回入れるから全員でチャンス作るのよ！特にテツペイ、わかっているわね？」

「はい！」

後半開始早々、カズ、オレ、シュースケ、ヨシトの流れるようなパスでゴール下から点を取った。これで流れをつかむことができた。

カズは前半と同じく何度もオレに『ミツバチ』を要求し、オレは打った。マークが厳しくなった分、前半よりも成功率は悪くなったものの、そこはテツペイの出番。相手の最もでかい鎧塚をゴール下でがっちり抑えてはなさない。テツペイお得意の『シザーハンズ』は2m越えの巨人でも通用した。

そこでヨシトと釜田との勝負になり、ジャンプの瞬発力では勝るヨシトがボールを抑えそのまま空中で『フックシュー鷹の爪』を決めた。

相手は攻めてくるときもその身長は脅威だった。テツペイがまずは鎧塚をぴったりはりつく。これで相手の大黒柱に仕事をさせないことでチーム全体として攻撃のリズムを悪くすることに成功した。あとは鎧塚や釜田の高い打点からのシュートを体制が整う前にことごとくヨシトが『高速ブロックシュー鷹狩り』で止めてくれた。

ただし、一人で攻守ともに何度も飛んできたヨシトの疲労は相当で、

途中イシちゃんと交代した。イシちゃんは華々しいプレーはないものの当たり前負けはしないため、相手に仕事をさせないことでゴール下を何度も守ってくれた。

相手が『ミツバチ』を警戒し始めてディフェンスが広がり始めたら、すかさずカズは自らつつこんでいった。

「このチビがー！」

鎧塚が吠えて迫ってくる。さすがにすごい威圧感だ。

しかしその間を割って入るようにテツペイがスクリーンをかける。その間にシユースケにボールを渡し決めた。イライラする鎧塚はフールを何度も重ねた。

後半残り7分のところでテツペイの執拗に抑えられまわっていた鎧塚がついにフールアウトし、下げることになった。

「テツペイ、ナイスよ！これで少しは中がやりやすくなるはず。ジヨークン準備できてるわね？」

「うっす！」

代わりに入ってきたのは鉄橋てつはしという190そこそこの選手だった。これならジヨークのシュートブロックも十分に通用した。

最後の3分間で戻ってきたヨシトを含め、一丸となって点を取りにいった結果、61-55で勝利をもぎ取ることができた。

絡み合う歯車

「2回戦はいよいよ精機高校との試合よ！」

みんな去年ダブルスコアで負けた悪夢がよみがえっている。

「当然だけど全国行くには乗り越えていかなきゃいけない相手だからね、くれぐれも気遅れしないように！」

「うつつす！」

「相手のスタメン発表しておくわ。このチームはかなり変則的なよね。SGたいやカイ帯野開、SGたいやソク帯野即、SFキアガ技亜我、SFきかいしま機灰島、そしてポイントフォワードえんじんの煙陣よ。帯野兄弟はもちろんのこと、インサイドプレイヤーでありながら司令塔である煙陣にも要注意だからね！」

「りょうかい！」

しかし試合が始まって早々たしや帯野兄弟の3ptを連続で決められ、洗礼を浴びる。

すかさずサヤはオレを下げたゼロを送り込んだ。

またしても開の方が3ptの体制に入ってきた。それをゼロがチップ（ボールに触れた）した。

『バッタもん』。彼は自分が「本物」には程遠いと自覚し自らのディフェンスをそう名付けた。しかしこのプレーはウチにとって大きく流れを引き寄せることになる。

リングに当たったボールは当然ゴール下に落ちてくる。ここはなんとしても取りたいところだが、さすが煙陣は今までの試合を研究してきているのかヨシトをがっちり押さええている。

そこから急にテッペイが飛び出した。

「『ジャンプシザーハンス』よ！」

金剛戦では抑え役に徹していた彼だが、本来はリバウンダーとしても十分なジャンプ力を兼ね揃えているのだ。

テッペイはリバウンドで取ったボールを死守しシュースケにつなげた。

そこからシュースケはコート全面を切り裂くようなドライブで瞬間に得点を決めた。

その後もジローがしつこくディフェンスすることで精機のシュート力は半減した。

当然リバウンド回数も増えるのでそこをテッペイがしっかりとって速攻で点を取りに行く。このパターンで何度か点数を取った瞬間、今年はいけると思った。

しかし全国出場の常連校の名は伊達ではない。煙陣が起点となってくるパスはこちらのディフェンスのタイミングを見透かすような絶妙なタイミングで帯野兄弟に送られ、3pt攻撃は続いた。

反撃の狼煙

煙陣からまた即へのパスが通ろうとするとところだった。

カズがその間を割ってボールを奪った！

「ようやくでたわね」^{ステイル}舌切り雀」

カズがお得意のステイルを決めたことで再び流れが戻ってきた。

ヨシトにつなぐと、いつもより派手に『^{フックシュート}鷹の爪』を決める。

ここでジローに代わってオレが出された。

「しっかり点とってきなさいよ！」

「おうよ！」

シュースケがペネトレイトしてゴールを決めようとした瞬間だった。相手の技垂我がたまらずファールをして止めてきた。

フリースロー2本となる。

「ここは集中よ！」

サヤの声が飛んだあとは会場は一瞬静まり返る。

シュパツ。

入った！

しかし2本目は外れた。そこを煙陣がガツチリ抑えて、すぐに味方

にパスを出す。

それを受け取った機灰島が走り出した速攻のシュート態勢にカズだけが反応していた。

ここで相手を乗せるわけにはいかない。こちらも負けじとばかりにファールで止めるしかなかった。

今度は相手のフリスローとなる。

1本目は難なく決めた。

しかし2本目はリングにはじかれた。

そのボールはヨシトがりバウンドできつちりキャッチした。

ここで相手エリアまで走りこんでいたオレにヨシトからの豪快なリングパスが通る。

「待ってましたー!」

若干しびれた手と気持ちを一瞬落ち着かせた後、シュートモーシヨンに入る。

シュパツ。

「っしやあー!」

こちらの待望の『^{3pt}ミツバチ』だった。

なあ、いつから反撃だ。

しのぎを削る

その後、完全に調子にノツテきたカズとオレは『ホーネット』で一
気にたたみかけた。このコンビネーションはあの双子にも十分通用
するようだ。それにゴール下で守っている煙陣もおかまいなしだっ
た。

ディフェンスでも二人の連携はとれてきて、少しずつ即と開を抑え
ることができてきた。

ついにウチが逆転をしたところで、相手ベンチが動いた。技亜我と
機灰島を下げて射阿刺しゃあし、補射流ほしるという選手が入った。より強力なシ
ューターで固めてきたようだ。

これで5人中4人がスリーポインターとなり、点差が徐々にせばま
り始めてきた。

こちらもそれに対応すべく、シユースケ、テツペイを下げてジロー
とキョーヤを加え、しつこいディフェンスで徹底して相手のシユ
ートを崩す作戦に出た。

ゴール下は煙陣とヨシトの一騎打ちだった。

相手は位置取りがうまくヨシトは競り負けていることが多かった。

サヤがタイムアウトを取る。

「ヨシトくん、わかっていると思うけどアンタがボール取ってくれな
いとオフェンスもディフェンスも話にならないのよ。煙陣はボール
をとったらすぐにまた次の攻撃につなげてくる天才よ。相手を調子

に乗せるだけならテッペイでいくしかないわ。」

「待ってくれ、オレでいかせてくれ。なんとしてもここは翔泉のセンターとしてアイツに勝ってみせる。」

「よく言った、ヨシト。これであとはオレら4人が相手のシュート態勢崩すだけだな。」

「言つとくけどオレ今から『ミツバチ』ガンガン打つからよろしくな。」

「りょくかいした、ガンガン来いよ!」

ヨシトは言った通り、ゴール下でなんとかボールをもぎとってくれた。

それならカズやキョーヤもいることだし速攻も十分に通用した。そして前半のお返しとばかりに『ミツバチ』を何本も打った。

当然すべてが入ったわけではないがヨシトがとってくれるという安心感から臆することなく打てた。

相手の3ptを最後までしのぎきったおれ達は、81-73で大きな2勝目をあげた。

感激のあとの衝撃

精機との試合後、おれ達は勝利の余韻に浸っていた。

「ついにアノ精機をおれ達が倒したんだよな。」

「ああ、なんだか実感わかないけどな。」

「これでもう全国が目の前に見えてきたってわけだ。」

「なんとって県1位に勝っちゃったんだもんな。」

そのときサヤが叫んだ。

「浮かれるのはまだ早いわよ!」

「わあってるよ、猛将の試合も氣い抜くなっていいんだろ?」

「そんな単純な話じゃないのよ。あえてみんなには言わなかったけど、猛将はその精機に97・61という大差で勝っているわ」

一瞬誰もが言葉を失った。おれ達があそこまで競って勝った相手にそんな大差をつけて?

「金剛戦に至っては106・51というダブルスコアよ」

「あの守りの固いチーム相手に100点ゲームをしたっていつのか?」

「しんじられねえ」

このあと、今の数字を聞いた以上にショックを受けることになる。

「実際精機と金剛とやった試合のビデオを見ながら対策を練りましたよ。コハルちゃんお願い。」

「はい!」

衝撃だった。そこで活躍していたのは2年前の練習試合で戦った面

々だった。たしかにおれ達もこの2年でだいぶ成長したと思っ
たが、それでもあのときの相手と同じだとはとても思えなかつた。

ビデオを観戦している最中、サヤからため息交じりに言った。

「圧巻なのはなんといてもその運動量よ。決して選手層が薄いわ
けじゃないのに、この大会でもずっと5人だけで勝ち進んでいるの。」

「まさに強豪校のサバイバルで生き残った生存競争の頂点5人てわ
けか。」

「どれだけ走りこんだらこうなるんだよ。」

「たしかにこれだけ動き回ってるのに交代してこないっていうのは
逆に脅威だな。40分ずっとこんなやつらを相手しなきゃいけない
のか。」

「正直言つてウチにはこれとフルで戦える人はいないわね。そうな
るとベンチメンバーの総力戦になってくるからね。覚悟はいい？」
「うっす！」

2年前、初めて練習試合をした相手が、おれ達の全国出場への一番
の試練となっていた。

3年になっても

ピー

試合終了を告げる笛の音が鳴る。

スコアボードを見ると、「翔泉41 - 126 猛将」となっている。

ああ、そうかおれ達負けたのか、しかもトリプルスコアで。これで高校のバスケット生活も終わるんだ、全国にも行けずに。

「…るか、おいハルカ起きろってんだ！」

気づくと目の前には担任の顔。まだ赴任してきたばかりで暑苦しいくらいエネルギーシユな、佐々木勝先生だ。

ということはこの教室か。

なんだ、さっきのは夢か。それにしてもやけにリアルだったな。

「ふあゝ、よかつたゝ!!!」

「なにが良かったんだ!? 人の授業で居眠りしておいて! 廊下に立つてる!」

「ハルカっち。ついに今年はカツオくん状態だったね。」

「うるせえ、それにしてもなんだよあの熱血教師^{バカ}。いまどき高校生を廊下に立たせるって時代錯誤もいいところだろ。」

「たしかにあの人のアツさは異常だよねえ。なんか今年新しく部活も作っちゃったくらいだし。」

「へえ。」

「相変わらず興味ないことには興味ないねえ。」

そう、けっきょくこのヒロとは3年間仲良く(?)同じクラスとなつてしまったのだ。

「そういえば授業中起きるとき叫んでたけど、どんな夢見てたの？」

「え？ああ。明日の試合の夢見てたんだ。」

「ふうん、ちなみに結果はどうなんだい？」

「これがまたキレくノ口負け。」

「ははっ、そりゃ叫びたくもなるね。ただ本番の明日は、そうならないようがんばりなよあ？」

「そんならい言われなくてもわかってるよ！ぜってえ勝ってみせる！」

「そうそうその意気意気い。」

なんだかんだ言ってコイツにもこうやって励まされてきたんだよな。いちおう礼を言っとくか。調子に乗るから声には出して言わないけど。

ありがとう。

意表のひょう

「相手のスタメンは2年前とやった時と同じよ。PGサル、SGヒヨウ、SFウルフ、PFトラ、Cクマ。ただ、あの時とは完全に別物だってこと忘れないでね。そしてスコアにも表れていたと思うけど警戒すべきはあのオフエンス力。それをどうしのぎつつこっちも負けなくらい点取って勝つんだからね！」

「弱気になったら一気に喰われるぞ！いいか、あくまで常に攻め気で行くぞ！」

「おっす！！！」

キャプテンの今までで一番の咆哮が鳴ったところでおれ達は完全に臨戦態勢に入った。

「それではこれより猛将高校対翔泉高校の試合を始めます。」

ジャンプボールはクマの方が上だった。

すぐにサルにボールが回る。ボールのハンドリングが異様に上手いし、まわりも良く見えているようだ。2年前のただの能力が高いだけの個性派集団をまとめ上げているのは、間違いなく彼だった。カズも油断なくマークについている。

動いた。

ウルフがいる方向に向かってドリブルしてくる！

得意の速攻ラインで決めてくる気か？

次の瞬間だった。

サルがボールを持っていない。それにウルフも。

するとさっきまでオレの前にいたヒヨウが走りこんでボールを受け取っている。

やられた。

ヒヨウの動きの速さは異常で、誰も止められることなく先制点を与えてしまった。

「落ち着いていこう、一本取るぞ！」

カズの声で少し冷静さを取り戻した。そうだが、ビビったらその時点で負けだ。

猛攻

その後も相手の猛攻は続いた。

こちらが点を取りかえして流れに乗ろうとした瞬間、逆側のリングで轟音がした。

ドガッ！！

クマの豪快なダンクである。

これを防ぐためにヨシトとテッペイがダブルチームにつくことになった。

するとすかさず次の攻撃でサルはフリーになったトラを見逃さなかった。

ズガッ！！

またしてもダンクだった。

この怪獣二人を止めるのは至難の業で、なんとか止めるためにヨシトとテッペイのファールもかさんでいった。

「まずいわ」

サヤはそう言うといシちゃんとジョーも状況に合わせて投入してい

った。

コート内を異様に動き回るウルフはマークが一瞬でも外れると、サルからボールを受け取りあつという間に決めてしまった。これにはついて回るシュースケの体力の消費量は尋常ではなかった。

前半残り6分となったところでシュースケの代わりにキョーヤが入った。

「ここでアンタに潰れてもらうわけにはいかないわ後半に向けてゆつくり休んでなさい。」

「ああ」

サルはすばしっこく、ディフェンスでもオフェンスでもカズはかなり振り回されていた。ヒョウは瞬発力がとんでもなく、サルからの完璧なパスを走りこんで受け取ると一気にゴールまで向かって点をとってしまった。

後半に入ってもその勢いは止まることなく、こっちはまともに動けなくなってきた。5分するとカズもオレも下がり、ソーマとジローにまかせることになった、

猛追

これでスタメンメンバーは全員ベンチに帰ってくるようになった。

「ここが踏ん張りどころだからね！うまく時間使って！」

サヤはコートの中の人間に声を飛ばす。

正直こちらのオフエンス力が下がってしまい得点ができていなかったのも事実であるが、相手にもなかなか点を与えなかった。

ソーマはその広い視野から『トンボ』と呼ばれていた。得意技は『サテライトアイ』だ。
後方の目

「イシちゃんもつと中に寄って！」

「ジョー、そこスクリーン気を付けて！」

まるでコート全体が見えているかのように的確な指示を飛ばし、自身も相手の嫌がる所に入っていくのがうまい。

「キョーヤさん」

今コート内で唯一のスコアラーをうまく使い、得点にも絡んでいた。

ここでサヤから一気に全員交代の指示がかかった。

「さあアンタ達、こっから反撃してきなさいよ！」

「つつすー！」

「すみませんカズさん、相手にスティールされないようにするのに精いっぱい点取れなくて」

「十分だよソーマ。よくやってくれた。だいじょうぶ、お前が踏ん張ってくれた分は必ずオレらで取り返して見せるから。」

カズの言うとおりだった。ここでやらなきゃ今戦ってくれてたメンバーにも申し訳が立たない。

「っしやーやんぞー!!」

「おおー!!!」

まず「スイッチ」が入ったのはこの男だった。

カズからボールを受け取ったシュースケは前半あんなに苦勞したウルフをいとも簡単に抜き去ってしまった。

「オレにボールもつとくれ。」

「おうよ!!」

まったく、頼もしいキャプテンだ。

カズがドライブでつつこんでいったのをテツペイがスクリーンで手助けし中に入った後、シュースケの方向を見もせずボールを渡す。スリーポイントゾーンの外にいたシュースケは迷いなく打った。

シュパッ

オマエに3ptまで決められたらたまらないぜ。

シュースケへの意識が強くなって、ボールを持つとマークがきつくなってきた。

ドライブでつつこんでくると見せかけて次の瞬間にはボールは手元を離れていた。

オレのところにはボールが来た。一瞬シュート態勢に入る。ヒョウが膝を伸ばした瞬間だった。

オレは中にドライブで切り込んで抜きさった。

そこでもう一度シュート態勢に入りシュートを放った。

シュパッ

『甘い罠
ハニートラップ』

得意の『ミツバチ』と見せかけてカットイン、そこからジャンプシュートで2ptもぎ取る。

オレの『ミツバチ』を相手が知っているからこそ通用する技だった。

少し相手が動揺し、ディフェンスが広がったところだった。

一瞬ヨシトへのマークが外れる。

それを見逃さず、カズが相手の手の届かない高い位置へ素早くパスを出す。

『フックシュート
鷹の爪』

カズのパスに見事にタイミングを合わせたそのシュートは、きれいに弧を描いてリングに吸い込まれていく。

スパッ

怒涛の連続攻撃であと2ゴール差まで迫ってきていた。

終わりの合図

ここでテツペイに代わってキョーヤを入れてきた。乱打戦に持ち込む気満々だ。

そんなサヤの期待に応えるべく、おれ達は動きまくった。

もはや完成した『カズ雀』と『オレ蜂』とのコンビネーション『ホーネット』は猛将でも止められなかった。

カズがぎりぎりまで相手を引き付ける。サルを抜き、ヒョウがとらえた時にはもうボールはなかった。

ヒョウの後ろで音がする。

シュパツ。

後半になってオレの『ミツバチ』は成功率100%だった。

オレがボールを持っていると、カズがインサイドの間隙を走り抜けているのが見えた。

シュツ

パスッ

パスからシュートが決まるまでの時間はわずかに3秒もかからなかった。

「くっそ！」

今まで冷静だったヒョウが悔しそうにしている。カズの方に偏ったディフェンスをしていて、絶対にカズへのボールを渡す気はなさそうだ。

そんな時はうちの頼れるお調子者の出番だ。

「サンキュ」

どこから来たのか味方のオレでもわからない動きをしてパスを受け取るとフリーのままシュートを決めた。

もちろん相手は超攻撃型チームだ。テッペイの抜けたゴール下を狙って容赦なく襲いかかる。ウルフからサルにいったん戻されたボールは次の瞬間クマが持っていた。

ガシャツ！！

ここにきて今日のダンクを決めてきやがった！

2点ビハインドで残り時間は1分しかない。

「速攻だ！」

カズはそう叫ぶとシュースケに大きくコートを縦に割るパスを出した。

しかしそれにウルフとヒョウが追いついている。

シュースケはおかまいなしに跳んだ。

「いかせるかぁー！」

シュースケはそんな気迫をもかわすように、空中でボールを持ち替えるとボールは二人の間からすりぬけていった。

「決まったー！ダブルクラッチ『隼の剣』だぁー！！」

しかしすぐに猛将の攻撃がやってくる。

ウルフがさっきのお返しとばかりにペネトレイトからの攻撃を仕掛けてきた。

すかさずヨシトがヘルプに入る。

だがその裏をつくようにトラにボールが回っていた。

スパッ

「まだまだー！！」

カズがさっきよりも強く叫ぶ。

ここは速攻で決めたかったところだがさすが終盤でも戻りが速い。シュースケにボールが渡った。すぐにウルフが張り付いてくる。

キョーヤを経由してカズに再びボールが戻る。
オレはその間ひたすら逆サイドへ走っていた。

もう走れねえ。止まったら寝ちまいそつだ。

来るのはわかっていた。ここで決めなきゃいけないことも。

まるでいつもの練習と同じような気持ちで、軽く膝を曲げてためる。
手から離れたボールは大きく弧を描いてリングに向かっていく。

シュパッ

ピーー

あの時の夢とはまったく違う意味合いを持つ笛の音が響いていた。

『始まり』の終わり

「それではさきほどの試合、 88 - 87で翔泉高校の勝利となります。」

「ありがとうございます！」

「ハルカ、最後ナイスだったわよ！」

「お前はやっぱりやる男だと思ってたぜ！」

「先輩、あたし泣きそうです。」

「これでタツキ先輩にも喜んでもらえるな」

いろんな言葉をかけてもらっていたが、当のオレは正直言うとまだ実感がわかなかった。ようやく『優勝』を感じられたのは、帰りがけにみんなでコンビニの前でアイスをお腹いっぱい食べている時だった。

あれから念願の全国に行ったおれ達は、あっさり1回戦で負けてしまった。サヤ曰く、「アンタ達らしくて逆によかったわ」と励ましながら皮肉なのかよく分からないことを言われた。

おれ達の『翔泉高校バスケット部』は終わってしまったが、これからもコーハイ達が続いていってくれることだろう。

もちろんオレもまだバスケットはやめる気ないぜ？

『始まり』の終わり（後書き）

今までのご愛読ありがとうございました。

偶然ではあるのですが、ハルカの背番号でありトレードマーク（蜂）である「8」がそろった「88」話でちょうど終わったことに内心びっくりしています。

終わったばかりでアレですが、またバスケットの書きたくてうずうずしています（笑）よかったらこれからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2526u/>

はるか3ptシューター

2011年10月8日13時54分発行